

# 伊賀国府跡・箕升氏館跡 ほか (第5次)



1 9 9 3 • 3

三重県埋蔵文化財センター

## 例　　言

1. 本書は平成4年度農業基盤整備事業地内における埋蔵文化財のうち上野市北部地区、青山町上津地区及び名張市滝之原地区の発掘調査結果を第5分冊としてまとめたものである。

2. 調査にかかる費用には、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他を県農林水産部の負担による。

3. 調査体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査協力 三重県農林水産部農村整備課・同部耕地課、上野農林事務所

上野市北部土地改良区、青山町上津地区土地改良区、名張市滝之原地区土地改良区

財團法人三重県農業開発公社、上野市教育委員会・青山町教育委員会

4. 調査面積、期間、担当者は下表の通りである。

遺　跡　名	面積 (m <sup>2</sup> )	調　査　期　間	担　当　者
伊賀國府跡	500	平成4年11月20日 ～12月14日	主事 吉澤 良
箕升氏館跡（北城遺跡）	2,500	平成4年5月18日 ～8月6日	主事 川戸 達也 〃 森川 常厚
川南A遺跡	960	平成4年7月6日 ～8月13日	主事 吉澤 良 〃 石川 隆郎
向出A遺跡	450	平成4年5月11日 ～6月3日	主事 吉澤 良 〃 石川 隆郎

5. 本書の執筆は各調査担当者が分担し文末にその名を記した。全体の校正、監修は主幹兼調査第1課長 伊藤克幸、同課主査兼第1係長 倉田直純がおこなった。

6. 本書の作成には瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏、常滑市民俗資料館 中野晴久氏の御助言を賜わった。記して謝意を表する。

7. 図面における方位は伊賀國府跡、箕升氏館跡については国土調査法による第VI座標系を基準とする座標北、他は磁北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏約6° 20' (昭和63年)である。

8. 本書に使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。

9. 本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

S A : 柱列・櫛・塙 S B : 据立柱建物 S D : 溝・堀 S E : 井戸 S H : 積穴住居

S K : 土坑 S X : 墓 S Z : 不明遺構・その他

10. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

## 目 次

I. 上野市外山 伊賀国府跡 .....	1
II. 上野市羽根 箕升氏館跡（北城遺跡） .....	23
III. 名賀郡青山町 川南A遺跡 .....	61
IV. 名張市滝之原 向出A遺跡 .....	79

## 挿 図 目 次

I. 伊賀国府跡	
第 I - 1 図 遺跡位置図 .....	1
第 I - 2 図 調査区位置図 .....	2
第 I - 3 図 A地区遺構平面図、土層断面図 .....	3
第 I - 4 図 C地区遺構平面図、土層断面図 .....	4
第 I - 5 図 C地区土層断面図 .....	5
第 I - 6 図 SH 9, SH47遺構実測図 .....	6
第 I - 7 図 SH43, SB10遺構実測図 .....	7
第 I - 8 図 SB48, SB37遺構実測図 .....	8
第 I - 9 図 SD45遺構実測図 .....	9
第 I - 10 図 SD50遺構実測図 .....	9
第 I - 11 図 SD51遺構実測図 .....	9
第 I - 12 図 A地区出土遺物実測図 .....	10
第 I - 13 図 C地区出土遺物実測図 .....	12
第 I - 14 図 C地区包含層出土遺物実測図 .....	14
II. 箕升氏館跡（北城遺跡）	
第 II - 1 図 遺跡位置図 .....	24
第 II - 2 図 遺跡地形図 .....	25
第 II - 3 図 調査区位置図 .....	25
第 II - 4 図 調査前測量図 .....	27
第 II - 5 図 南北断面図 .....	29
第 II - 6 図 調査区平面図 .....	31, 32
第 II - 7 図 SB47, SB49, SB55, SB67, SA48, SA50, SK21 SK26, SK33, SK35, SK38, SD17実測図 .....	33
第 II - 8 図 SE27, SZ28, SD46実測図 .....	34
第 II - 9 図 SK36, SK40, SK41, SD44実測図 .....	37
第 II - 10 図 SX20, SZ31実測図 .....	38
第 II - 11 図 近世屋敷実測図 .....	39
第 II - 12 図 SZ45実測図 .....	40
第 II - 13 図 SZ45断面図 .....	40
第 II - 14 図 SB51, SB52, SB54, SB56, SA53実測図 .....	41
第 II - 15 図 遺物実測図 .....	43
第 II - 16 図 遺物実測図 .....	45
第 II - 17 図 遺物実測図 .....	47
第 II - 18 図 郷内建物変遷図 .....	48
III. 川南A遺跡	
第 III - 1 図 遺跡位置図 .....	61
第 III - 2 図 遺跡地形図 .....	62
第 III - 3 図 調査区位置図 .....	63
第 III - 4 図 遺構平面図 .....	64
第 III - 5 図 調査区土層断面図 .....	65
第 III - 6 図 SH 4 平面図、竈実測図 .....	66
第 III - 7 図 SH 5 実測図 .....	67
第 III - 8 図 SB 6 実測図 .....	67
第 III - 9 図 遺物実測図 .....	69
第 III - 10 図 遺物実測図 .....	70
IV. 向出A遺跡	
第 IV - 1 図 遺跡位置図 .....	79
第 IV - 2 図 遺跡地形図 .....	80
第 IV - 3 図 調査区位置図 .....	81
第 IV - 4 図 遺構平面図、土層断面図 .....	82
第 IV - 5 図 北側石垣実測図 .....	83
第 IV - 6 図 SZ 5 平面図 .....	83
第 IV - 7 図 SZ 6 実測図 .....	84
第 IV - 8 図 遺物実測図 .....	84

## 表 目 次

I. 伊賀国府跡	
表 I - 1 A地区出土遺物観察表	11
表 I - 2 C地区出土遺物観察表	13
表 I - 3 C地区出土遺物観察表	14
II. 箕井氏館跡（北城遺跡）	
表 II - 1 城館一覧表	24
表 II - 2 出土遺物観察表 1	51
表 II - 2 出土遺物観察表 2	52
III. 川南A遺跡	
表 III - 1 出土遺物観察表	71
表 III - 2 出土遺物観察表	72
IV. 向出A遺跡	
表 IV - 1 遺跡名称一覧	80

## 写 真 目 次

I. 伊賀国府跡	
A地区全景（東より）	18
A地区SZ31（南より）	18
C地区調査区域（中央より西）	19
C地区調査区域（中央より東）	19
SA36,SB35,SD43（東より）	19
SH 9（北より）	20
SH 47（北より）	20
中央より東を眺む	20
A地区出土遺物	20
C地区出土遺物	21~22
II. 箕井氏館跡（北城遺跡）	
調査前風景（北から）	55
調査区全景（東から）	55
SB47,SB55,SB67（東から）	56
SA59断面（西から）	56
SE27,SZ28（東から）	57
S Z 31,31（北から）	57
S Z 45（東から）	57
III. 川南A遺跡	
調査前風景（西から）	75
調査区全景（東から）	75
SH 4（南から）	76
SH 4 龜（南より）	76
SH 5（南より）	77
出土遺物	77~78
IV. 向出A遺跡	
調査区全景（東より）	86
調査前風景（東より）	86
S Z 6（西より）	86
S Z 5（東より）	86
出土遺物	86

# I. 上野市外山 伊賀国府跡（第5次）

## I. はじめに<sup>①</sup>

当調査区は上野市の北西部に位置し大字外山字追越に所在する。地形上、木津川の分流である柘植川右岸の河岸段丘上に立地する。

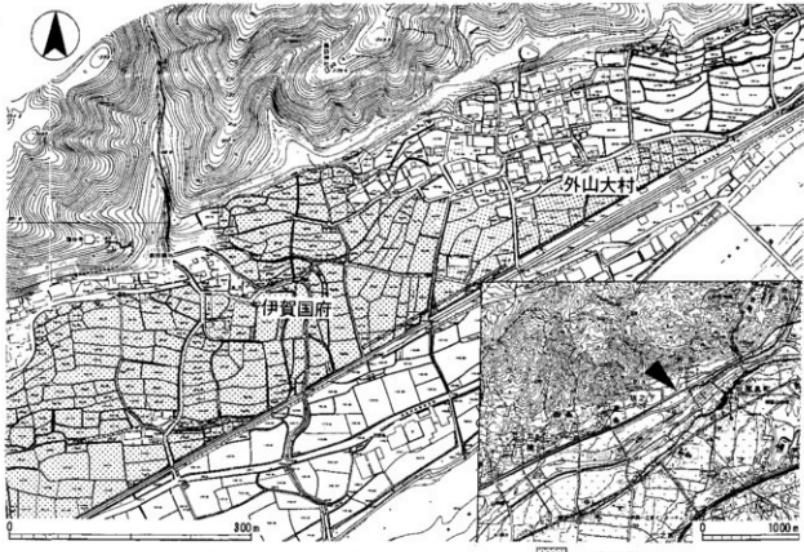
当遺跡周辺は古来より政治、文化の拠点的可能性をもった重要な地域と考えられてきた。<sup>②</sup>近年、行政による緊急発掘により徐々にその実態が解明されつつあるが、その1つに県営は場整備事業にともない三重県教育委員会が昭和63年から継続的に調査を実施してきた伊賀国府推定地がある。

国府とは律令制度の施行にともない全国に設置された地方における國の拠点であり、その運営には中央から派遣された国司が当たり、徵稅權をもつ郡衙の指揮監督、警察權の行使等をおこなった。<sup>③</sup>

国衙は國ともいわれ、正殿、脇殿が「コ」の字

形に配置された空間を「正庁」と呼ぶ。また、その周辺に配置された役所、関連施設を含む空間を「国衙」（國府）、さらにその周辺に推定される四方の都市的な空間を「国府」と呼ぶことが多い。当調査区は国府域（國府の周辺）にはいる。

昭和63年度から始まった國府推定地調査は柘植川の左岸の平地部を中心に行なわれたが、確くたる成果が得られなかった。平成元年度になって国町地区に試掘があり、余良～平安時代の濃密な遺構、遺物が認められた。そのため、にわかに國府への期待が高まり、平成3年度には当調査区から西へ約120mの地点で、主軸方向が真北を向く径1m前後の方形の柱穴をもつ礎石建ちの大型建物が「コ」の字状に検出された。また、建物の周囲を区画する溝等も



第I-1図 遺跡位置図(1:50,000)、遺跡地形図(1:6,000)

…遺跡範囲

検出され、さらに官衙で日常使用される土器も出土したことから国府の中心部分（正序）としてほぼ確定された。

古墳時代には外山地区の北側低丘陵の尾根上に中期～後期にかけての古墳群（外山古墳群、外山鷺蒴

古墳群等）が形成された。また、柘植川の対岸には三重県で最大級の御墓山古墳（古墳時代中期）が築造されている。これらのこととはこの地が古来より政治・文化の中心地域であったことを一面で物語っている。

## II. 遺構

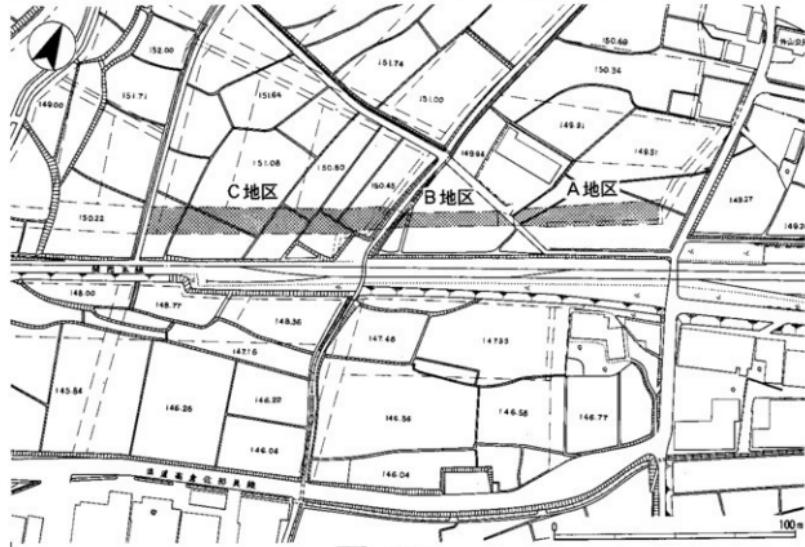
今回の調査区は、平成3年度に県営は場整備事業にともない排水路部分を調査した地点（外山大坪遺跡）から西へ延長したところにある。

調査地点の地形は北側には低丘陵が東西にはしり、関西線より南側では柘植川の侵食を受けて河岸段丘を形成しおり、一段低くなっている。調査範囲は河岸段丘上の縁辺部に東西約200m、幅約4m、面積は約900m<sup>2</sup>にわたる。調査の都合上、東からA、B、Cと3地区に分け発掘調査を行った。以下地区別、遺構別に概述する。

### A地区の遺構

#### 1. 概略および土層

A地区の標高は約148mで、調査区の中で一番低い地点である。周囲との比高差は2m程度ある。そのため北斜面から流れ出る雨水、地下からの浸透水が溜まり易い場所となっている。A地区土層の基本層序は第1層：耕土、第2層：黄灰色土、第3層：灰褐色土、第4層：褐色粘質土、第5層：灰色粘質土（褐色混じり）であり、遺構検出面は第4層である。東側のグリットA-5より第4層は緩やかに落ち込んでいく灰色砂礫土（№8）に変わる。灰色砂礫土の下は青灰色砂土（№13）となり遺物を含まない地山となる。S Z31より西では遺構は少くなり、東端から30mの地点で第2、第3層がなくなり第4層上に耕土が載る。これは2層、3層が削平を



第I-2図 調査区位置図 (1:2,000)

受けたものと考えられる。

A地区では性格不明の遺構（S Z31）、土坑2基、溝3条を検出した。

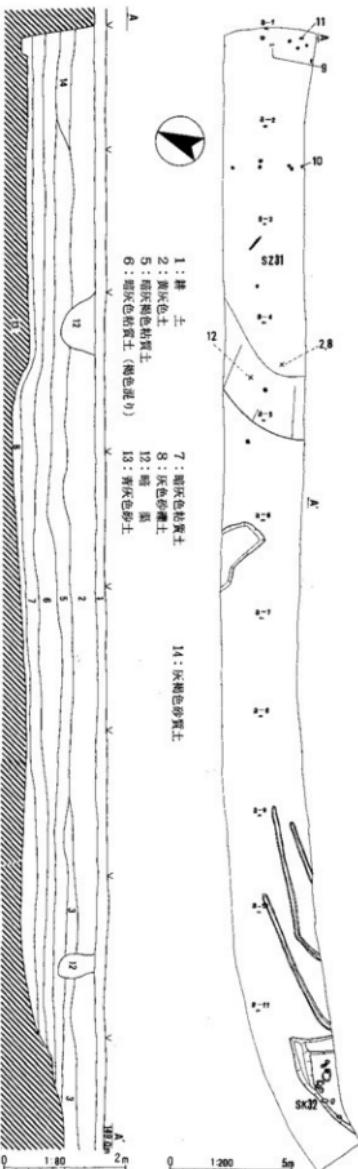
## 2. 性格不明の遺構（S Z31）

調査区の東端より西へ16m程の地点まで広がる遺構を検出した。S Z31の肩は西から東に緩やかに傾斜し、その比高差は0.30mである。また、北から南に向かって緩やかな傾斜（比高差はわずか14cm）をもつ。これは地山面がそれより西の地点から下り勾配を持ち始めていることと考え合わせれば、丘陵間の谷部の自然地形を利用してできたものと思われる。さらに、S Z31の肩の部分は大きく北方向に弯曲している。調査区が線掘りのため正確な状況把握はできないが、東端でもS Z31の肩部は検出できないことから東方向へ延びていると考えられる。調査区外東へ32mの地点は平成3年度調査地点であることから、S Z31の範囲はそれ以上広がるとは考えられない。

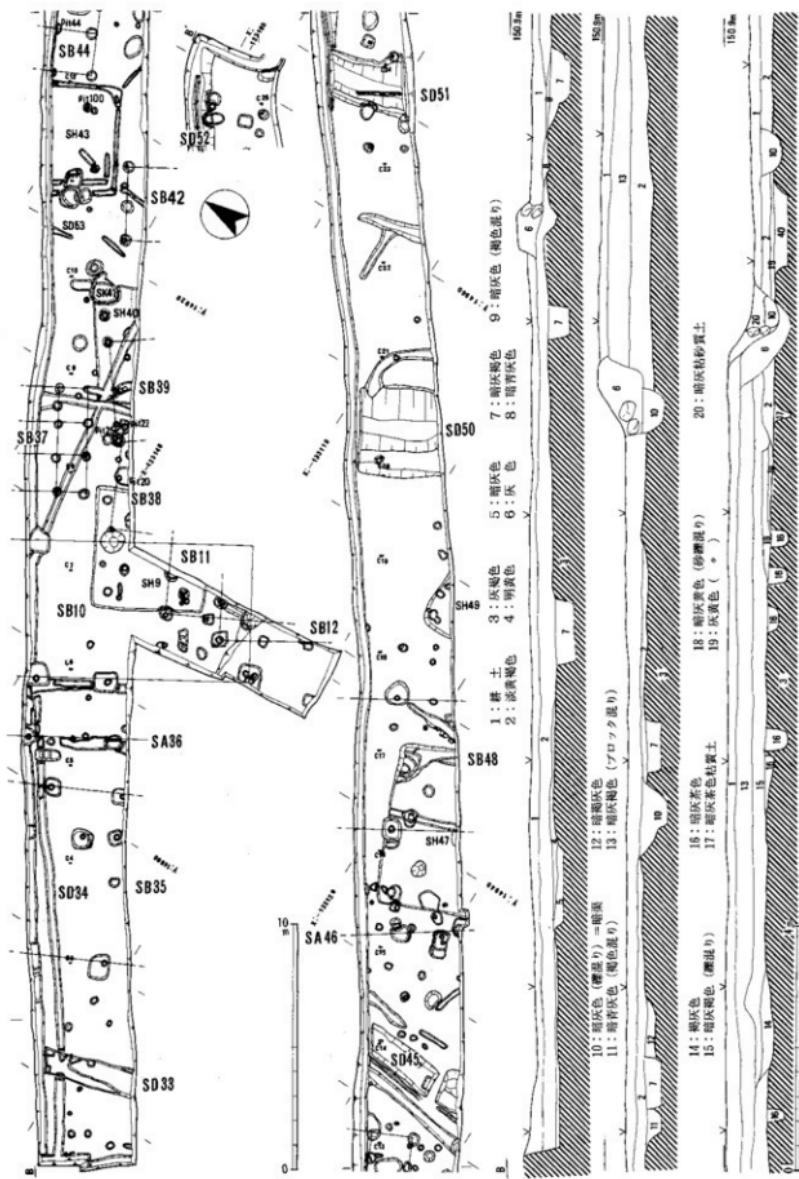
第2層（暗灰黄褐色土）の下は暗灰色を基本とする土層（№5～7）が暗灰色砂礫土（№8）まで約0.7m堆積しており、3層に分かれれる。下の層ほど灰色の濃さを増す。この層の中には中世の土器（4～6）の遺物が混じる。S Z31には木製の杭も打ち込まれており、杭は暗灰色土（№6）中より打ち込んだものと暗灰色砂礫土（№8）上より打ち込まれたものとの2種類が認められた。また、杭は加工痕を残すもの（9～11）と丸太状のものがある。丸太状の杭は暗灰色土（№6）中から打ち込まれており、土層№8より25cm高い位置で出土するものもある。これは時期差によるものと考えられる。

暗灰色砂礫土の上面は小砾が（小石～拳大の石）一面に広がっており、この上面から須恵器杯蓋（1）、杯身（2）、腹（3）、木製あて具（8）と木片が多く出土した。また、グリットA2の西側では地山面がやや上がっており、暗灰色砂礫土も一段上がって検出された。同様にこの上面からも木片が出土している。

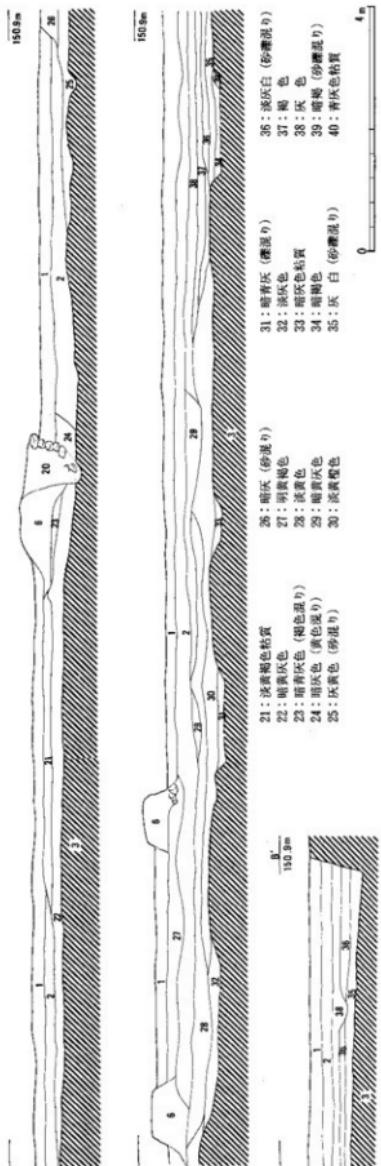
3. 溝（SD） 調査区の西側で3条の溝を検出した。いずれも幅20cmに溝ない、深さ5～10cmの細長い溝である。検出面直上が耕土であることから耕作溝と考えられる。



第1-3図 A地区平面図(1:200)、  
S Z31土層断面図(1:80)



第I-4図 C地区地盤構造平面図 (1:200)、土層断面図 (1:80)



第I-5図 C地区土層断面図 (1 : 80)

**4. 土坑 (S K32)** 調査区の西端では不定形な土坑の一端を検出した。土坑は東西に約4m、南北は1.7mの範囲であった。土坑内は段差があり、20～50cmの河原石が検出された。検出状況から人為的な配置を認めなかった。ここより中世の土器（瓦器片）が出土した。

## B地区の遺構

A地区の西隣に幅約2m、長さ28mの調査区を設定。現地形（標高149.5m）はA地区からB地区にかけ西方向に緩やかに比高している。調査の結果、西端に明確な遺構、遺物は認められなかった。しかし、西端に溝らしき遺構の一部を検出した。この溝状の遺構は西端が畦畔と排水路のため削平が著しく明確ではなかった。また、この溝の肩は現検出面より40cm高く、その高さで検出するなら耕土直下となる。そのため遺構が削平されている可能性が高い。

B地区は西端で一段下がって平坦面（水田）を築いている。これは本来西から東に向かってなだらかに傾斜する斜面を削って平坦にしたと考えられる。

## C地区の遺構

### 1. 概略および土層

C地区（標高150.2m）は3地区の中で最も高い位置にあり、丘陵状の頂点に開けた平坦部にある。そして、C地区的西端を頂点として東西に緩やかに傾斜していく。調査は幅4m、長さ100mのトレチを入れておこなった。検出面の東西端の比高差は0.64mあり、東に向かって徐々に低くなっている。

C地区は東西に約100mと長いことから高さの異なる畦畔を幾つも横切ることになり、土層の複雑な所と単純な所ができた。特に東側では地山面に対し似た土が幾層（遺物を含む層）にも堆積しているため遺構検出が難しい状況にあった。各土層名は図面を参照するとして、地山面（検出面をさす）は灰褐色土（No.3）である。遺構面までの深さは調査区西端で耕土から40cm、中央付近で40～60cm、東端で70cm程度である。

包含層からの遺物は概して少なく東にいくほど包含層遺物が出る傾向にある。西側では遺構面までが浅いので上部が削平を受けている可能性があり、そ

のため包含層遺物が少ないと考えられる。東側では地山面がスロープ状に下がっていくため、遺物を含んだ土で逆に盛土をしている可能性がある。堆積層から出土する遺物は古墳時代後期から平安時代前半のものであるが、その多くは古墳時代のものである。

検出した主な遺構は掘立柱建物10棟、竪穴住居5棟、溝6条、土坑、小穴等がある。

## 2. 竪穴住居

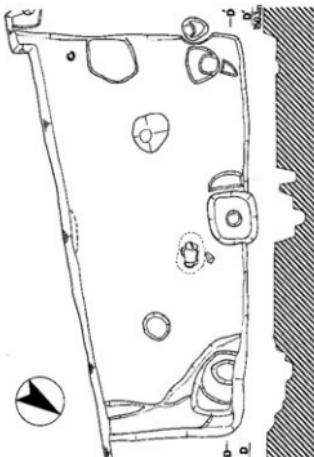
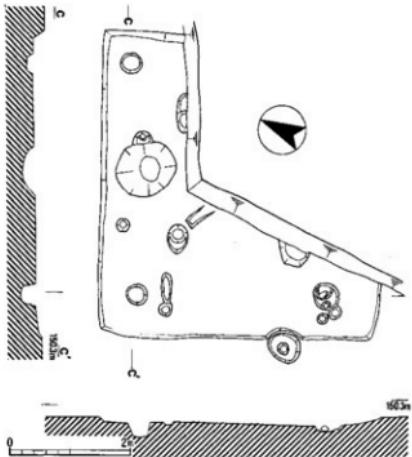
S H9 東西の一辺が4.9m、南北の一辺が4.5mの東西にやや長い方形をした竪穴住居を検出した。また、四隅に明瞭な主柱穴が確認できた。床面までの深さは西端で5cm、東端で17cmと東での残りがよい。主柱穴は直径約30cm、深さ22~10cm程度である。貯蔵穴や竈の有無は確認できなかった。周溝はない可能性が高い。S H9からは土師器壺(17)、須恵器の細片等が出土した。

S H40 S H9の東側に東西に4.8m、南北に2m以上の方形を呈する住居跡を検出したが、床面までの深さは5cm前後と極めて残存状態が悪い。また、S H40をほぼ東西に横切る現在の暗渠排水溝があり、さらに検出を困難にした。そのため主柱穴、貯蔵穴などは確認できなかったが、S H40の東側の壁に炭混じりの赤色土を検出した。これは竈の痕跡の可能性を示していると考えたい。遺物として土師器片が

僅かばかり出土している。

S H43 植査区中央付近で検出したが、上部の削平が著しく、この竪穴住居の床面のみの検出になった。S H43は周溝を巡らしており、唯一その部分で大きさが確定できた。東西が4.3m、南北が2.9m以上になり内側にもう一つ周溝をもつ。これは拡張によって生じたとも考えられる。西側は後後に土坑が切り込んで底部のみを残している。南側に2つの主柱穴が確認でき柱穴(Pit100)から完形の土師器杯(23)が出土した。周溝は東隅の排水溝につながる。周溝内から土師器・壺(40)が出土した。

S H47 検出した竪穴住居の中で規模が最も大きく、東西の辺の長さが6.5m、南北の長さが3.8m以上になる。床面までの深さは西側で約18cm、東側で約10cmと西側の残りが良い。主柱穴は住居内のやや内側に認められ、直径50~60cm、深さ20~40cmの円形である。また、北東隅に土坑(長軸1.4mの長円形、深さ40cm程)を検出し、土坑より東壁に沿って周溝がのびていた。当初、竈と思われた部位はS B48の柱穴であり、S H47との切り合いは埋土からは判断できなかったが、状況からS H47が柱穴が切った可能性が高い。また、竈の形跡を認め得なかった。中央部に観察用畦を残したが、その北寄りに焼土と炭化物の混じったブロックを検出した。



第I-6図 S H9, S H47遺構実測図 (1:80)

そのブロックの中から火を受けた土師器の壺(48)が出土した。また、この住居より比較的良好な遺物が出土した。

S H49 S H47の東側で住居の一角を検出した。調査区の端のため規模、形態などは不明。そのため土坑の可能性もあるが、角の部分がほぼ直角方向に曲がることから堅穴住居の可能性が高いと思われる。ここより土師器の破片が出土した。

### 3. 挖立柱建物

S B35 調査区の西で大型の掘立柱建物の一部を検出した。これは一辺が約0.7m~1mの方形状の掘形をもつ柱穴であり、柱痕跡を残す。柱痕跡は概ね直径20cm程度と掘形に比べ小さい。特に西側の柱穴の掘形は約1mと大きく、東の柱穴とのバランスを欠く。調査区の幅が4mと狭いため正確な建物方向や規模は不明であるが、検出状況からおよそ建物は南北に向いていたと考えられる。棟方向はN25°Wとなり西へや振っている。また、その規模は桁行2間以上(6m~)×梁行3間、又は4間(いずれも6.9m)の側柱建物が想定できる。柱間隔は桁行で3m等間、梁行は2.3m、又は1.73m等間である。掘形の埋土は暗灰褐色土で柱穴(Pit8)からは

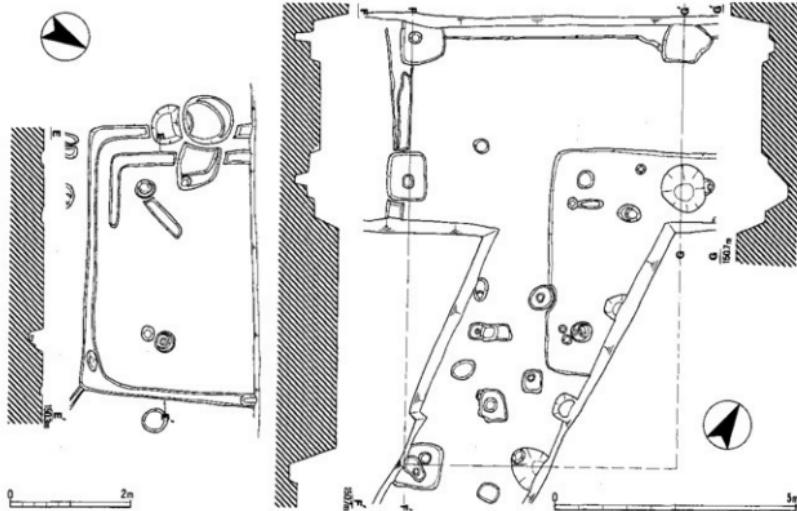
須恵器の細片、土師器杯(22)が出土した。遺物は古墳時代後期のものである。

S B10 S B35と同じく掘形の一辺が1mの方形状を呈する大きい柱穴で20~30cmの柱痕跡を残す。平成2年度の調査で確認された遺構と併せて考えれば、桁行3間以上×梁行2間の南北棟の掘立柱建物であることがわかった。棟方向はN30°Wで西に振る。柱間隔は桁行が約3m等間、梁行が約2.75m等間で柱振りはよい。掘形埋土は暗灰褐色土で須恵器片、土師器片が出土した。

S B11 南北に入れた調査坑の東壁で建物の北西隅を検出した。建物方向、規模等は不明である。柱穴は径50cm前後の規模で円形のもの、方形のものが認められた。柱間隔は南北が1.7m等間、東西が1.6mであり、柱通りも良い。

S B12 S B11と重複して立つ掘立柱建物で建物の北西隅を検出した。S B11と同様に子細は不明であるが、柱穴は径50cm前後で方形状を呈し、柱間隔は南北が1.8m等間、東西が1.6mである。

S B37 調査区中央やや西よりに2間以上×3間の総柱建物と思われる建物を検出した。柱穴は30~40cmの円形をし、柱痕跡をもつものもあった。遺物



第I-7図 SH43, SB10遺構実測図(1:80, 1:100)

はなかった。棟方向はN32°Wである。

S B38 S B37の南側で検出した建物であるが、柱穴は60~80cmの比較的大きな梢円形の掘形をもつ。柱痕跡は20cm前後で建物の北端の妻側を検出した。この建物は桁行1間以上×梁行2間(2m等間)と考えられるが、確証に乏しい。この掘形(Pit20)より須恵器の高杯(25)、同柱穴(Pit27)より杯身(20)が出土した。

S B39 S B38と重複するように建つ桁行不明×梁行2間の南北棟の掘立柱建物である。柱穴は30cm前後とやや小さく円形を呈する。棟方向はN36°Wである。

S B42 棟方向を南北にもつ桁行不明×梁行2間のN32°Wの南北棟の掘立柱建物で、柱穴は40~50cmの円形、柱間間隔は1.5m等間で東西両棟の柱穴に柱痕跡を残す。

S B44 調査区中央付近で桁行1間以上×梁行2間の南北棟の純柱建物を検出した。棟方向はN19°Wで柱間間隔は桁行が1.7mと等しく、梁行は東柱がやや西に寄り1.7m+2.3mとなる。この建物の柱穴(Pit44)より須恵器の杯蓋(18)が出土した。

S B48 調査区の中央や東で大型の掘立柱建物の一端を検出した。柱穴の掘形の一辺は80~96cmで隅丸方形を呈する。検出状況から柱の主軸は南北を向き、N30°Wである。桁行不明×梁行2間で柱間間隔は桁行3m、梁行約2.75mと想定できる。建物の規模、主軸方向などS B10と類似すると思われる。

#### 4. 柱列

S A36 S B10に平行して立つ。柱穴の掘形は70

cm前後で方形を呈する。柱間は広く約3.5mを計り、主軸方向はN30°WでS B10と並んで建っていた可能性がある。掘形から須恵器の杯身、蓋の破片が出土した。

S A46 柱穴の掘形が約1mと大きく方形を呈し、柱間は2.5mである。主軸方向はN35°Wで西に振れる。遺物は出土したが細片のため不明。

#### 5. 溝

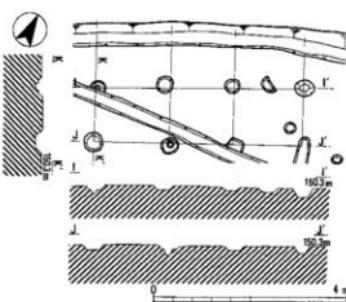
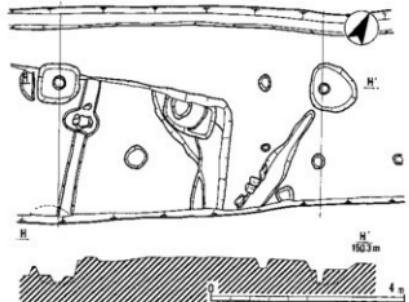
S D33 溝の上部は削平されており、底部付近が検出された。溝幅は約1m~1.2m、深さ10cm前後と浅い。溝方向はN17°Wを向く。埋土が暗灰色をし、顯著な遺物は出土しなかった。

S D34 溝査区西側で東西方向に延びる幅30~40cm程度、深さ10~20cmの溝を検出した。溝は西端から19.5m東へいった所で北に曲がる。埋土は暗灰褐色土で土師器壺(26)・高杯(34)が出土した。

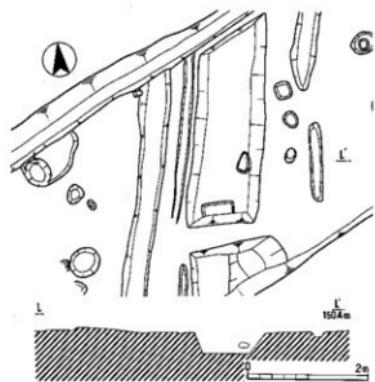
S D45 調査区のほぼ中央を南北方向に流れる溝で幅約1.1m、深さは北側で30cm、南側で60cmと南に下り勾配がつく。溝方向はN4°Eを向く。明瞭な溝の肩を有し、暗青灰色粘質土の埋土である。溝からは瓦の破片(41, 42)が出土した。また、同時に溝肩の付近から須恵器の杯身(32)も出土した。

S D50 溝幅3.8m、深さは最深部で40cm、緩やかな傾斜をもつ溝である。溝は南側がより深くなつて水が北から南に流れていったことを示す。溝の埋土は暗灰色土でS H, S Bの埋土と異なる。溝上部より須恵器の壺(39)が出土した。

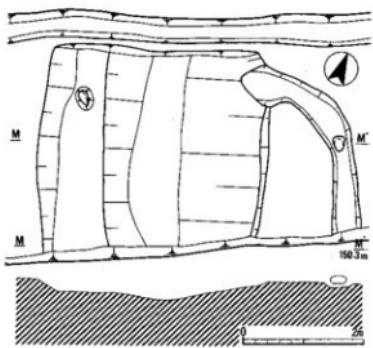
S D51 S D52を切ってできたS D51は幅2m、深さ約40cmでほぼ南北方向に流れていったと考えられ



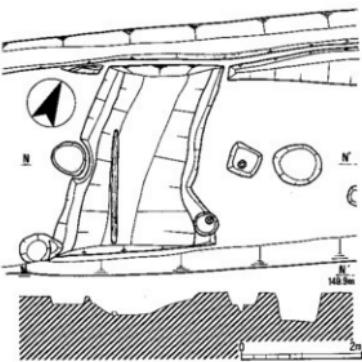
第I-8図 S B48, S B37実測図(1:100)



第I-9図 SD 45実測図 (1 : 80)



第I-10図 SD 50実測図 (1 : 80)



第I-11図 SD 51実測図 (1 : 80)

る。溝の西側には長さ1.8m、直径12cmの丸太の木を検出した。先端部を削ったり、加工したりした痕跡は認められず、折れてできたものと思われる。検出の状況から自然流木とも考えられる。この溝より須恵器の杯身(33)、杯蓋(29)、土師器の壺(38)が出土した。

S D52 調査区東端の北壁に沿ってわずかに検出できた溝である。溝は東端で幅約0.8m、深さ25cmを計り、徐々に流路方向を北へ向けていく。S D52からは須恵器の杯身(30, 31)、土師器の壺(37)、高杯(35)、壺(28)、ミニチュア土器(36)等が出土した。

## 6. 土坑

S K41 直径約1mの円形を呈し、深さ10cm程度と残りは良い。S H40と切り合って検出したが、状況から堅穴住居が埋没した後で土坑が掘られ、最深部が堅穴住居の一部を削ったと思われる。底面より須恵器の杯身(45)、杯蓋(43)が重なるように出土した。また、土師器壺(46)の口縁部も同時に出土した。

## III. 遺 物

3地区から出た遺物はコンテナバットで20箱程度であった。その中でA地区では土器よりも木製品が多く出土した。木製品は製品として明瞭なものは少なく、建築部材を杭に転用したものが多い。その中にあって木製あて具は木製品としては一級のものであった。遺物はA地区とC地区から出土したのみで、B地区からは出土しなかった。以下に地区毎、遺構毎、時代順に述べる。

### 1. A地区の遺物

遺物の出土場所はS Z31が大半を占め、実測はS Z31出土のものがほとんどである。遺物の時期は古墳時代後期、飛鳥時代、平安時代後半のものである。

#### ① 古墳時代後期の遺物

##### A. S Z31出土の遺物

###### a. 土器

須恵器 杯蓋(1) 天井部と体部との区別なく

丸みをもって口縁部につながる。

須恵器 杯蓋（2） 受け部はやや外傾気味で、立ち上がりは短く内傾する。

須恵器 越（3） 頸部から上を欠き体部は偏平な橢円形を呈す。体部上半に沈線を巡らし透孔をいれる。

#### b. 木製品

あて具（8） あて具は全長22cm、身の径11.0×11.6cm、厚さ5cmとほぼ円形、柄の長さは17.0cm、柄の径3.8cm、柄の中心は材の中心よりずれる。また、アタリ面は同心円等の文様を刻まず、自然年輪である。年輪部が使用により浮き出ている。木製の無文あて具と思われる。

転用机（9～12） 本来の用途は不明であるが、大きさや抉りから建築部材の可能性がある。（9）は全面に加工痕を残し、断面が長方形を呈す。一方の先端は各面に沿って削て尖らし、杭を意識した造りになる。（10, 11）は部材の両端を欠くが、抉りがみられ一方の端部を削り尖らす。（12）は全体的に枯れ細っており、一方の上端に抉りがみられる。

#### ② 飛鳥時代の遺物

##### A. 調査区南側土層からの遺物

須恵器杯蓋（4） 器径が7.7cmと小さくなり、口縁端部内面にかえりをもち、かえりは縄部より下方へ突出する。

##### ③ 平安時代の遺物

##### A. S Z31出土の遺物

###### a. 土器

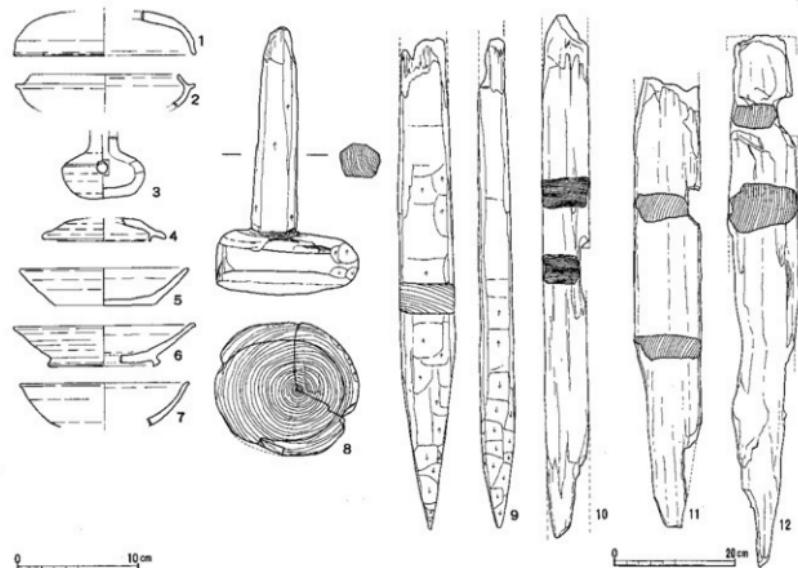
土器皿（5） 底部外面に糸切り痕を残すクロ土器皿。体部は直線的に外傾し端部は薄くおさまる。

灰釉陶器 皿（6） 内外面に灰釉が被り、口縁端部は外反する。

灰釉陶器 槌（7） 器壁は薄くゆるやかに内弯しながら端部で外反する。釉はつけかけ。

## 2. C地区の遺物

遺物の多くはC地区から出土しており、コンテナパットで13箱であった。遺物は遺構からのものが多く、包含層からの遺物は少ない。また、包含層には



第1-12図 A地区出土遺物実測図 (1~8=1:4, 9~12=1:8)

中世の遺物が混じる。遺物の時代は古墳時代中期～後期のものが殆どである。

#### ① 古墳時代の遺物

##### A. 穫穴住居（SH）出土の遺物

SH48 須恵器 杯身（13～15）で、受け部が短く水平方向にのび、立ち上がりはやや内傾しながら高い。口縁端部内面に明瞭な段を有す。（14）は体部全体がほぼ球形を呈す。

土師器 壺（48） 口縁部を欠き、残存長24cm、体部径27cmと比較的大きな壺である。全体にスジが付着する。

SH9 土師器（17） 体部外面にハケ目を有し、口縁部は短く外反して口縁端部上面に平坦面をつくる。S字状口縁壺の退化形態と思われる。

##### B. Pit（柱穴、掘形）からの遺物

須恵器 高杯（16） 脚部を欠くが、杯部のつくりは杯身（13～15）と同じと考えられる。

須恵器 杯蓋（18） 天井部と体部との境に綫をもち、口縁端部内面に段を有す。

須恵器 杯身（19～20）（19, 20）は口径が同程度で内傾化する高い立ち上がりの口縁端部内面に段をもつ。（21）は口径大きく口縁部は丸くおさまる。

土師器 杯（22～24）（22）は体部が丸みを帯び、端部は薄く終わる。（23）は口縁端部をやや外反させ内面に内傾した面をつくる。体部外面はヨコ

ナデを施し、内面は丁寧なナデで器面を平滑に仕上げている。（24）の口縁部は（23）の退化したものか。

##### C. 溝（SD34, 45, 50, 51, 52, 53）出土の土器

土師器 増（26, 27）（26）は体部から口縁部にかけて緩やかに外反し端部は丸く終わる。つくりが粗雑である。（27）は球形の体部に直線的に外傾する口縁部がつく。

土師器 壺（28） 体部から頸部にかけゆるやかに湾曲し短く外反する口縁部がつく。端部は丸おさまる。

須恵器 杯蓋（29） 天井部と体部との間に綫をもち、口縁端部内面に段を有す。

須恵器 杯身（30～33）（30, 32）は共に立ち上がり高く口縁端部に段を有すが、（31）は口縁端部が丸く終わる。（33）は内傾する短い立ち上がりに丸く終わる口縁端部がつく。

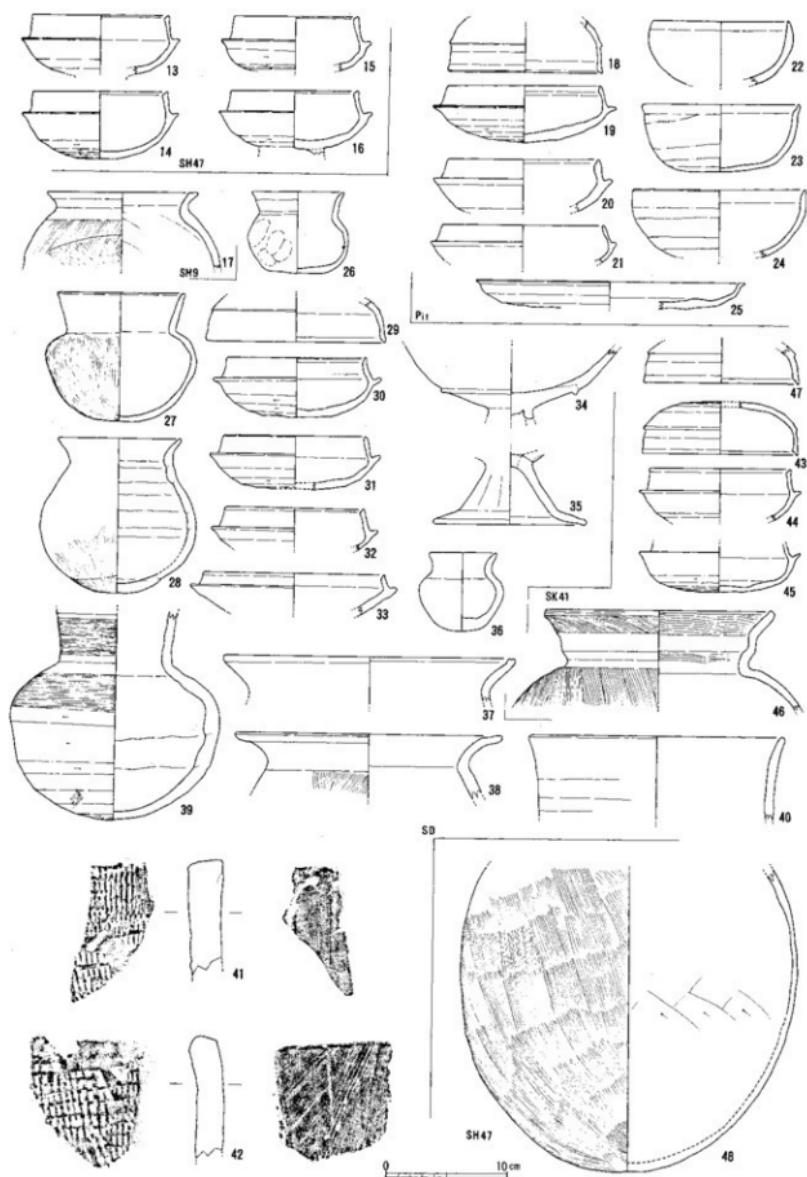
土師器 高杯（34, 35）（34）は杯の体部と底部が接合されており、底部外面に突起状の帯が巡る。（35）は直線的に外傾する脚柱部にくびれる裾部がつく。裾部と脚柱部の接合痕を残す。

土師器 ミニチュア壺（36） 磨削著しく調整不明。手捏による成形と思われる。

土師器 壺（37, 38） いずれも口縁部の一部が残存しているに過ぎないが、（37）は口縁部が強く外反し端部先端がねる。（38）はゆるく外反し端部

番 号 分 類 番 号	器 種	出土位置 遺 構	表 量 (cm)		調査技術の特徴	胎 土	燒 成	色 調	残 存 (%)	備 考		
			口 徑	器 高								
1 1-02	須恵器 杯蓋	A4 SZ-1 (下)	14.8	—	—	天井部～口縁部にかけヨコナダ、内面ヨコナダ	密	硬	内：灰白(N7) 外：灰(SY 5/1)	1/10		
2 1-03	+	杯身	A4 SZ-1	12.1	—	—	内外面ヨコナダ。	*	*	灰(N4)	1/8	
3 1-07	+	謎	A3 SZ-1	—	—	体部径 6.7	底外部圓軸へラケズリ、他口 ヨコナダ。	*	*	灰白(N7)	1/2	体部上半に沈縫一条
4 1-01	須恵器 杯蓋	A6 北壁土槽	7.7	—	—	天井部1/2四輪へラケズリ、他 ヨコナダ、内面透源オサエ	*	*	灰白(N7)	1/3	宝珠つき彫刻	
5 1-06	土師器 茶	A4 SZ-1 (中)	13.9	3.0	底直径 7.9	正面外側赤褐色、内面透青ヨコ ナダ	やや密	良	暗黄褐色 (10YR 6/4)	1/8	ヨコ土漬跡	
6 1-05	灰釉陶器 盆	A3 SZ-1	14.9	3.3	高台径 8.8	内外面ヨコナダ。	密	硬	灰白(2.5Y 8/1) 陶灰白 (7.5Y 7/2)	1/4	みごみ涙溝～体部外側まで 施釉	
7 1-04	灰釉陶器 茶	A3 SZ-1	13.8	—	—	内面～体部外側ヨコナダ。	*	*	灰(7.5Y 6/1)	1/6	施釉(内、外側)	

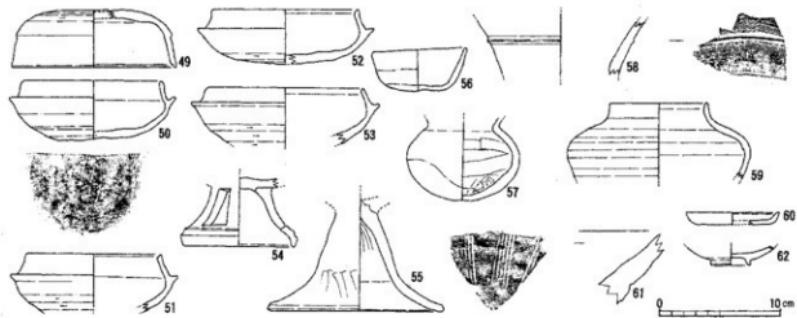
表I-1表 A地区出土遺物観察表



第I-13図 C地区出土遺物実測図 (1 : 4)

番 号 り 番号	登録 名	器 種	出土位置 遺 構	出 量 (kg)			調整検査の特徴	筆 上	鉛皮	色 調	残存 (%)	備 考
				11 径	12 高	13 その他の 他						
13	6-03	和志器 环身	C16 SH47	11.1	—	—	底部外側一帯落丁半軸ヘラケズリ、靴ロクロナダ	密	硬	灰白	1/5	
14	5-01	× ×	× ×	10.9	5.5	—	×	×	×	灰	1/2	底部外面に「ヘラ記号」の ようなものあり
15	6-01	× ×	C15 ×	10.1	—	—	×	×	×	灰	2/3	
16	6-02	× 高杯	× ×	10.3	4.4	—	底部外面一帯落丁半軸ヘラケズリ、脚合部、底ロクロナダ	×	×	×	—	脚部は欠損
17	6-05	土加器 壺	C6 SH9	12.0	—	—	口縁部ヨコナデ、内面ナダ、外 面ハケ目	良	良	内外黒墨	1/4	台付變か
18	3-04	和志器 环身	C12 pit46	—	—	—	内外面ロクロナダ、	密	硬	灰白	1/10	
19	3-01	× 环身	C36 pit87	12.4	4.6	—	底部外半周輪ヘラケズリ。靴ロ クロナダ。	やや密	×	×	1/6	
20	3-03	× ×	C8 pit27	12.2	—	—	体部外端ロクロナダ。体部外 面下半より回転ヘラケズリ。	密	×	×	1/10	
21	3-05	× ×	C24 pit87	13.2	—	—	体部内外面～口縁部ロクロナダ	×	×	灰	1/6	
22	2-01	土加器 环	C4 pit8	11.0	—	—	口縁部ヨコナデ、内外面ナダ、	良	良	趙城	1/5	
23	6-04	× ×	C11 pit100	12.4	5.6	—	口縁部ヨコナダ、内外面ナダ、 底部外端ヨサエ。	×	×	禮	完	整土接合部
24	3-02	× ×	C8 pit25	14.0	—	—	口縁部ヨコナデ、内面ナダ、外 面ヨサエ	やや良	×	内：灰黄褐 外：模	1/2	×
25	2-02	和志器 高杯	C7 pit30	22.0	—	—	底部外西下半回転ヘラケズリ、 底部外端ヨサエオサエ。	密	硬	灰白	1/6	脚部は欠損
26	15-04	土加器 壺	C2 S D34	7.5	6.7	体部厚 S.3	口縁部ロクロナダ、内外面ヨサエ	やや粗	良	淡黄	完	体部外西半周輪付着粘土接合
27	16-01	× ×	C10 S D53	10.2	10.5	* 12.4	口縁部ヨコナダ。体部内面ヨサエ 外端ヘケ目	×	×	内面：黑 外面：灰黃褐	×	底部外面に黒斑
28	15-01	× ×	C24 S D52	10.0	12.8	* 12.8	口縁部ヨコナダ、外面ハケ日綴 ヨサエ	粗	×	禮	×	ハケ目綴2本/cm 内側に粘土接合部
29	13-03	和志器 环身	C23 S D51	14.5	—	—	内外面ロクロナダ、	密	硬	灰	1/8	
30	15-02	× 环身	C24 S D52	11.6	4.9	—	内面から口縁部、外面トモロ クロナダ、外面下半回転ヘラケズリ。	やや密	×	灰白	完	口縫全体が歪む
31	13-01	× ×	× ×	11.6	4.3	—	×	×	×	×	1/10	
32	16-02	和志器 环身	C13 S D45	11.4	—	—	体部外西下半回転ヘラケズリ、 靴ロクロナダ。	やや粗	硬	淡青灰	1/10	
33	13-02	× ×	C23 S D51	15.0	—	—	内外面ロクロナダ、	やや密	×	灰白	1/10	
34	14-03	土加器 高杯	C3 S D34	—	—	—	内外面カタ、	やや粗	良	趙城	体部厚 のみ	杯下部に突筋をつける
35	13-05	× ×	C24 S D52	—	—	基盤 13.0	脚部ハケ目後、ナデ、靴端部ヨ コナダ、	×	×	淡黄褐	脚部のみ	脚部と握部を接合
36	13-04	* ミュチャラ型	× ×	5.5	6.4	—	口縁部ヨコナダ、他不明	×	×	×	完	摩滅著しく調査不確
37	14-02	× 壺	× ×	23.8	—	—	口縁部ヨコナダ、	×	×	×	口縫部 のみ	
38	14-01	× ×	C23 S D51	22.0	—	—	口縁部ヨコナダ、体部ハケ目内 側ナダ、	×	×	×	1/8	
39	15-03	和志器 壺	C20 S D50	—	西島 17.0	休運往 17.2	休運往 下半回転ヘラケズリ、 靴ロクロナダ、上半カキ目、内 面ヨサエ	密	硬	灰白	3/4	脚部上部に旋織一束
40	5-02	土加器 盆	C11 SH43 SD43	20.6	—	—	内外面カタ、	やや良	良	淡黄	1/10	粘土接合部
41	16-03	瓦 平瓦	C13 S D45	—	—	—	内面ヨサエ、外面タキ板、端 部ヘア切り	やや粗	×	灰白	1/20	×
42	17-01	× ×	× ×	—	—	—	内面、右目換接状工具ヘナダ る外側 タキ板、	×	×	×	×	

表 I - 2 表 C 地区出土遺物観察表



第I-14図 C地区包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

遺 物 番 号	性 格	出土位置 番 号	出 土 方 向	法 面 (cm)	調 整 技 術 の 特 徴	胎 土	燒 成	色 調	残 存 (%)	備 考	
43 7-01	須磨器	杯蓋	C 9 SK41	12.7 4.3	—	天井部上平回転ヘラケズリ、他 クロナデ、	青	硬	灰白	2/4	
44 7-03	〃	杯	C 9 SK41	11.5	—	体部下平回転ヘラケズリ、他 クロナデ、	青	〃	灰	1/4	
45 7-04	〃	杯身	〃	11.5	—	体部下平回転ヘラケズリ、他 クロナデ、	青	〃	〃	1/4	
46 8-01	土器	盃	〃	18.5	—	口縁部一ヶ月鉢ヨコナギ、体部 外面ハケ目、内面ナギ	青	良	内：深褐色 外：灰褐色	口縁部 完形	
47 7-02	須磨器	杯蓋	C24 SK82	12.7	—	体部口縁部ヨコナデ	青	硬	灰	1/8	
48 4-01	土器	甕	C16 SH48 (J.)	—	残存 24.0	—	内面オサエ、ケヅリ、外面ハケ 目	青	良	粘着焼	粘土複合焼
49 11-01	須磨器	杯蓋	C24 上面	13.5 (4.7)	—	天井部1/2以上回転ヘラケズリ、 他ヨコナデ、	青	硬	青灰	1/2	
50 10-04	〃	杯身	〃	10.7 (4.9)	—	体部2/3以上回転ヘラケズリ、 他ヨコナデ、	青	〃	〃	1/4	
51 12-03	〃	〃	C12 上面	11.0	—	体部下平回転ヘラケズリ、他 クロナデ、	中や青	硬	灰	1/6	
52 10-02	〃	〃	C24 結水溝	12.0	4.5	—	青	〃	〃	〃	
53 12-01	〃	〃	C 4 上面	12.7	—	—	中や青	〃	灰白	1/5	
54 10-01	〃	高杯	C14 〃	—	脚部 脚部径 4.8 9.0	脚部内外面ヨコナデ、	青	〃	〃	脚部の み完形	
55 9-04	土器	甕	—	9.0 14.8	—	脚部ヨコナデ、脚部外周工具 によるナギ、内面オサエ	中や良	〃	粘着焼	1/4	
56 10-03	〃	ミニチャーピング	C24 上面	7.6	3.4	内面ナギ、他オサエ、底部 外周工具オサエ	中や青	〃	灰褐色	完形 粘土複合焼	
57 9-01	〃	甕	C 2 〃	—	残存 6.5	外面ナギ、内面直状工具による ナギ、口縁部ヨコナデ、	中や青	〃	灰白	1/2 外表面底部黒斑	
58 12-02	須磨器	甕	C 5 〃	—	—	内外回転ヨコナデ、	青	〃	灰	底部の 一部 侧面に実槽、波紋文	
59 10-05	〃	短縄甕	C24 〃	8.0	—	体部内面～口縁部ヨコナデ、 外面上半より回転ヘラケズリ	青	〃	青灰	1/8	
60 9-05	土器	甕	C19 包	8.0	1.0	内外回転減じて調整不明	青	〃	灰白	1/4	
61 11-02	陶器	瓶	C36 上面	—	—	内外面ヨコナデ、	中や青	〃	暗青	底部の 一部 1.5cm間隔に5本の横筋	
62 9-02	須磨器	甕	C 5 結水溝	—	—	内外面ヨコナデ、底部基台部 切り出し	青	硬	内外：模様 底付の み	内外面全体に釉かかること	

表I-3表 C地区出土遺物観察表

上面に窪みをもつ。

須恵器 壺 (39) 球形の体部にやや外傾する直立的な頸部をもち、口縁部上端を欠く。

土師器 須 (40) 緩やかに外反する口縁部に肥厚のある端部がつく。

#### D. 土坑 (S K41ほか) 出土の遺物

須恵器 杯蓋 (43, 47) 天井部と体部との境に縫をつくり、口縁端部内面に明瞭な段をもつ (43) と弱い段をもつ (47) がある。

須恵器 杯身 (44, 45) 腰部が張り出し体部は短く内弯しながら受け部へつながる。高い立ち上がりの口縁端部内面に段をもつ。(44) は底部を欠き、(45) は口縁部を欠く。ともに同じ造りと思われる。

土師器 壺 (46) 口縁部に強いヨコナデを施し、二段に外反する口縁部をつくる。いわゆる「二重口縁壺」と思われる。

#### E. 包含層出土の遺物

須恵器 杯蓋 (49) 天井部と体部との境に縫をもち口縁端部内面に明瞭な段を有す。

須恵器 杯身 (50~53) 口縁端部に段をもち、受け部の縁が鋭いもの (51, 52) と端部が丸くおわり、受け部の縁が鈍いもの (50, 53) がある。

須恵器 高杯 (54) 短脚一段透かしの高杯の脚部で、三方向に長方形の透かし窓がつく。

土師器 高杯 (55) 脚部の先端を杯底部に挿入

して接合したものと考えられる。

土師器 ミニチュア杯 (56) 手捏で調整は丁寧。

土師器 壺 (57) 球形の体部に口縁部がつくが、口縁部を欠損する。外面に黒斑あり。

須恵器 壺 (58) 頸部の一片であり、緻密な櫛描き波状文と凸帯の文様を施す。

須恵器 短頸壺 (59) 肩部から口縁部にかけ内寄し内傾気味に直立する短い口縁部がつく。

#### ② 奈良時代の遺物

##### A. 柱穴、掘形 (Pit) 出土の遺物

須恵器 高杯 (25) 体部から口縁部にかけ残存し、体部は平らで短い口縁部がつく。端部は外反して上方に面をつくる。内面は凹凸状になる。

##### B. 溝 (SD) 出土の遺物

瓦 平瓦 (41, 42) いずれも平瓦の一部で、叩きめ痕を残すが、(41) は器壁厚く、粘土接合痕、布目痕が見られる。(42) は器壁がやや薄く、ハケ目状のナデがみられる。この違いは時期差によるものと否か不明である。

#### ③ 中世の遺物

##### A. 包含層出土の遺物

土師器 盆 (60) 磨滅著しく調整不明。

陶器 摺鉢 (61) 体部の一片で内面に 5 本の摺り目を刻む。

施釉磁器 梶 (62) 灰白の緻密な胎土に淡緑色の釉が被る近世以降の梶と思われる。

## IV. 結語

以上、当調査区の遺構と遺物について述べてきた。ここでは総括として今調査について若干述べる。

### 1. A 地区について

#### ① S Z31の性格

トレンチ調査のため遺構を正確に捉えることはできないが、いくつかの状況を踏まえてこの遺構につまとめてると、①この S Z31 は丘陵の谷部の最も低い場所にある。② S Z31 の肩部は大ききく北方向に円を描くように渋曲する。③調査区東端でも S Z31 の肩部は検出できない。これは東へも広がっていることを意味する。④平成 3 年度の調査では S Z31 は検出されていない。⑤ S Z31 の底面には小穂が面的に

広がっており、人為的な杭 (9~11) が打ち込まれている。

以上の状況から、当遺跡の東側は丘陵部の谷間で最も低い場所に位置し、北側より谷に沿って流れ込んだ水が溜まる、または川に流れ込む経路上の場所であったと考えられる。その水の溜まる部位に小穂を敷き、杭を打ち込み何らかの形で生活に利用したと考えられる。もちろん、これらの水は南の柘植川にも流れ込んでいたと思われる。

#### ② 時期について

この S Z31 の機能した期間であるが、出土遺物では最も古いものは須恵器の杯蓋、身 (1, 2) で共

にS Z31の小縁面上より出土している。これは陶邑編年で言えばTK-209型式に併行しよう。また、この遺物と同時に木製あて具(8)も出土していることから「あて具」はこの墳に廃棄されたと思われる。さらに、A-7地区の土層から出土した須恵器の杯蓋(4)は内面のかえりが長く、口径が小さいなどTK-217型式に併行する。これらにより古墳時代後期末～飛鳥時代初頭の時期はS Z31の下層は機能していたと考える。そして、この面から杭(9～11)は打ち込まれていた。下層から打ち込んだ杭はある程度正確に検出できたが、上層の杭については一部不正確な検出となった。(杭の配置は図I-3図を参照のこと)

S Z31の埋没の過程で土層No.6上より打ち込んだ杭が土層No.8(暗灰砂礫土)の上面で検出された。これらの杭は丸杭で先端部以外は無加工なものであった。この層からの遺物はロクロ土師器皿(5)灰釉陶器(6, 7)等である。これらの遺物はいずれも平安時代に比定でき、最も新しい遺物(6, 7)からS Z31の土層No.6は平安時代後期頃のものと推定できる。丸杭はこの時期に打ち込まれたと考えられる。

## 2. C地区について

### ① 壇穴住居の時期について

壇穴住居から出土する遺物でその住居の廃絶時期を決めることが可能なものはSH47とSH18、そしてSH43のPit100からの遺物である。いずれも壇穴住居内の埋土中より出土したものである。SH47から出土した須恵器の杯身(14)は体部が球形を呈し、口径が10.9cmと小振りであり、高い立ち上がりを有することから陶邑編年のTK-47型式に併行したものだろう。杯身(13, 15)もその前後関係にあるものと見て良いであろう。したがって、SH47は5世紀末～6世紀初頭の建物であったと考えられる。SH18では土師器の壺(17)が出土しており、口縁部の造りがS字状口縁の退化形態を示しており、納所遺跡の古墳第V期(5世紀末～6世紀前半)に相当する遺物と考えられる。SH43のPit(100)の遺物が主柱穴からの出土したものと仮定して考えると、土師器・杯(23)は上野市喰代の高猿6号墳第2主体部から出土した須恵器(TK-23型式)と併存す

る杯に類似する。そうであるならSH43は5世紀末頃のものと思われる。また、壇穴住居の軸方向はN32°W～N25°Wと7°の幅で前後して並ぶことからおよそ同じ向きにして立っていたことが窺える。以上の点から当遺跡の壇穴住居の営みを5世紀末～6世紀前半と想定する。

### ② 大型の掘立柱建物

今調査で検出した大型の掘立柱建物SB35、SB10、SB48の三棟はいずれも柱穴の径が1m前後あり、柱間隔や棟方向等に規格性をもっている。特にSB10、SB48は棟方向(N30°W)が同じで桁行の柱間間隔が約10尺(3m)、梁行の柱間間隔が約9尺(2.75m)と共に通する。おそらく同時に並行して建っていたと思われ、桁行は梁行に比べ1尺分長い造りになっていたようである。

次に、建物の時期であるがSB10はSH19をSB48はSH47を切って建っていることから6世紀前半より後であることは確かである。また、柱穴の壠形から出土する土器は小片で時期比定可能なものは少ない。しかし、古墳時代の須恵器のみ混じることは確かである。SD45出土の古瓦とSB38のPit20出土の(25)を須恵器の高杯と想定するなら奈良時代の遺構の遺物は3点のみとなり、それ以外(若干の包含層遺物を除いて)は古墳時代後期の5世紀末～6世紀後半のものに限定される。

そこで、当遺跡の大型の掘立柱建物が伊賀国府に間連する建物群の一部であったか否かであるが、国府関連施設であれば建物方向が真北方向を示してもおかしくないが、そのような棟方向の建物は検出できない。当遺跡の掘立柱建物の棟方向は方位より地形の影響を受けて建てられた可能性が高い。なぜなら、柘植川に平行する丘陵部上に建物を川に面して建てると川に対してほぼ直角となる。これを方位でみると西に34°前後振れることになる。当遺跡の建物は20～30°西に振れていることから柘植川に對して正面を意識して建てたと推測する。これは方位より地形を重視したことを意味しており、方位を重視する官衙の建物構造とは趣を異にする。また、国府は奈良時代～平安時代後半まで長期間營まれていたことから建替えによる移転があったとして、遺物が廃絶建物に混じて出土してもよいが出土しな

い。

以上のことからSB10、SB48が国府関連の建物であると断じ得ない。むしろ、当遺跡の背後の丘陵上に築造された古墳群の被葬者に関連する建物の可能性も想定できる。ただ、調査区の幅、長さに制約があり、推量の範囲が大きくなりやすい点はいなめない。

### ③ SD45出土の瓦

この構は軸方向はN8°Eで北北東に向いて流れ

#### 【註】

- ① 当遺跡周辺の詳細な歴史的環境については重複を避けるため平成3年度に実施した伊賀国府推定地調査の報告書のI、歴史的環境を参照のこと。
- ② 山本雅晴「御墓山古墳の検討」「考古学論集第1集」考古学を学ぶ会 1985
- ③ 「三重県埋蔵文化財年報19」三重県教育委員会 1989
- ④ 国史編纂委員会「国史大辞典第5巻」吉川弘文館 1985(P.145関司の項)
- ⑤ 町田 章編「古代の宮殿と寺院」「古代史復元8」講談社 1991
- ⑥ 「三重県埋蔵文化財センター年報1」三重県埋蔵文化財センター 1990.3
- ⑦ 「平成3年度伊賀国府推定地発掘調査現地説明会資料」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑧ 川口達也「外山大坪遺跡」「平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告第1分冊」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
- ⑨ 平成2年度のトレンチ調査ではSH9、SB11、SB12が確認された。また、今回新たにSB10が確認された。なお、遺構番号は平成2年度の報告書番号と連動している。

- ⑩ 「陶邑古窯址群I」平安考古学園クラブ 1966

ている。出土した古瓦(41, 42)はその成形技法から2種類に大別できる。(41)は器壁が厚く、凹部に粘土接合痕(板合わせ目)を残すことから桶巻き造りの可能性を窺わせる。(42)はその残存状態から成形技法を窺い知ることはできない。いずれにしても、当遺跡周辺には瓦を使った建物構造が古代において存在していた可能性は指摘できる。

(吉澤 良)

- ⑪ 木製あて具については以下の文献を参照した。
  - ・田道昭三「須恵器大成」角川書店 1981
  - ・亀田修一「陶製無文あて具小考」「横山浩一先生退官記念論集『生產と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会 1989
  - ・横山浩一「須恵器製作用叩き棒め道具の新例」「東アジアの考古と歴史下」岡崎敬先生退官記念事業会 1987
  - ・「日置莊遺跡出土の木製叩き板、当て具」「[No.大阪埋蔵文化財センター]通信No.8」「[No.大阪埋蔵文化財センター]通信No.8」
- ⑫ 前掲註10と同じ。
- ⑬ 前掲註10と同じ。
- ⑭ 伊藤久嗣・吉水康夫「IV遺物・遺構の考察」「納所遺跡」三重県教育委員会 1980
- ⑮ 吉村利夫「上野市唯代高猿6号墳」「昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1981(高猿6号墳は第1主体部から第5主体部まで時期差を設けて埋蔵しており、土師器の杯が須恵器と併伴しており比較的良好な資料と言える。また、これに関して「上野市新都市開発文化財関係資料集成1~5」の川崎正幸「上野市伊那真周辺の遺物」ではこの古墳出土の土師器の時期編年を試みており参考とした。)
- ⑯ 1尺を約0.3mとした。



A地区全景（東より）



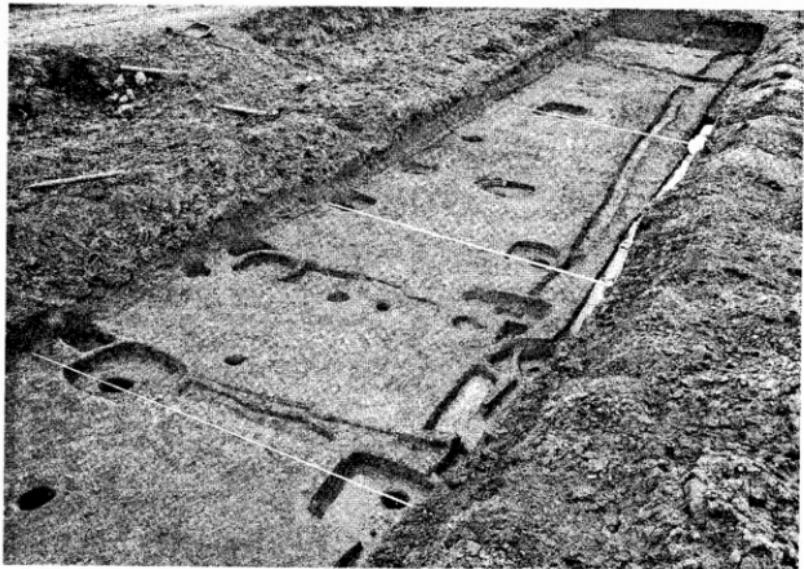
A地区 SZ31



C地区調査区域（中央より西を眺む）



C地区調査区域（中央より東を眺む）



S A36, S B35, S D34 (東より)



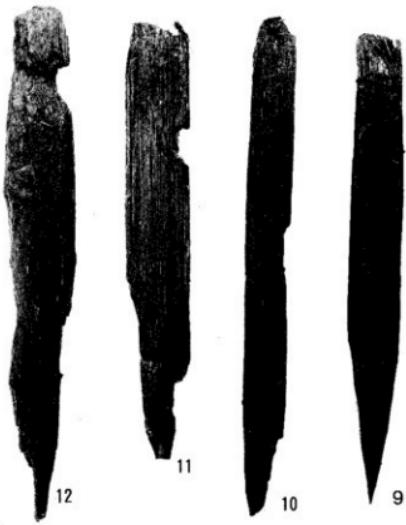
SH 9 (北より)



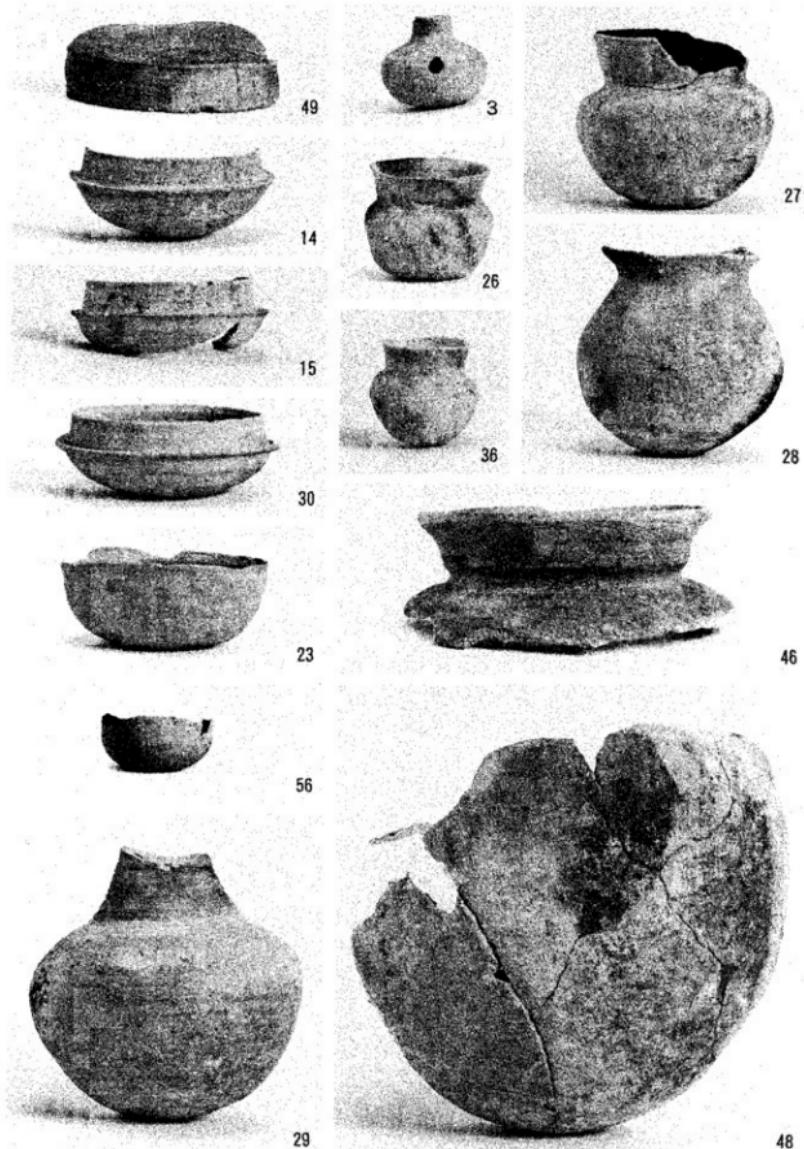
SH 47 (北より)



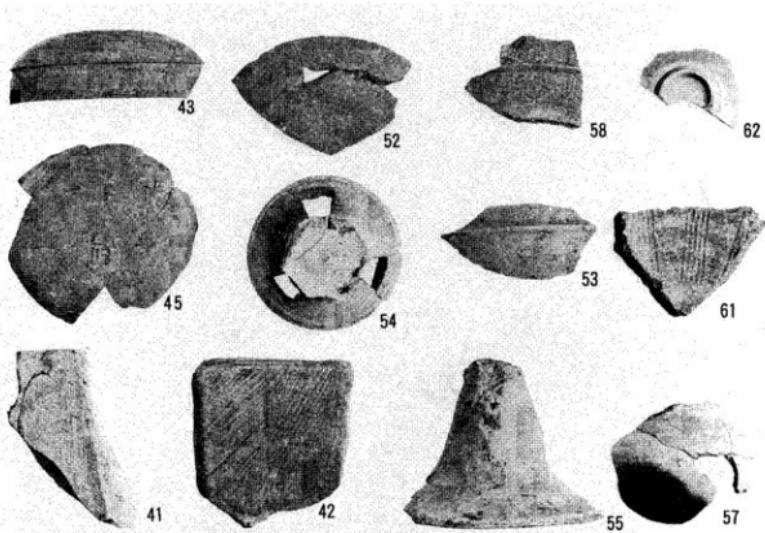
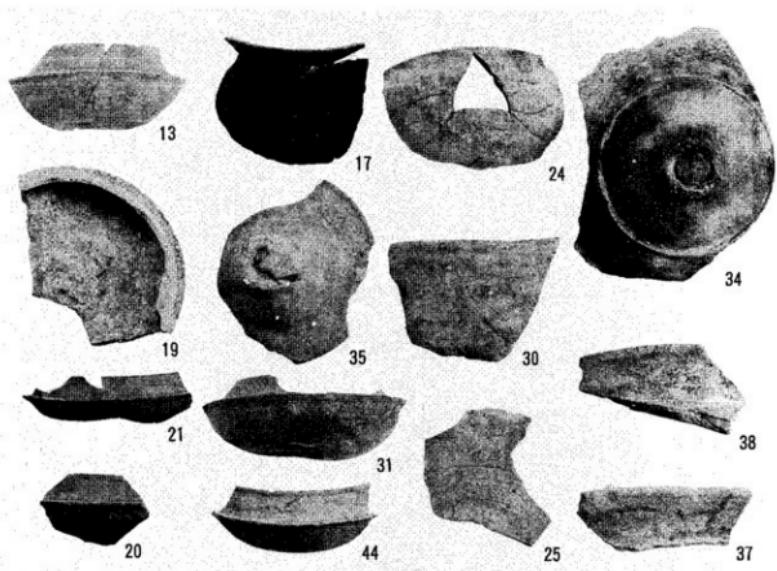
中央より東を眺む



A地区出土遺物 (1~7=1:3, 8~12=縮尺不当)



C地区出土遺物 (1 : 3, 3のみA地区より出土)



C 地区出土遗物 (1 : 3)

## Ⅱ. 上野市羽根 箕升氏館跡（北城遺跡）

### 1. 位置と環境

北城遺跡（64）の所在する上野盆地北部は、木津川、柘植川、服部川によって形成された沖積平野が広がる旧伊賀国内最大の平野部となっている。遺跡は、上野市の北東郊外に位置し、北と南を西流する柘植川、服部川が当地区の西方で合流することから、三方を川に囲まれるかたちとなり、標高は、約147mである。この北城遺跡の南端の周囲の水田より若干高い畝が箕升氏館跡（46）である。

当遺跡周辺では、縄文時代以前の遺跡はあまり知られていない。服部川左岸台地上の中島遺跡（65）の発掘調査で縄文土器が出土している他は、小芝遺跡（66）で石鏡が採集されているにとどまる。

弥生時代では、やはり服部川左岸の台地上で宅地造成時に弥生土器が出土した柿ノ木团地遺跡（67）、車坂遺跡（68）が知られている。近年、ほ場整備をはじめとする開発事業に伴う発掘調査の増加により、検出例も増し、新寺遺跡（69）からは、伊賀国府推定地範囲確認調査の際に後期の堅穴住居、方形周溝墓や、壺、手焙型土器が出土し、印代東方遺跡群（70）、北門遺跡（71）からも後期の土器が出土している。

古墳時代にはいると多数の古墳が周辺の丘陵に築かれる。全長62mの前方後円墳、外山7号墳をはじめとする外山古墳群（72）、同じく59mの鷺棚1号墳を中心とする鷺棚古墳群（73）、三角縁唐草文帶三神二獸鏡が出土した山神寄建神社古墳（74）等が北方丘陵に、東方には、全長188mの卓越した規模をもつ前方後円墳である国史御墓山古墳（75）、荷石古墳群（76）、前塚古墳群（77）、車塚古墳（78）、変形神獸鏡等の出土した二の谷古墳群（79）が知られ、南方台地上には四禽鏡の出土した伊予の丸古墳（80）が存在するなど大規模なものや鏡の出土するものが多く、強力な権力が存在したようである。集落跡の調査例も近年増加しており、大多田遺跡（81）

からは6世紀の堅穴住居が検出され、<sup>9</sup>大坪遺跡（82）、中島遺跡、喜春遺跡（83）、宮ノ森遺跡（84）からも遺構、遺物が出土している。

律令時代には、羽根地区は伊賀国阿伴郡服部郷に属し、周囲に広がる沖積平野は「万町の沖」と呼ばれ、条里がよく発達しており、この頃帰化人によって開拓されたものと考えられている。<sup>9</sup>和銅4年に開かれた東海道は、柘植川右岸を東西に延びており、この時代の主要遺跡もこの道沿いに分布している。県内最古と考えられる単弁素舟軒丸瓦が採集されている三田庵寺（85）、新家駅の推定地である官舎遺跡（86）、7世紀後半の軒丸瓦の出土する喜春遺跡、奈良時代の掘立柱建物、斎車等が出土した北門遺跡、円面鏡の出土した大坪遺跡等がある。また、近年の範囲確認調査によりその存在が確認された伊賀国府跡（87）、服部川左岸の台地上には伊賀国分寺（88）、尼寺（89）が存在し、伊賀国の中心地であったようである。

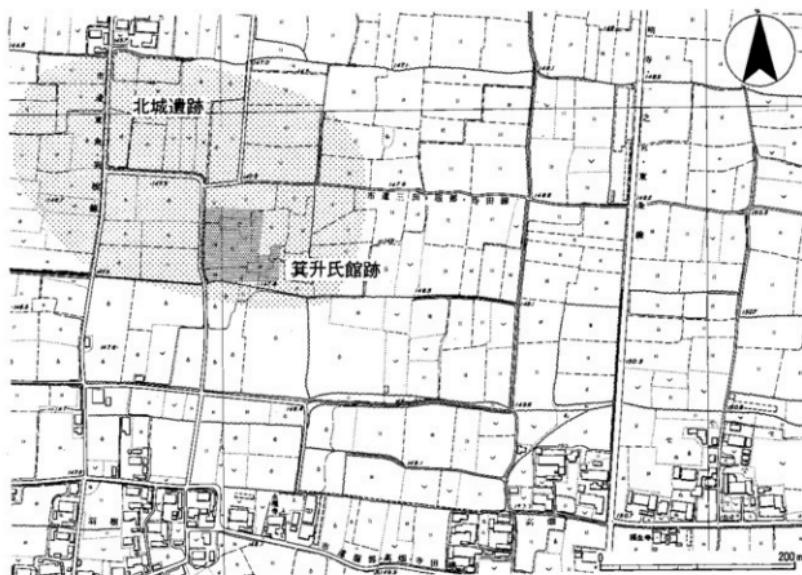
律令時代後半には、伊賀国の大部分に東大寺、藤原氏をはじめとする荘園が広がるが、服部郷は国衙領であったようである。これらの荘園は、中世にはいると悪党と呼ばれる在地勢力により侵食されてゆく。当地区周辺では、服部氏が勢力をのばしていたようであるが、戦國大名と呼ばれるものは出現せず、中小の土豪が共存していたようである。現在伊賀地域では、これらの土豪が築いたと考えられる城館が580以上も知られている。「三国地志」には、「箕升氏宅址一名北城安岡氏宅址並羽根村」と記載され、羽根地区には箕升氏館跡の他、安岡氏宅跡の存在が伝えられている。しかし、安岡氏宅跡の場所は現在不明である。また、隣の服部地区には岡角氏館跡（42）、服部六郎時定館跡（43）、工藤氏館跡（44）、苗子氏館跡（45）の4城館が、高畠地区では千田氏館跡（47）、服部氏館跡（48）、松田氏館跡（49）、



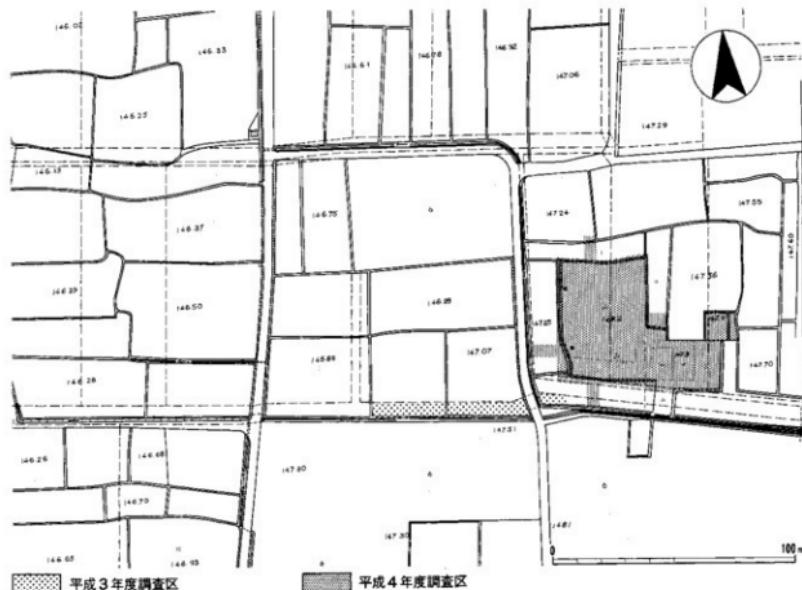
第II-1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院・鳥ヶ原・上野 1 : 25,000)

表II-1 城館一覧表

1	城屋敷宅跡	17	藤谷山城跡	33	高谷氏館跡	49	松田氏館跡
2	宮川氏館跡	18	塙脇道之助堡跡	34	城屋敷跡	50	長崎氏館跡
3	松本氏館跡	19	上山宅跡	35	城の前館跡	51	富坂要害南出砦跡
4	林氏館跡	20	古屋敷遺跡	36	中坂砦跡	52	若森氏館跡
5	山出氏館跡	21	長谷川氏館跡	37	峯嵐砦跡	53	小澤氏館跡
6	倉田氏館跡	22	岡村氏館跡	38	千歳庄司館跡	54	長田九堡跡
7	法華堂西宅跡	23	岡田氏館跡	39	浜瀬氏城跡	55	百田氏館跡
8	法華堂東宅跡	24	城山城跡	40	服部氏城跡	56	駿坂安治館跡
9	西沢兵庫宅跡	25	仁木氏館跡	41	岩瀬氏館跡	57	元屋敷館跡
10	天王下館跡	26	武田氏館跡	42	岡角氏館跡	58	仁木義視故館跡
11	喜春東館跡	27	井川原館跡	43	服部六郎時定館跡	59	上野城跡
12	喜春西館跡	28	宇津賀大谷氏館跡	44	工藤氏館跡	60	秋永氏館跡
13	重福氏宅跡	29	奥知氏館跡	45	苗子館跡	61	服部氏館跡
14	堂垣内宅跡	30	菅野氏館跡	46	箕升氏館跡	62	荒木氏館跡
15	浜田安芸城跡	31	鹿島氏館跡	47	千田氏館跡	63	竹本氏館跡
16	幸至園書城跡	32	原田氏館跡	48	服部氏館跡		



第II-2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第II-3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

長崎氏館跡（50）の4城館が伝えられるなど異常な密集状態を呈している。堂垣内宅跡（14）は、土壘の一部が残存しているが、発掘調査により薬研堀の東堀と箱薬研堀の南堀が確認されている。<sup>9</sup> 法華堂西宅跡（7）は岡森氏館跡ともいわれ、昭和61年の発掘調査で東西60m、南北65mの方形形状に堀と土塁を巡らし、東堀中央部に陸橋を設けるという館の姿がほぼ明らかになった。また、喜春西館跡（12）の発掘調査では、激しく攪乱されているものの南土塁は事前の想定よりもやや北に寄ることが明らかになる等調査例も増加している。しかし、集落跡の実態は

よくわかつておらず、北門遺跡、堂垣内遺跡（90）、三反田遺跡（91）で平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物が検出されているものの、当遺跡周辺では、高羽根遺跡（92）で「子年」と刻まれた土符、間田遺跡（93）、出晴遺跡（94）で土師器、瓦器の小片が出土しているのみで、明確な遺構は検出されていない。

近世にはいると、これら在地土豪は、織田信長により侵攻される。その後筒井定次、藤堂高虎により伊賀上野城（59）が築城され、その城下町が現在の上野市へ継承されている。

## 2. 現況と層序

箕升氏館跡は、周囲の水田より約60cm～1mほど高い畠または竹林として残存しており、東西38m、南北50mの長方形形状を呈する。畠内には礎石として利用してもよいような平たい石が、散乱、あるいは畠の境目石として立てられている。畠の北辺には土塁が残存しており、東端が最も高く比高3mを測る。北東隅は、南壁を石垣で保護した比高60cmほどの平坦面となっており、祠跡と考えられる基礎石が露出している。この畠の東側には一辺約20mの方形形状の張り出し部があり、周囲の水田との比高は、館跡より低く10cm～20cmである。この形状から小郭もしくは入り口升形の設備があったものと予想された。<sup>10</sup> 館跡の周囲は幅8m前後の細長い水田を取り

り巻き、堀跡をよく残している。

館内は、10cmほどの表土の下に淡茶色土が60cmもの厚さで堆積し、その下に暗紫褐色の包含層が存在する。この包含層は、館の北側で最も厚く20cmを測るが、南側では薄く、途切れがちである。この層には、明黄赤色の煉瓦状の小ブロックが北側ほど多く含まれている。包含層の下は旧耕作土となる。これにより、館建設前は水田であったことがわかる。旧耕作土は2～3層存在し、その下は黒紫色土の地山となる。表土から旧耕作土までは80cm、地山までは1.2mを測る。調査では、表土直下の淡茶色層上面と、旧耕作土上面で遺構検出を行い、館に伴う遺構は後者上面で検出された。

## 3. 遺構

### (1) 館内の遺構

#### A. 土塁

S A59 現況からほぼ北辺全体に残存している土塁である。しかし、館、堀の両側から削平を受け、特に中央部で激しく、高さ、幅とも本来の規模を測定することは不可能である。最も本来の姿を残している西端で測定すると、基底幅約9m、高さ約3mである。頂上部に平坦面は認められず、また、東側に向かって緩やかにその高さを減じている。のことにより、中央部は本来両端より低かったことが推

測される。東端は、屈曲部まで残存しており、この部分は3.5mと、ひときわ高くなっている。しかし、その頂上部では柱穴等の遺構はなにも検出できなかつた。頂上部の面積から考えると、特別な施設が存在したことは考えにくいが、土塁中央部と比べ圧倒的な高さであることから、物見台として利用されていたことは推測可能であろう。

断面の観察によると、地層は山形を呈し、堀側が急角度、館側は平坦に近い緩やかな角度を呈している。まず、旧表土の上に、旧表土と地山の黒紫色土の混じった土が積まれ、その上に疊層が乗る。その



第II-4図 調査前測量図 (1:400)

上は、再び旧表土である耕作土、地山と旧表土の混じり、礫層の順で繰り返される。堀が、地山である黒紫色土を掘り抜き、その下の礫層まで達していることから、この礫層が土壘内の礫層に対応するものと考えられ、土壘は、この地域の自然堆積のちょうど逆を2度繰り返したかたちで築成されている。換言すれば、土壘は堀の掘削時に、堀際に積み上げた土を館側に引き伸ばして築成したものと推定され、1.5mの高さを確保した後、再び同じ作業を繰り返し、3mの高さに達している。最初に積まれた礫層上には、旧表土と考えられる腐植土等は認められないことから、この2度の作業の時間差は少ないものと考えられる。

前述したように、館内側からも土取りされているが、土壘内側に低い平坦面が存在するようである。平坦面の高さは約40cmで、幅は、土壘の残存が比較的良好な西端で50cmを測る。この平坦面上には、幅50cm、深さ20cm足らずの溝が東西に延びる。この溝は、現況でも残存していたが、SZ45の下まで延びることからSA59築成時まで遡るものと考えられる。

S A60 館西辺の土壘である。ほとんど削平され、現況ではその痕跡をも認めることができなかった。基底部分の黄色土と地山の混じった土が、高さ40cmほど残存していた。西側は水田開墾によりかなり削平を受けており、現況よりさらに西へ最大4m広がる。したがって基底部の幅は7mを測り、SA59よりもやや狭い。

S A61 館南辺の土壘である。SA60と同様な状況で、残存高は20cm~30cmである。やはり南側は削平されており、現況よりやや南へ広がり、基底部の幅は7m~8mである。

S A62 SA61から屈曲し入り口までの土壘である。状況はSA60と同様で、残存高は10cmである。東側は大きく削平されており、もとは現況より4m東に広がっていたことがわかる。基底部の幅は7mで、北限はSD16と接するものと考えられる。

S A63 館東辺、SA59と入り口の間の土壘である。SA60と同様な状況であるが、入り口に向かい徐々に残存高を減じている。そのため南限が不明確である。しかし、入り口の位置からSD44を越えた地点であるものと考えられる。東側はやはり削平さ

れ、現況よりは東に広がり、基底部の幅は6mである。

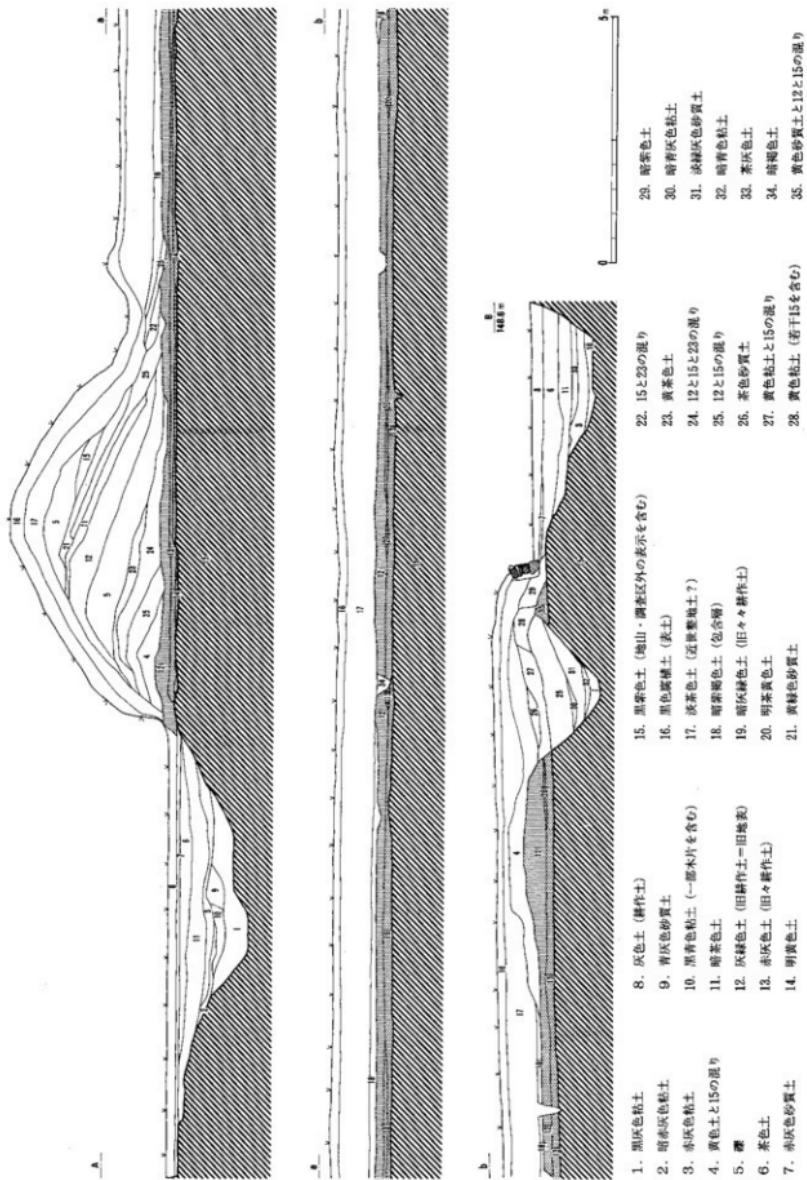
#### B. 堀

S D57 四周に巡る堀であるが、東側を3m掘り残し陸橋とする。幅は、北側と東側で確認できた。それによると、幅8m、深さ1.4m~1.7mを測る。斜面は比較的緩やかで1mほど下がったところで館側に平坦部を設け、さらに中央部を40cmほど掘り下げている。外側の斜面は、平坦部を設げずに底までほぼ一連の斜面で、館側より若干急角度である。埋土は、底から60cmほどは黒灰色粘土や木片を含んだ黒青色粘土であるが、それ以上は粘土の堆積は少なくなる。これにより堀は、當時溝水状態ではなく、空堀に近い状態であったものと推測される。また、一部しか完掘できなかつたが、出土した遺物は非常に少ない。

S D58 南土壘SA61の下から検出された溝で、幅3m、深さ1.5mを測る。西から東に傾斜しており、西側では水田開墾時の削平のため消滅しているが、東側ではSD57に切られる。SD57を越えて東進しないことや、これと5mの間隔で平行することから、この溝も館に伴う堀であった可能性が大きい。底から20cmまでが暗青~黒灰色粘土の堆積であり、水は底にわずかに溜まる程度であったものと推定される。その後洪水等のためか砂質土が20cmほど堆積し、堀の深さは1m足らずとなる。砂質土の上には、暗青灰色粘土の堆積が10cmほどしかなく、この時点でも、水はわずかに溜まる程度しかなかったものと考えられる。その後堀は埋められ、館が5m南へ拡張されたものであろう。

#### C. 挖立柱建物

S B47 館内北部で検出した4間×2間の東西棟建物と考えられ、棟方向はE7.5°Sである。柱間は桁行2.0mの等間、梁行は3.0m+2.0mの不等間である。4間×1間で南面庇付き建物とらえることも可能かもしれない。南西隅には、1間分の張り出し部が付く。柱穴は直径40cm前後の円形で、中に石が入れられているものが多い。南側桁行の柱穴が1基、検出できなかつた。近接した2基のピットは、両者とも他のものより極端に浅く、柱穴とするには不適當である。



第II-5図 南北断面図 (1 : 100)

**S B49** 4間×2間の東西棟建物と考えられ、棟方向はE2.5°Sである。柱間は桁行、梁行とも不等間である。柱穴は40cm～60cmの円形または不整円形で不揃いである。多くのものは石を入れられた浅いものが多く、礎石の抜き取り痕跡の可能性もある。西側にはSB47と同様1間の張り出し部がある。また、周囲をSD16、SD18、SD24、SD30の小溝が取り囲む。

**S B55** 3間×2間の南北棟建物と考えられ、棟方向はN5°Eである。桁行は2.0mの等間であるが、梁行は3.6m+2.6mで著しく不等間である。柱穴の大きさも様々であり建物とするには疑問も多い。西側桁行と東柱列は40cm～70cmの比較的大きな柱穴であるが、不定形で深さも浅く、礎石の抜き取り痕跡かもしれない。東側桁行の柱掘形は直径30cm前後の円形で掘立柱となるものであろう。以上から3間×1間で東面庇付き建物と考えることもできる。

**S B67** SB47と重複して検出された2間×1間の東西棟建物と考えられ、棟方向はE4°Sである。梁行は2.4m、桁行は北側は3.4mの等間であるが、南側は3.6m+3.2mの不等間である。柱穴は直径30cm前後の円形で、埋土に炭を含んでいるものもある。

#### D. 柱列

**S A48** 館内北部で直角にL字状に曲がる柱列である。南西角では礎石が原位置を保っており、その東側では小石の集中が認められ、この上に礎石が据えられていたものと考えられる。他の柱穴も5cmほどの深さしかないものが多く、礎石の抜き取り痕跡の可能性が大きい。柱間は不等間であるが、南側の西から2間目は3.9mと特に広く、入り口の可能性もある。方向はN5.5°Eで、SB47、SB55、SB67と同様であるため、これらに付属する壠であるものと考えられる。その場合、礎石建物の可能性があるSB55に伴う可能性が大きい。

**S A50** SB49の南側で3間分を検出した柱列である。方向はE2.5°Sで柱間は不等間である。柱穴は40cm～60cmの円形で、深さは掘りすぎたものもあるが直径5cm前後と非常に浅い。礎石の抜き取り痕跡の可能性も考えられる。

#### E. 井戸

**S E27** 郭内東側、入り口北側で検出した石組の

井戸である。西側を除く3方にはSZ28が取り付いている。掘形は直径5mの円形を呈するが、10cmほどの薄い整地層で隠されている。1.4mほどで南側に平坦面を設け、直径3mに縮小し、さらに60cmほど下がって底に至る。検出面からは2mで底となり、深さに比べ径の大きい掘形である。掘形底の中央部に90cm間隔で直径10cmの丸太材を平行に並べ、その上に同様の材を東西に置いて井桁状にし、胴木をしている。胴木の外側には40cm～50cmの大きい石を並べ、胴木の固定を兼ねた基底の石と考えられる。これらの上に、20cm～30cmの川原石を直径1.1mの円形で、ほぼ垂直に積み上げている。掘形の埋土は、底から1mまでは砂利、その上は黒紫色粘質土と黄色粘土の混じりである。井戸の埋土は、暗茶色土で50cm以上もある大きいものをはじめ多量の石が投げ込まれていた。底から30cm～40cmは暗青色粘土となる。この層が薄いことから湧水量は少なかったものと考えられ、水量を保つために掘方に砂利を入れたものと考えられる。遺物の出土は少なく、底には埋納されたと考えられるものは認められなかった。

#### F. 土坑

**S K15** 館内南部で検出した一辺2.4mの方形を呈する土坑である。底部は平で深さは30cmである。北壁はSD16と重複により確認できない。SD16に切られているように見えるが、一連のものである可能性もある。

**S K21** 一辺約2mの正方形に近い土坑である。深さは5cmと浅く、底部は平坦である。北西隅が円形に窪んでSK26となる。SB49の中におさまり、方向もほぼ同じであることからSB49に伴う施設である可能性が強い。

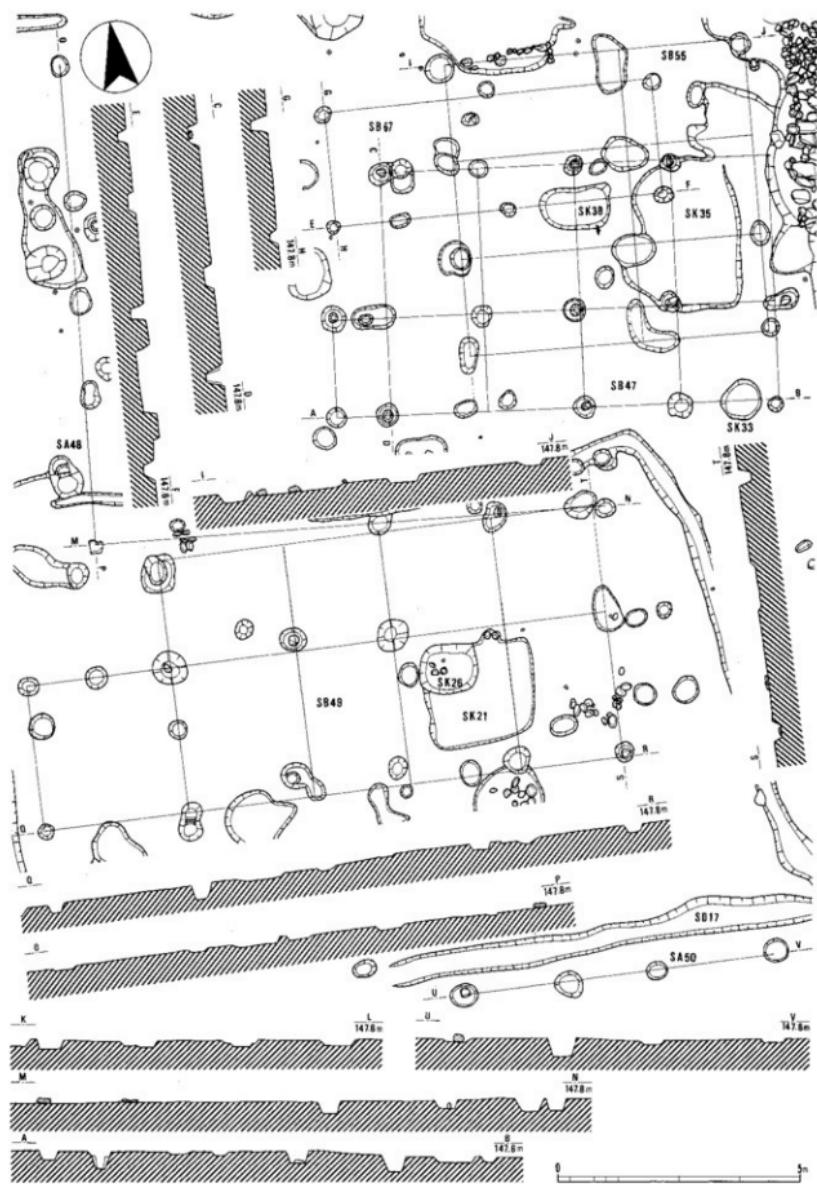
**S K22** SB49の南に接して広がる不定形な土坑である。深さ3cmと浅く、底部は平坦である。土坑北東部に小石の集合が認められるが、その機能は不明である。

**S K23** 館内東部で検出した直径1.3mの土坑である。深さは30cmを測り比較的深い。付近には、同様な遺構、SK32、SK33がある。

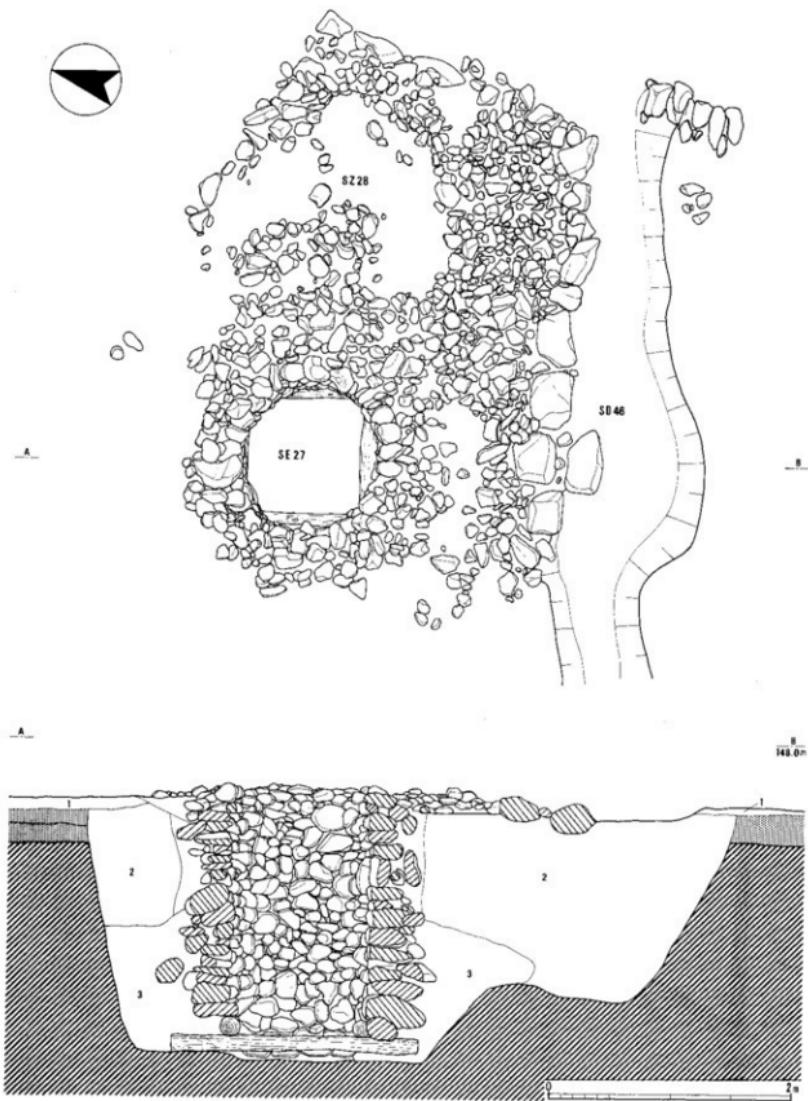
**S K25** SB47の南側で検出した直径50cmの柱穴状の小土坑である。埋土は壙のSK45と同様、焼土であるが、土坑自体は焼けていない。

第II-6図 調査区平面図 (1 : 300)





第II-7図 SB47, SB49, SB55, SB67, SA48, SA50, SK21, SK26, SK33, SK35, SK38, SD17実測図 (1 : 100)



第II-8図 SE27, SZ28, SD46実測図 (1 : 40)

**S K26** SK21の北東隅が円形に埋んだもので、深さはSK21より若干下がる程度である。土坑底部に10cmほどの石が4個集まって楕円状を呈する。SK22と同様な状態であるが、これらを使って建物を想定することができなかった。また、SK21とは埋土での新旧は不明であるが、石の残存からSK21より新しいものと考えられる。しかし、SK21内におさまることから同一の遺構である可能性もある。

**S K29** SB49の南西部で検出した不定形な土坑である。深さも浅く、遺構とするに疑問もあるが、SD30による区画内におさまることからSB49に関連するものであるかもしれない。

**S K32** 調査区北東部で検出した直径1mの円形を呈する土坑である。深さは40cmで比較的深く、付近のSK23、SK33と類似する遺構である。

**S K33** 調査区北東部で検出した直径80cmの円形を呈する遺構である。深さは10cmで、付近のSK23、SK32と類似する。

**S K35** SB47の東に重複して検出された。SB47の柱穴に切られるが、長径3m、短径2mの南北に長い楕円形を呈する。壁は緩やかに傾斜するため、底部は半球状となる。埋土には炭、焼土を多く含んでいた。

**S K36** 館内北西隅で検出した。幅60cm、長さ3m、深さ10cmの浅い溝状の遺構の北端部が円形に埋んだものがSK37、同様な南端のものがSK36である。直径65cmの円形を呈し、深さ35cmを測りやや深い。10cm～25cmの大きな石と、甃片が混在していた。甃は大形で、2個体分が存在する。その内(20)は、接合はしなかったものかなりの破片数である。出土状況では、完形の甃が潰れた状態を検出できなかつたが、その可能性もあるだろう。

**S K37** SK36とはほぼ同規模な土坑である。やはり大形の甃(21)が出土している。接合の結果、口縁部から肩部は完存するが、体部下半は出土しなかつた。SK36と同様、大形甃を据えた遺構であったかもしれない。

**S K38** SB47と重複して検出された長辺1.4m、短辺80cmの東西に長い長方形を呈する土坑であるが、SB47、SB55、SB67との切り合いがないため、その前後関係は不明である。埋土には、焼土、炭を多く

含んでいた。

**S K40** 館内北端中央で検出した。長辺2m、短辺1.5mの長方形形状の遺構である。深さ15cmほどで底部は平坦である。南壁には30cm～10cmほどの川原石を立て並べている様子が認められる。元は四壁に施されていたものかもしれない。北側でSD42と接する。切り合いは明確でないが、SD42を切るようである。埋土には炭が多く含まれていた。

**S K41** 館内北端中央で検出した。直径1m前後の円形で、底部は擂鉢状を呈する。15cm～20cmの石や擂鉢片がつめ込まれており、その上に40cmの大きな石があたかも蓋をするかのような状態で置かれていた。埋土には、焼土塊や炭が多く含まれていた。しかし土坑は焼けていない。SD42を切る。

**S K43** 館内北東隅で検出した長辺10m、短辺6mの長方形を呈する大土坑である。深さは南側で浅く、北に向かうにつれ徐々に深くなり、北側では50cmである。北壁はSZ45の南斜面と一体で50cmほどの川原石を積み上げ、斜面を保護している。東壁も東土壌西斜面と一体であるが、特別な施設は認められない。埋土には炭、焼土を多く含んでおり、土坑内北部では20cm～50cmの川原石が多く出土した。その状況は、土坑底部に接するもの、10cmほど浮くものと様々で、この土坑にともなうよりも、廃絶後に投げ込まれたものである可能性が強い。

## G. 溝

**S D12** SA61の北側に接して、これと並行に延びる溝である。幅40cm、深さ10cmの小規模なもので、もとはSD14となっていたものとすれば、SA61と関連する遺構であるかもしれない。その場合は、SA61からの垂れ水を排水する機能があったものと考えられる。

**S D13** SD16から分歧して南下し、SA61の手前で東に屈曲し、さらに東進する溝である。東端部で北上するものと、まっすぐ東進するものに分かれる。その形態から、排水だけでなく、何かを区画していたようである。この溝に囲まれる建物が存在したのかもしれない。

**S D14** 館南西隅で検出した幅30cm、深さ10cm以下の小規模な溝である。SA60、SA61に沿うかたちで延びており、SD13と同様な機能をもっていたも

のかもしれない。

S D16 館内南部でSD13とSD30が合流しSD16となる。さらに東進し北へ直角に曲がった直後にSD18と合流し、再び東進して堀へ注ぐ溝である。幅70cm、深さ10cm~50cmで、東進するほど深くなり、館内の排水溝と考えられる。

S D17 SB49の南を東西に延びる溝である。東端はSD18に切られる。その延長上にはSD44が伸びているが、埋土、深さともに大きく違い、両者が別遺構であることは明白である。深さ10cmしかなく、その機能は不明である。南側に接してSA50が並行するためこれに関連するものかもしれない。完形の土器類(56)が出土している。

S D18 SD24と同一の溝であるが、急に幅を広げSD16に合流している。もとはSD30とも一体のもので、SB49を取り囲むように巡っていたものであろう。排水と区画を兼ねていたものと考えられる。

S D24 SD16、SD18、SD30と共にSB49を取り囲むかたちの溝である。幅40cm、深さ10cmの小規模なものであるが、排水の他に区画の機能をもつものと考えられる。

S D30 SD16、SD18、SD24とともにSB49を取り囲むかたちの溝である。規模はSD24と同様で、その機能も同じであるものと考えられる。

S D34 館内北西端を南北に延びる幅25cm、深さ5cmの浅い小溝である。中央で幅が広くなるが、別遺構の重複かもしれない。SD24、SD30、SD42と一緒にものである可能性が高く、その機能も同じであるものと考えられる。

S D39 館内北西隅で北土壌に沿って3mほど延びる溝であるが、SD34、SD42との関連はないものと考えられる。遺構とするに疑問も残り、単なる地層の落ち込みと考えた方がよいかもしれない。

S D42 館内北部を東西に延びる溝で、SD34とは一連の遺構であったものと考えられる。幅50cm、深さ5cm~10cmで、北東隅で南に直角に曲がり、SK43へ流れ込むものと思われる。

S D44 SZ28南東角から土壌SA63の下を通り堀へそそぐ暗渠排水溝である。幅約25cmで、両壁に20cm~30cmほどの石を3段に積み、その上に30cmのやや大きな石を平らな面を下にして乗せ、蓋石として

いる。また、これらの石の間には10cm以下の小石を詰めて安定を計っており、最下段の石は4cm~8cmほど埋めて固定し、基底石としている。溝底部から天井石までは約30cmを測る。暗渠内は、暗茶色土で埋まっていたが、底から4cmほどは淡黄色砂が堆積していた。これは水の流れた痕跡と考えられ、暗渠が機能していたことを表すものと考えられる。暗渠は西端で直角に北へ曲がりSZ28へとりついていることからSE27からの水を排水していたものと考えられる。しかし、暗渠西端で北側の基底石が北へ曲がらずそのまま西へ並び、その上に、あたかも堰をするような状態で石が積まれていた。また、西側外部に、元は直線状に延びていたかの様に2~3個の石が並んでいる。これらの石の面は暗渠に接しているが、基底石の延長ではなく、やや浮いた状態である。これらから、西端は何度か作り替えており、埋没後は、SD46からSD16へ排水していたものと考えられる。東端には、70cmほどの細長い巨大な石が溝と直行するかたちに2個置かれている。この石の上面が本来溝の底であるならば、ちょうど堀への注ぎ口にあたることから、水流による館の侵食を防ぐためのものと考えられる。

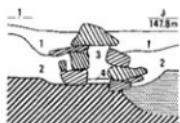
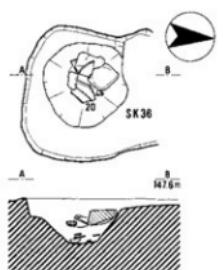
S D46 SD44からSD18へつながる溝である。幅1m、深さ20cm程度であるが、SD18との接続部で幅70cmほどに狭くなる。SZ28からの垂れ水を集め、SD44へ排水していたものと考えられ、当初からSD18と接続していたことは疑問である。新旧は確認できなかったものの、SD44埋没後SD18と接続し、SD16を通して館外へ排水したものであろう。

#### H. 墓

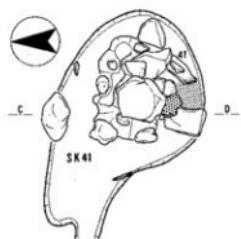
SX19、SX20がある。両者とも墓とする根拠に乏しいが一応ここで扱うことにする。

S X19 館内南西隅近くで検出した。長辺1.3m、短辺0.4mの南北に長い長方形を呈し、SX20とは並列する位置にある。深さは40cmで底部は平坦、壁は垂直に近い急角度である。埋土には炭を多く含んでいたが、土壤自体は焼けていない。施釉陶器(51)が出土したが、埋納とは考え難い。

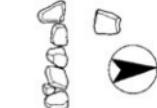
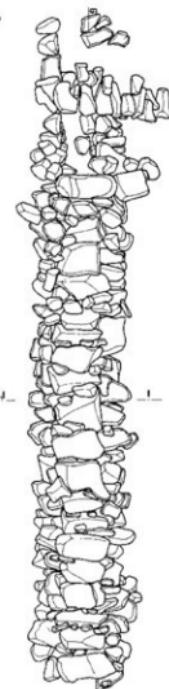
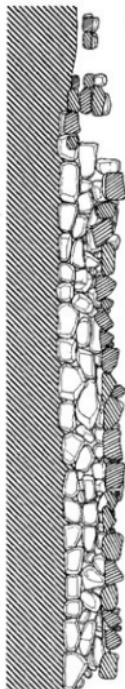
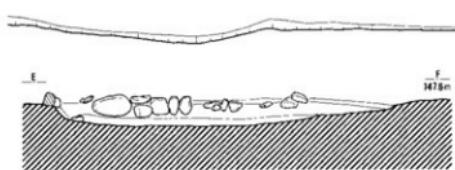
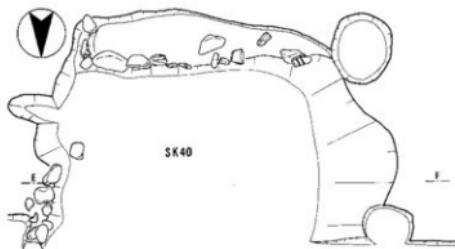
S X20 SX19の東側で検出した。一辺約1mの不整形を呈する。壁は緩やかに傾斜し底部は平坦である。底部北端と南壁に30cm~40cmの大形の石が



1. 暗紫色土と黄色土の混り  
2. 淡黄色砂質土  
3. 暗茶色土  
4. 淡黄色砂



- 烧土  
■ 烧石



SD44



第II-9図 SK36, SK40, SK41実測図 (1:40)、SD44実測図 (1:50)

置かれた様な状態で出土した。埋土には、S X19と同様に焼土が含まれていたが、土壤自体や石は焼けていない。

### 1. その他の遺構

S Z28 SE27の周囲に広がる集石状の遺構である。SE27の東側2.5m、南側1.5mで、北側は図示できなかったが、検出当初若干の小石の広がりを確認している。これにより全体は長方形形状を呈し、その西端にSE27を取り込む形となっていたのである。南側にはSD46が取り付き、不鮮明ながら東側に回り込んでいるようである。南側は40cmの大きな石を並べ南限を明確にしており、東側の一部にも同様な様子が認められる。集石は4cmほどの小石で形成されており、表面は凹凸が激しいものの石敷きと考えてよいものと思われる。L字状に石の無い部分が認められるが、元から石が敷かれていないのかどうかは不明である。

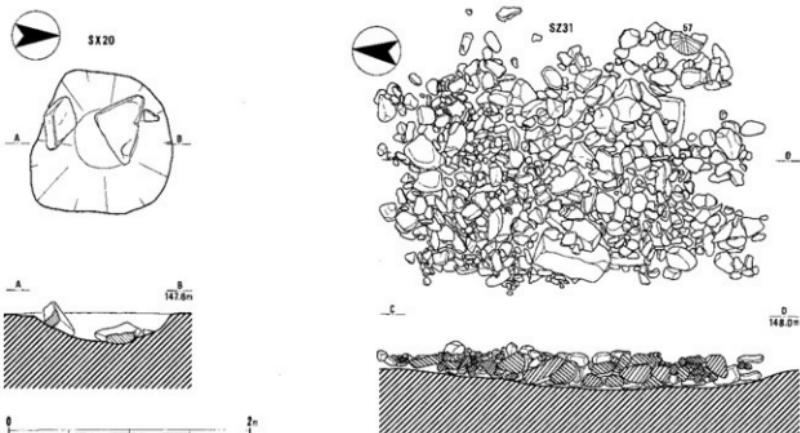
S Z31 郷内南東部、入り口南側で検出した。南北3m、東西2mの範囲に広がる集石である。石は直径4cm足らずの小さいものから、30cmの大きいものまで様々である。集石の厚さは20cmほどで、その下は若干窪む程度で特に土坑と認めるものはない。大きな石の一部は折り重なる様な状態で出土した。しかしこのことが意味を持つようには考えられない。

集石の南東隅で石臼(57)が半切された状態で出土した。

### (2) 近世屋敷

近世屋敷が存在した確証はないが、その可能性は考えられなくもない。既述したように、館内には、礎石ふうの石が多く散乱あるいは畠の境目石として利用されている。このため遺構の検出面は浅いものと考え、表土直下の淡茶色土上面でも遺構検出を試みたが、特に遺構と断定できるものは検出できなかった。しかし、館跡は現況で水田から60cm~1m高いが、淡茶色土が80cmほど堆積しており、館内だけがこのように堆積するとは、自然災害によるものとは考えられず、人為的なものと考えてよいだろう。また、室町時代の遺構SB51、SB52、SK10、SK11が、東側張り出し部の外へ延びていること、館と張り出し部の連結部の下が、室町時代の堀になっていることから、この張り出し部は、室町時代館には伴わないことがわかった。むしろ、SZ66の延長上に位置することから近世屋敷に伴う遺構と理解したい。また、淡茶色土内から17世紀に属する遺物(79)、(80)が出土したため、この屋敷を近世のものとした。

S Z45 館北東隅で現況から残る祠跡である。館廃絶後に土壘を崩して土壇状の平坦部を築成したも



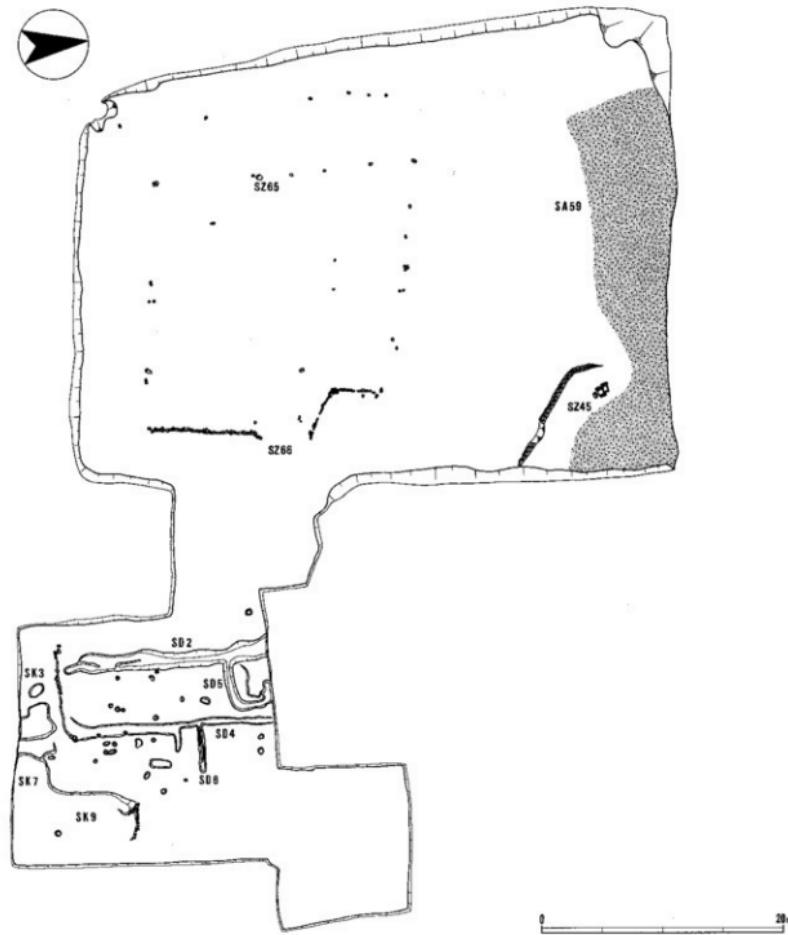
第II-10図 S X20, S Z31実測図 (1:40)

のと思われたが、土層観察の結果、土壌最上層の茶色土が土壌を構成している層の上に被るため、土壌と一体のものであることがわかった。このため、室町時代まで遡ることになるが、遺構、遺物が近世を中心のため、ここで扱うことにする。

まず、土壌を2m以上まで積み上げ、その後祠の土壌を付加し、さらに土壌を1mほど積み上げてい る。土壌の南壁はSK43の北壁と共に、土坑底か

ら1mほど石垣により立ち上がる。石垣は、50cmほどの大きい川原石を3段に積み上げ、20cmほどの石を裏込めとしている。そこから2mほどの犬走りを設けた後、20cmほどの小さい石をさらに5段まで積み上げ土壌壁を保護している。

祠の基礎は、長辺2.6m、短辺2mの長方形を呈する。四辺には60cm~80cmほどの石を並べるが、南側は切り石を使用している。これにより南側が正面



第II-11図 近世屋敷実測図 (1 : 400)

であったことがわかる。上部は、80cmほどの平たい大きな石を置いて祠の台とし、その間に5cm~10cmの小石を敷き詰め、化粧としている。また、露盤宝珠(94)の出土により、覆い屋は宝珠造りであったものと考えられる。台石や小石敷きの下、20cmから再び小石敷きが出土した。その他にも台石風の60cmの平たい石もあることから、この祠の基礎は、作り替えられている可能性がある。狐形土製品が多数出土したことにより、この祠は稻荷社であったことがわかる。しかし五輪塔の空風輪(93)の出土もあり、この祠が当初から稻荷社であったかどうか疑問もある。ちょうど館の鬼門にあたるため、これに関連するものであろうか。また、近世陶器や、プラスチックの椀の出土はあるものの、室町時代と断定できる遺物は出土しなかった。これらの遺物は、いずれも祠基礎南付近で出土し、このことも祠の正面が南であることを証明し、その信仰が現代まで続いていることがわかる。

S Z65 唯一原位置を保っているものと考えられる直径40cmの平坦な石である。

S Z66 入り口と考えられる。左右の石列は、現況で畑の境に並べられているものであるが、S Z66で两者とも東へ屈曲し、全体として西から東へ緩やかに傾斜する斜面を形成している。

### (3) 館外の遺構

#### A. 室町時代の遺構

S B51 調査区北西端で検出した掘立柱建物であ

る。

直徑40cm

の

柱穴

である。

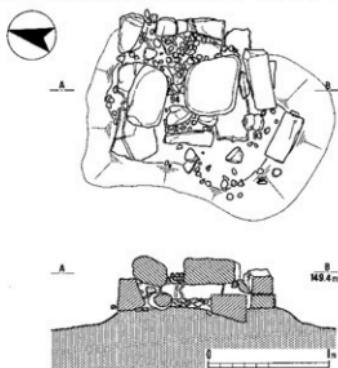
南北2間以上、東西3間の

総柱建物である。

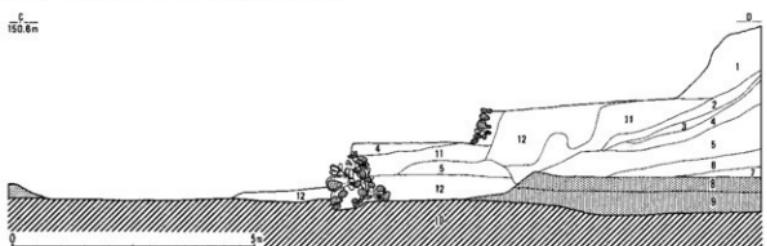
東側も調査区外へ延びる可能性もあるが、仮に南北棟建物とした場合の棟方向はN5°Eである。柱穴は直径約40cmの円形で、中に石を入れるものもあるが、深さは一樣でない。

S B52 SB51と重複して検出された掘立柱建物である。調査区端での検出のため全体の規模は不明であり、検出できない柱穴も多く、建物とするに疑問も多いが、SB51の建て替えと考えた。仮に南北棟建物とした場合の棟方向はN2°W、柱間は桁行2.1m、梁行2.25mである。

S B54 調査区東端で検出した掘立柱建物で、2間以上×1間の東西棟建物と考えられる。柱穴は50

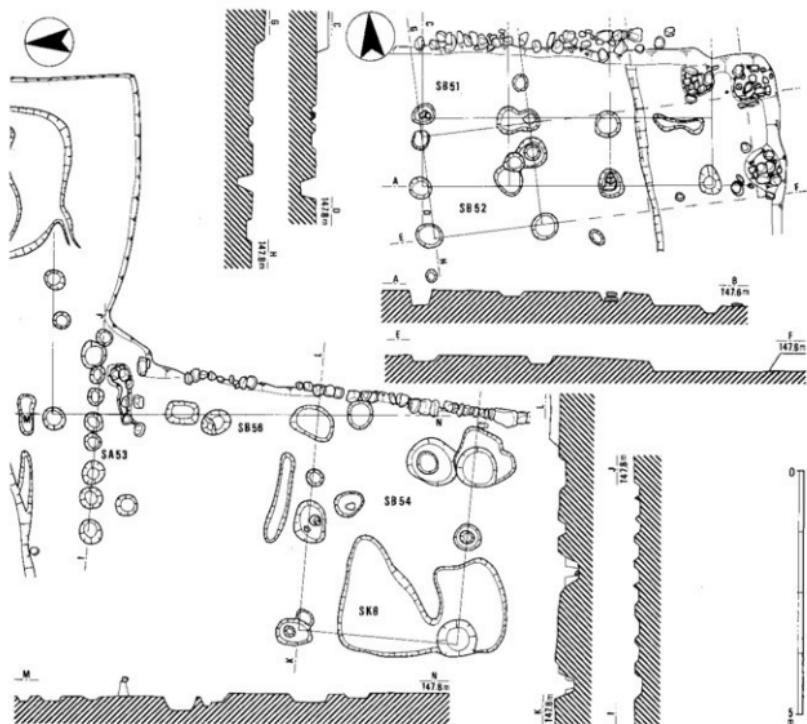


第II-12図 S Z45実測図 (1 : 40)



- |                 |                     |                      |
|-----------------|---------------------|----------------------|
| 1. 茶色土          | 5. 黒紫色土と灰色砂の混り      | 9. 線状灰色砂質土           |
| 2. 黒紫色土         | 6. 灰色土 (一部黒紫色土の混り)  | 10. 黒紫色粘土 (地山)       |
| 3. 灰色土          | 7. 黒紫色粘土            | 11. 黄色粘土と灰色土と黒紫色土の混り |
| 4. 黄色粘土と黒紫色土の混り | 8. 灰色砂質土 (旧耕作土=旧表土) | 12. 茶色土と黒紫色土の混り      |

第II-13図 S Z45断面図 (1 : 100)



第II-14図 SB51, SB52, SB54, SB56, SA53実測図 (1:100)

cmから80cmの円形または長方形を呈する大きなもので、直径25cmの柱痕跡を確認できたものもある。棟方向はE2° Sで、他の建物とほぼ揃うことから、この時代としたが、もっと古いものかもしれない。

S B56 調査区東端で、東西1間以上、南北2間以上を検出した掘立柱建物である。柱間は不等間で建物とする根拠に非常に乏しいため、その可能性を指摘するにとどめたい。南北棟建物とした場合の棟方向はN3° Wで、SB52とほぼ揃うことから一応この時代としておく。

S A53 SB52の南に約7m離れて東西に延びる柱列である。直径50cmから30cmの円形の柱穴が、ほとんど接する状態で8基並ぶ。方向はE1° Sで、SB52とほぼ揃うことから、これに関連する構列であるものと考えられる。

S K10 調査区北東端で検出した長径5m、短径3.5mの楕円形を呈する大形土坑である。深さは15cmで底部は平坦である。北辺はSK11と接するがその切り合いは不明確である。あるいは同一遺構であるかもしれない。西辺には、東進する溝が取り付いている。この溝からは、時期決定資料が出土していないが、切り合いが不明確であるため、この土坑に取り付くものと考えた。

S K11 SK10の北側に接して検出された土坑である。調査区端であるためその規模は不明であるが、SK10と底部等の様子が酷似しているため、同様な規模であるものと考えられ、また一連の遺構である可能性もある。

S D64 近世の遺構SD4, SD5と重複して検出された。これらに切られるため一応室町時代として

扱うが、確証はない。幅2m、深さ80cmの比較的大規模な溝である。埋土からは水が溜まつたり、流れたりした痕跡は認められない。

#### B. 近世の遺構

館外の調査区東部で溝、土坑等を検出した。SK 3, SK 7, SK 8, SK 9 はいずれも不定形な土坑で、

深さもその大きさに比べ浅い。遺構とするに疑問も多いものであるが、SK 9 は、北辺を石で保護している様子があり、何らかの施設であったものと考えて良いだろう。SD 2 と SD 4 は調査区南側でつながり、その南側は右の面を揃えて並べている。

### 4. 遺物

#### (1) 館内出土の遺物

##### A. SK 40出土の遺物

(1) は土師器の皿、(2) は施釉陶器の皿、(3) は土師器の鍋である。(3) は南伊勢系のもので外面全面に煤が付着している。

(4) ~ (6) は擂鉢で信楽産と考えられる。(4), (5) には片口が図示されていないが、残存度から考えてその可能性は十分に有り得る。擂目はいずれも1.3cm~1.5cmに5本の櫛により刻まれている。口縁部内面に凹面をもつが、(6) は強く段を呈している。(4) の胎土は非常に粗いものである。

##### B. SK 43出土の遺物

(7) ~ (9) は土師器の皿、(10) は羽釜である。(8), (9) は口径8.2cm、高さ1.6cm~1.7cmの等しい法量であるが、(7) は口径、器高ともやや小さい。また、(9) は非常に雑な仕上げである。

(11) は青磁、(12) は白磁、(13) は施釉陶器の皿である。(13) の底部には輪状に釉のかからない部分があり、重ね焼きの痕跡と考えられる。

(14), (15) は擂鉢で信楽産と考えられる。(15) の摺り目は底部内面にまでは及んでいない。底部外面には棒状工具の押圧痕があり、また、外側面最下位には、同様な工具による刺突痕が認められる。底部外面には板状工具の痕跡もあり、これらは粘土塊からの切り離し時の痕跡であるものと考えられる。

##### C. SK 36出土の遺物

(17), (18) は土師器の皿である。(18) は底部中央が大きく上げ底状になる。

(16) は陶器の鉢、(19), (20) は壺である。(19) の口縁部内面には弱い凹線が認められるが、(20) では不明瞭である。格子と花弁状の押印が施

された肩部部があり、接合しなかったものの(20)と同一個体であるものと考えられる。

##### D. SK 37出土の遺物

(21) は陶器の壺である。口縁部内面には、弱い凹面をもつ。図示できなかったが、他に玉縁口縁を呈するものも出土している。

##### E. SD 44出土の遺物

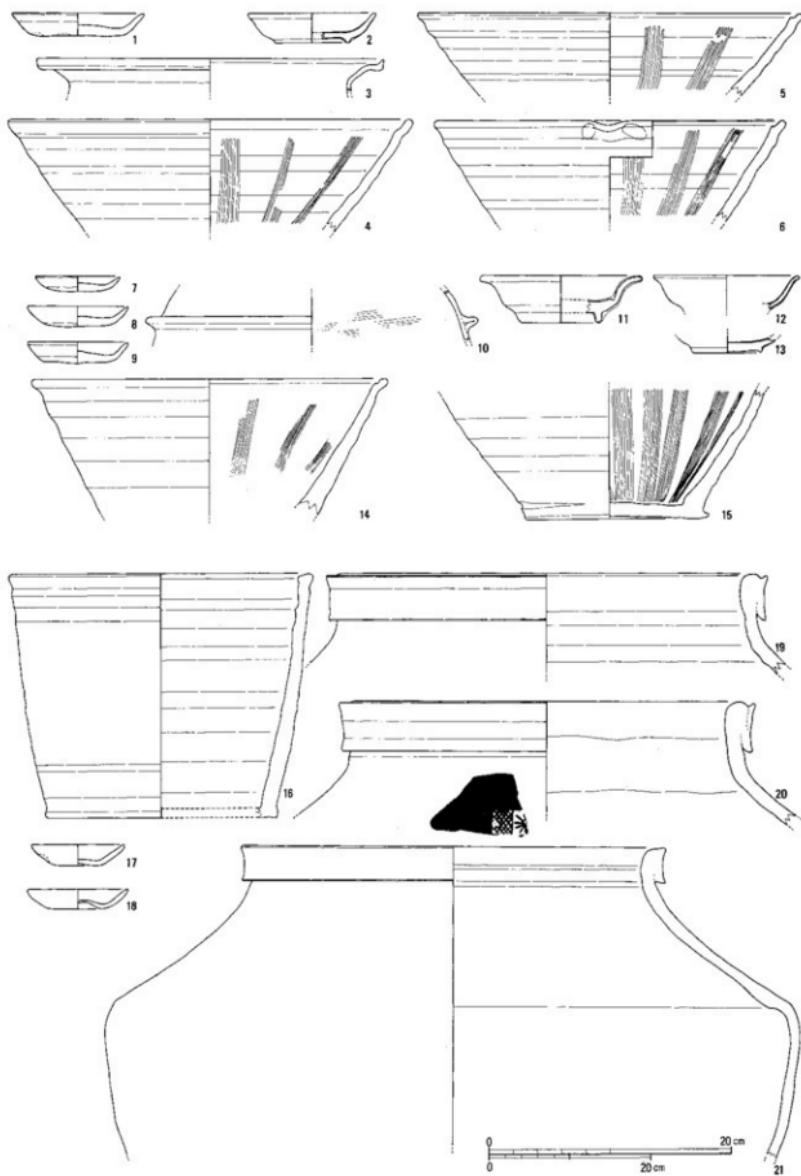
(22) ~ (29) は、土師器の皿である。底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの(22) ~ (26), (28), (29) と、丸味をもって立ち上がる口縁部をもつもの(27) がある。前者には、厚手のもの(25), (26)、薄手のもの(22), (23)、薄手であるが、口径に比して底部の小さいもの(24)、鋭く屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの(28), (29) がある。底部外面は全て未調整で、(22) の口縁部のヨコナデは雑なもの、(25) は内面のみをヨコナデする。(23), (28) の口縁部と底部の境内面には、沈線が一層する。(29) は沈線は認められないものの、強いヨコナデのため凹線状を呈している。(27) ~ (29) の口縁部外面には連弧状、あるいは直線状、列点状の浅い工具痕が認められる。ヘラ状工具の痕跡であるが、文様を意識した可能性がある。

(30) ~ (32) は天目茶碗である。いずれも体部下半にはさび釉がかけられる。

(33) は丸瓦である。ほどいぶし不良の部分がある。凹面には布目痕、吊り緋痕、糸切り痕が認められる。吊り緋痕は、不明瞭ながら山部、谷部とも結び目をつくるものである。

##### F. SD 57出土の遺物

(34) ~ (36) は土師器の皿である。底部と口縁部の境の明瞭なもの(34), (35) と丸味をもつもの(36) がある。いずれも外面未調整であるが、前者



第II-15図 遺物実測図 (19~21は1:6、他は1:4) 1~6はSK40、7~15はSK43、16~20はSK36、21はSK37出土

の外面にはSD44出土のものと同様、ヘラ状工具の痕跡が認められる。

(37) は瓦質の火舎と考えられる。外面ヘラミガキ、内面のナデは板状工具による。

(38) は白磁の椀、(39) は石鍋である。(39) の外面には煤が付着する。

#### G. S K 41出土の遺物

(40), (41) は擂鉢である。擂目は、(40) は一単位7本、(41) は5本であるが、両者とも下半は使用のためか磨滅している。(40) の外面最下位には、前述した(15) と同様、棒状工具の押圧痕が認められる。

#### H. S E 27出土の遺物

(42) は土師器皿、(43)～(45) は擂鉢である。(43), (45) の口縁部内面の段は凹線状に退化している。(44), (45) の擂目は底部から施されている。

#### I. S D 42出土の遺物

(46)～(48) は土師器の皿で、(48) は高台を複に貼り付ける。(46) の底部外面はナデにより調整されるが、(47) は未調整である。(46), (48) の口縁部内面には油煙の付着が認められ、灯明皿として使用されていたものらしい。

#### J. S K 38出土の遺物

(49) は土師器の皿、(50) は施釉陶器の皿である。(50) の高台は貼り付けられ、その接地面と底部外面には輪状に釉がかかっておらず、重ね焼きの痕跡と考えられる。

#### K. S X 19出土の遺物

(51) は施釉皿である。付け高台と思われるが明瞭でない。重ね焼きの痕跡は認められない。

#### L. S K 29出土の遺物

(52) は天目茶碗である。体部外面下半にはサビ釉がかかる。

#### M. その他遺構出土の遺物

(53)～(56) は土師器の皿で、全て底部外面は未調整である。(54) の口縁端部には油煙の付着が認められる。(57) は石臼の上臼である。穀落とし孔の径は上面で5cm、下面では4cmを測る。目は断面U字形で、単位は3本～6本と一樣でなく、およそ8分割されるものと推定される。

#### N. 包含層出土の遺物

ここで扱うものには包含層出土ほか、淡茶色土層出土のものを含む。

土師器 (58)～(72) は皿である。(58)～(60) は底部から丸丸をもって立ち上がる口縁部をもつものであるが、口径、器高とも様々である。いずれも底部外面未調整で、口縁部はヨコナデされるが、(59) が端部外面にまで及ぶ他は、内面のみにとどまっている。

(61)～(66) は厚手で底部から屈曲気味に立ち上がる口縁部をもつもので、(61)～(63) は特に厚い底部をもつ。

(67)～(69) は屈曲気味に立ち上がる口縁部をもつが、やや薄手である。(67), (68) の底部と口縁部の境内面には沈線が一周する。いずれも外面には、沈線状、刺突状の工具痕が認められる。

(71), (72) は底部中央が上げ底状になるもので、(72) の口縁部のヨコナデは内面のみにとどまっている。

(70) は高台を貼り付けるものである。内面のみをナデ調整する。

(73) は羽釜、(74), (75) は鍋である。(74), (75) の外面上には煤が付着する。

磁器 (76) は龍泉窯系青磁椀で、外面に蓮弁文が浮き彫りされる。

陶器 (77) は山茶椀、(78) は天目茶碗、(79)～(81) は施釉皿である。(78) の外面下半はサビ釉が施される。

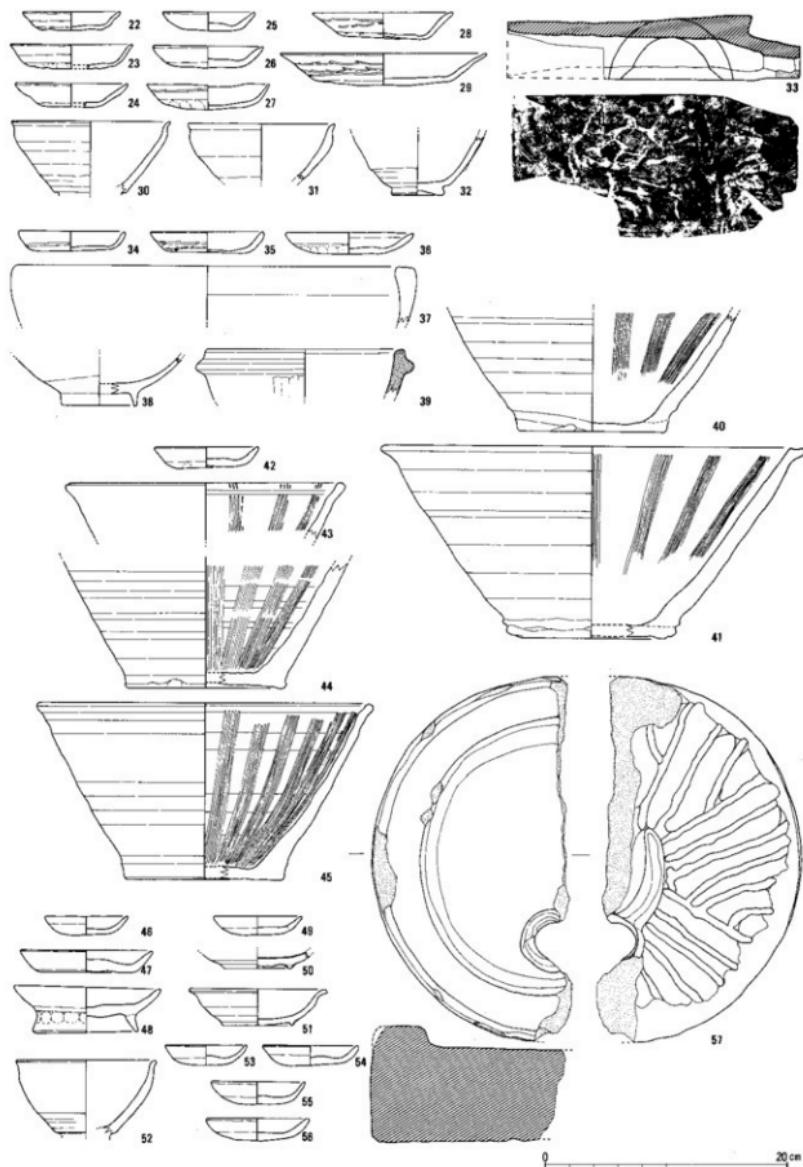
(79) は折縁口縁で印花文が施され、(79), (81) の底部外面には重ね焼きのためか別個片体が輪状に釉着する。(80) は志野と呼ばれるもので、内外間に三又トチンの痕跡が認められる。高台は、底部外面がロクロケズリされるものもあるが、いずれも付け高台と思われる。(81) は雑な施釉である。

(82)～(84) は擂鉢である。(82) はやや内輪する体部をもち他のものより古相を呈する。(83) は薄手で胎土焼成とともに良好な精製なものである。

瓦器 (85) は口縁部の小片であるが、茶釜と考えられる。いぶしは不完全である。

#### O. S Z 45出土の遺物

表土出土遺物のうち、祠基礎石の周囲から出土し



第II-16図 遺物実測図 (1 : 4) 22~33はS D44、34~39はS D57、40、41はS K41、42~45はS E27、46~48はS D42  
49、50はS K38、51はS X19、52はS K29、53~55はS D17、56は小ピット出土

たものである。

(86), (87) は施釉陶器の皿で、内盤をもつもの (86) ともたないもの (87) がある。(87) の外面は施釉されず、口縁端部には油煙が付着し、灯明皿として使用されたものらしい。

(88) ~ (90) は狐形土製品、(91) は土製の台座である。狐形土製品は大小様々で、玉をくわえるもの (88), (89)、巻物をくわえるもの (89) がある。(90) の尻部は疑口縁風に破損しており、台座等に据え付けられていたものと思われる。

(92), (93) は石製品で、(92) は石臼、(93) は五輪塔である。(92) は上臼で、横打ち込み式引き手をもち、目は断面U字形、単位は5本で8分割されるものと考えられる。(93) は先端部を若干欠損するが、組み合わせ式五輪塔の空風輪である。

(94) は瓦製露盤宝珠である。宝珠と伏鉢をかたちどいたもので、伏鉢部上端は、2個割、対角に穿孔される。針金により固定するためのものと考えられる。

#### P. 表土出土の遺物

(95) は土師器の皿、(96) は瓦質の鉢で火舎と考えられる。(96) は円盤状の脚を3方に貼り付けられる。

#### (2) 館外出土の遺物

小郭的な遺構が予想されていた調査区東部からの

出土遺物である。(99) はSD2、(100) はSK10、(101) はSD5、(102) はSK11、(103) は包含層、他は表土の出土である。

(97) ~ (102) は土師器の皿である。底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつもの (97), (98) と屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの (99) ~ (102) がある。後者は薄手の (99), (102) と厚手の (100), (101) に分かれれる。(99) の口縁部と底部の境内部は、強いヨコナデのため凹線状を呈しており、(102) では沈線が一周する。また、(102) の外面にはヘラ状工具による連弧状の沈線が認められ、文様を意識したものかもしれない。

(103) は瓦器碗で、倒立状態で完形で出土した。摩滅のためヘラミガキの観察が不明確ではあるが、5個の連続輪状文と、外面には若干のヘラミガキが施される程度である。

(104) は施釉陶器の皿である。内面には、枝葉まで表現した印花文が施される。全面に施釉されるが、底部外面には重ね焼きのためか、別個体片が輪状に付着する。

(105) は犬形土製品、(106) は土符である。(106) は直径8mmの紐通し穴が穿たれ、B面には「人□」とヘラ書きされる。A面には「十月」とあり、その右側が仮に元号であれば、15世紀中ごろの「寛正」である可能性がある。

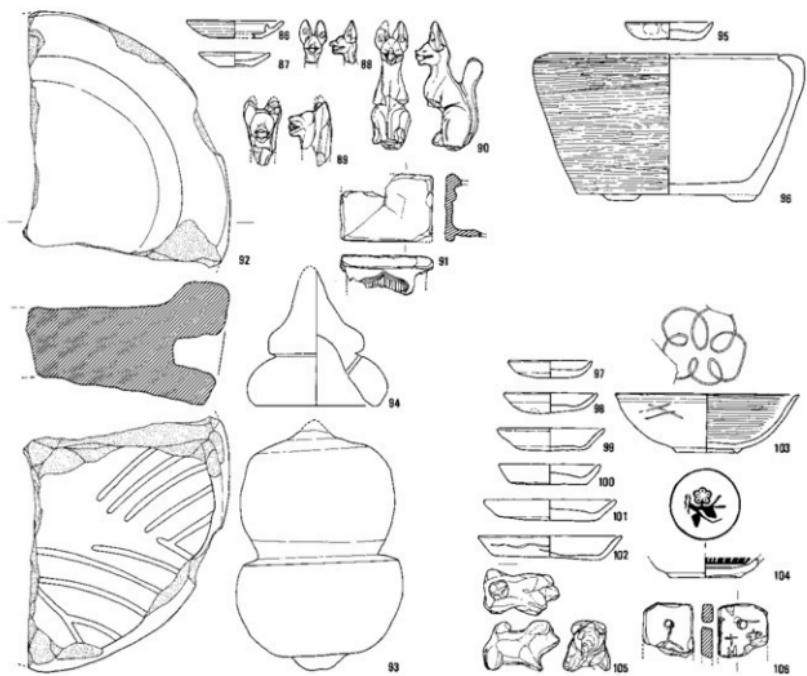
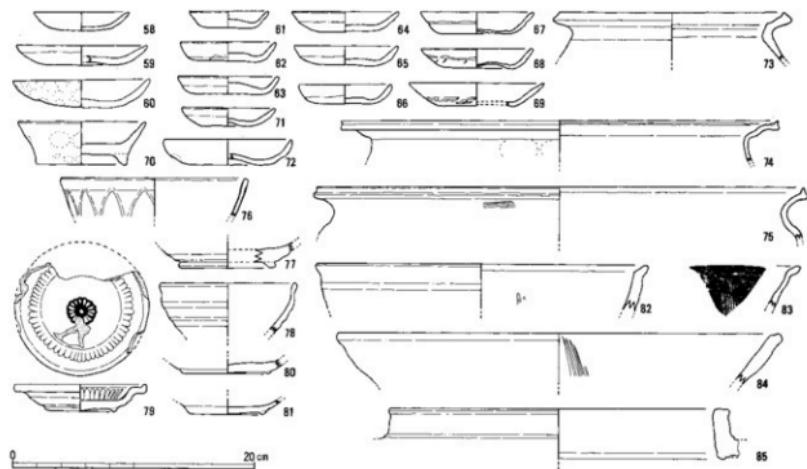
## 5. 結語

近年の開発事業の増加に伴って、伊賀地域における小規模館跡の発掘調査例も急増している。しかし、その多くは、トレンチ調査をはじめとする館の極一部に限られたものである。そのなかで、ほぼ全面を調査したのに風呂谷館跡、安田氏館跡、塚本氏館跡、<sup>9</sup>を調査した神ノ木館跡、觀音寺遺跡があるが、すでに報告されている風呂谷館跡、<sup>9</sup>神ノ木館跡、<sup>9</sup>觀音寺遺跡と比較しながら、当館の特徴、問題点を探ることにする。

#### A. 館の構造

箕升氏館跡は、平野部に位置し、現況から小郭が付属するものと予想されたが、調査の結果、四方に

堀と土塁を巡らした単郭式館であることがわかった。近接する館はなく、単独で存在するものである。田村昌宏氏の分類では、第一分類<sup>9</sup>、山本雅靖氏のA I型<sup>9</sup>、寺岡光三氏の第一形式<sup>9</sup>に相当するものである。中世城館の形態としては、初期のもので、田村、寺岡両氏とも15世紀後半の出現をしている。規模は、土塁内側で、東西24m、南北約29mを測る正方形に近い形態であったが、その後南に拡張され、南北34mの長方形を呈する。神ノ木館跡の東西32m×南北約40m、風呂谷館跡主郭の約40m×約44mと比べ小規模なものである。入り口は東側で、堀を幅3m掘り残して陸橋とし、門は確認できなかった。東側に

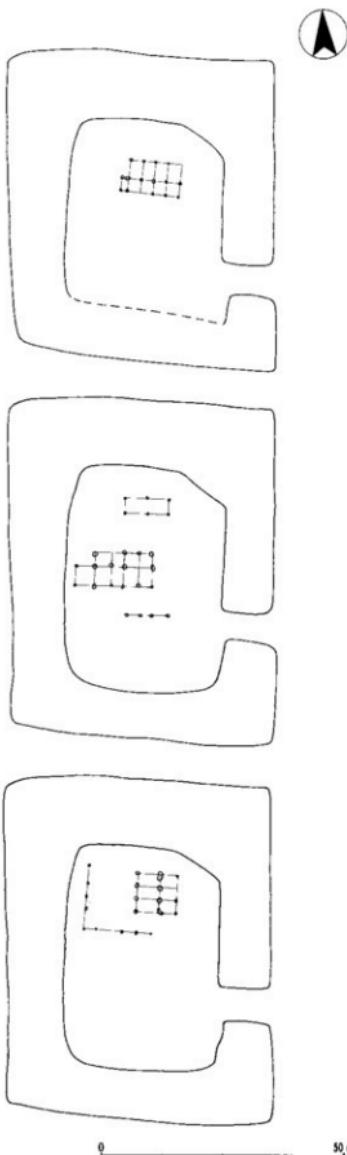


第II-17図 遺物実測図 (1 : 4) 58~85は包含層、86~94はS 245、95、96は表土、97~106は館外出土遺物

入り口をもつ点は觀音寺遺跡と共通であるが、その幅は5.5mと広い。神ノ木館跡でも、幅6.3mで、両者とも門を配する。風呂谷館跡では、主郭への入り口ではあるが、幅約3.6mで、当館とほぼ同規模である。

館内の遺構配置は、駒田利治氏が指摘されているように、共通するものが認められる。箕升氏館跡は、溝により6区画に分割されている。東端の南北に細長い区画には、池状の土坑SK43、井戸SE27を配している。残りの部分を南北に大きく3分割し、いちばん南側の区画をさらに3つに细分している。北側の2区画には建物を配しているが、南側には、とくに大きな遺構は検出されず、南西隅に墓的な土坑2基があるのみである。神ノ木館跡、風呂谷館跡、觀音寺遺跡とも溝による館内の区画が行われており、神ノ木館跡でも、東端に水溜土坑SP23を配している。風呂谷館跡、觀音寺遺跡は、東端に南北に細長い区画を設定し、西側は南北に3分割する等、当館と共に区画を呈している。建物、井戸の配置など、区画内の利用も共通するものが多いが、風呂谷館跡では、南端や東端の区画にも建物を配する点は異なる。

郭内には4棟の建物、2条の柱列が検出された。このうちSB47、SB67以外は、礎石建物の可能性を残している。SA48とSB49の柱穴が2基重複しており、その切り合いからSB49→SA48の順が確認できた。SB47、SB55、SB67が重複しているが、柱穴の重複はなく、直接その前後関係を確認できなかった。SB67は、SB49と方向がほぼ揃うことからこれに伴うものと考えられる。SA48は、不明確ながら、既述したようにSB55に伴う櫛列と考え、SB47は、根石をもつものの獨立柱建物であるため、SB55に先行するものと考えられる。以上からこれらの変遷をSB47→SB49、SB67、SA50→SB55、SA48の順と考える。主屋と考えられるものの面積は、張り出し部も含めてSB47=42m<sup>2</sup>、SB49=54m<sup>2</sup>、SB55=33m<sup>2</sup>で、調査例では最大級の風呂谷館跡母屋SB13=49m<sup>2</sup>(庇を除く)と同様なもので、館の規模に比して大きな建物である。SB67は、東西に細長い建物である。神ノ木館跡SB11、SB12、SB13、風呂谷館跡SB15、SB16と同様な形態であるが、これらは主屋と



第II-18図 郭内建物変遷図 (1:1,000)

される建物の前面に位置するが、当館跡では後背に位置する点が異なる。郭内の包含層は、北に行くほど厚く堆積しており、北側ほど居住性が高いことを示している。また、この層には既述したように明黄赤色の煉瓦状の小ブロックが北側ほど多く含まれている。何等根拠のない推測ではあるが、これを竈等厨房施設の破片とすれば、SB67はこの覆い屋と考えられないだろうか。

館外には、須恵器の散布も認められ、時期幅の広い遺跡（北城遺跡）が広がっているものと考えられる。今回の調査では、検出された遺構の大半は近世のものである。そのなかで、近世遺構SD5より古い溝SD64は、館に伴う可能性がある。堀SD57と6mの間隔で並行するため、入り口への直接の進入を防ぐものかもしれない。また、館と同時期の掘立柱建物SB51、SB52は、建て替えの関係にある。このような建物は、観音寺遺跡でも検出されており、家人層の建物との推定がある。

### B. 館の存続時期

今回の調査では、擂鉢を中心に整理箱に20数箱の遺物が出土した。これらのうち、良好な出土状況を示したものについて、藤澤良祐<sup>9</sup>、赤羽一郎<sup>10</sup>、松沢修<sup>11</sup>、山田猛<sup>12</sup>、伊藤裕作<sup>13</sup>各氏の編年研究に基づいて、その時期を考える。

SK40出土の、施釉陶器（2）は大窯Ⅱ期に属し16世紀中頃、南伊勢系土師器鍋（3）は、4段階d型式に属し、先行する4段階c型式が16世紀前半とすれば、やはり16世紀中頃、擂鉢（4）～（6）は、いずれも信楽焼と考えられ、直線的な体部で口縁端部内面が凹線状になる（4）、（5）、段を呈する（6）があり、前者が松沢編年によるVI期、山田編年のIVa型式に属するものの、後者が、それぞれV期、IVb型式と考えられる。年代としては、松沢編年によれば前者が16世紀前葉から中葉、後者が16世紀後葉、山田編年では、若干新しく、それぞれ16世紀第3四半期、16世紀第4四半期である。

SK43出土の擂鉢（14）、（15）は、松沢編年のⅣ期、山田編年のIVa型式で、年代は16世紀後葉か。

SK36、SK37出土の甕はいずれも常滑產と考えられ、前者（19）、（20）は、V段階、後者（21）はVI段階に属するものか。年代としては、前者が15世紀

後半、後者が16世紀前半に属する者である。

暗渠排水SD44出土の天目茶碗（30）～（32）は、内反り高台、体部外面の銷軸、口縁端部の形態等から大窯Ⅱ期に属するものと考えられ、16世紀中頃か。また、丸瓦（33）は、法隆寺の編年によると、糸切り、吊り紐はD型、弯曲比は0.49等から16世紀に属するものと考えられる。

SK41出土の擂鉢（40）、（41）は、松沢編年のⅦ期、山田編年のⅢb型式か。年代は、それぞれ16世紀後葉、15世紀後葉～16世紀第2四半期となる。

SE27出土の擂鉢（43）～（45）は、松沢編年のVI、山田編年のIVaとしてよいだろうか。年代はそれぞれ16世紀前葉～中葉、16世紀第3四半期である。

以上SK36出土の甕（19）、（20）が15世紀代の可能性をもつ他は、16世紀のものである。実年代に不确定要素が多いものの消耗品である擂鉢を中心に考えると、概ね16世紀中頃から後半を中心とした時期に集約される。包含層出土遺物でも、15世紀にさかのぼるものは、内弯する体部をもつ擂鉢（82）、青磁碗（76）等が散見される程度、さらに館外出土の土符（106）である。これだけの遺物により、館の築造を15世紀とするには無理があるだろう。したがって、その存続時期は16世紀中頃から後半にかけての30年～40年であるものと考えられ、神ノ木館跡、風呂谷館跡と比べ、非常に短いものとなる。

### C.まとめ

箕升氏館跡は、単郭方形を呈し、単独で存在する。前述したように、形態による分類では初期に属し、15世紀後半の出現とされる。しかし、当館では16世紀中頃の築造であり、この形態のものとしては後発のものである。また、存続時期も他のものより短い。小規模であるが、建物は比較的大きく、他の館跡が掘立柱建物であるのに対し、根拠に乏しいとはいえる。一部のものは、礎石建物である可能性を残している。しかし、郭内の利用については、他のものと共通する点が多い。

館の存続が短いのに比して、建物には3時期もの変遷が考えられる。また、館も南に拡張され、SD44、SZ45も作り替えている様子が認められ、短い時期に頻繁に改築が行われている。

館は、16世紀後半に廃絶し、その後、館内が埋め

立てられ、根拠に乏しいものの再び屋敷地として利用された可能性が残る。しかし、「三国地志」に「箕升氏宅址」と記載されていることから、近世中期には、畠地になったものと考えられる。16世紀後半の廃絶の原因については、直接、間接を問わず天正伊賀の乱（1579～1581）を避けることはできないであろう。短期間での頻繁な改築も、これを含め戦国時

代末期の複雑な外的圧力が影響しているのかもしれない。

最後に、発掘調査では、箕升氏の館とする根拠を得ることはできなかった。既述したように服部氏の勢力下にあるならば、それに関連する館主であったかもしれない。

（森川常厚）

【註】

- ① 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報14』1984.3
- ② 豊岡 勇「上野市遺跡地図」上野市教育委員会  
平成3年3月
- ③ 前掲②と同じ
- ④ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』1989.3
- ⑤ 堀田隆長「上野市印代東方遺跡群、出崎跡跡」「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－」1991.3
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報3』1992.3
- ⑦ 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録 古墳遺跡篇（近畿）』1988
- ⑧ 前掲⑦と同じ
- ⑨ 森川櫻男ほか『伊予丸古墳発掘調査概報』上野市教育委員会 1962
- ⑩ 前掲⑨と同じ
- ⑪ 川戸達也「外山大坪遺跡」「平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
- ⑫ 前掲⑪と同じ
- ⑬ 山本雅靖『喜春遺跡群発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会 1982.9
- ⑭ 山本雅靖『宮ノ森遺跡発掘調査概要』上野市教育委員会 1979
- ⑮ 福永正三『福井の國－伊賀路の歴史地理』他人書房 1972
- ⑯ 山田 猛「伊賀」「新修国分寺の研究第二巻畿内と東海道」吉川弘文館 平成3年11月10日
- ⑰ 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』聖德太子奉賛会 1936
- ⑱ 前掲⑯と同じ
- ⑲ 前掲⑯と同じ
- ⑳ 前掲⑯と同じ
- ㉑ 前掲⑯と同じ
- ㉒ 前掲⑯と同じ
- ㉓ 前掲⑯と同じ
- ㉔ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報17』1987.3
- ㉕ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16』1986.3
- ㉖ 前掲㉕と同じ
- ㉗ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報11』1990.3
- ㉘ 小川専哉・宮崎宣光「閑田遺跡」「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－」
- 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991.3
- ㉙ 前掲㉘と同じ
- ㉚ 福井健二『箕升氏館』『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
- ㉛ 伊藤裕徳「中世南伊勢系の土師器に関する一論文」「Mie history vol.1」三重歴史文化研究会 1990.5
- ㉜ 森前 審・伊藤久嗣「風呂谷前跡」「昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1984.3
- ㉝ 駒田利治「神ノ木館跡」「昭和54年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1980.3
- ㉞ 仁保晋作『般音寺遺跡』『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985.3
- ㉟ 田村昌宏「中世城館と想国一揆」「中世城郭研究集」新人物往来社 1990
- ㉟ 田山雅靖「伊賀における中世城館の形態とその問題」「古代学研究27」1984
- ㉛ 寺岡光三「伊賀における中世城館に関する若干の考察」「古城雜記第一四四番 別冊」伊賀中世城館調査会 平成2年12月22日
- ㉝ 駒田利治「伊賀の中世城館跡－発掘調査事例の検討－」「南水城跡発掘調査報告」阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1987.3
- ㉝ 駒田利治「伊勢・伊賀における城館調査－小規模城館を中心にして－」「第8回全国城郭研究者セミナー シンポジウム「小規模城館」研究報告会」「第8回全国城郭研究者セミナー実行委員会 城都談話会・中世城郭研究会 1992
- ㉞ 藤澤良祐「額戸市歴史民俗資料館研究紀要V」瀬戸市歴史民俗資料館 1986
- ㉟ 赤羽一郎「考古学ライブリー23 常滑焼－中世窯の様相－」ニューサイエンス社 昭和59年5月
- ㉜ 松沢 修「信楽焼の編年について」「中世の信楽－その実像と編年を探る－」滋賀県立近江風土記の丘資料館 1989.10.31
- ㉟ 山田 猛「下郡遺跡群出土の播鉢」「Mie history vol.1」三重歴史文化研究会 1990.5
- ㉟ 前掲㉟と同じ
- ㉟ 佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦 第二章 中・近世の軒丸瓦」「伊河留我 法隆寺昭和資料帳調査概報10」小学館 1989

表II-2 出土遺物観察表1

番 号	分類 区分	器 種	出土位置 遺 跡	法 量(cm) 口 径 基 部 その他の 寸	調 整 技 法の特 徴	胎 土	焼 成 度	色 調	残存 (%)	備 考	
1	011-01	土器部・直	F-4・SK40	10.8 1.6 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密・雲母小片含 下合	良	淡黄褐色	60	口縁部は小片	
2	011-02	施釉陶器・直	F-4・SK40	10.4 2.4 高台径 6.1	底部外周ヨコケズリ、他はロ クロナダ	密	良	灰茶色・白・褐 黄褐色	25	削り出し高台	
3	011-03	土器器・網	F-4・SK40	28.6 — —	口縁部ヨコナデ、他はナデ	密	良	淡赤茶色	小片	外面に健付着	
4	012-02	陶器・擦跡	F-4・SK40	33 — —	ロクロナダ	粗・9mmの砂粒 多含	良	灰褐色	25	幅目5本/1.3cm	
5	012-01	陶器・擦跡	F-4・SK40	31.6 — —	ロクロナダ	やや粗・3mmの 砂粒多含	良	淡赤茶色	15	幅目5本/1.5cm	
6	013-01	陶器・擦跡	F-4・SK40	28.5 — —	ロクロナダ	やや粗・6mmの 砂粒多含	良	淡赤茶色	60	幅目5本/1.5cm・片口あ り	
7	014-02	土器部・直	H-6・SK43	6.8 1.2 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密	良	淡灰色	30	底部外周中央に黒斑あり	
8	014-04	土器器・直	H-6・SK43	8.2 1.6 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	やや密	やや 軟	外・黒茶色 内・淡灰茶色	25		
9	014-01	土器器・直	H-6・SK43	8.2 1.7 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密	良	白茶色	20		
10	015-01	土器器・羽輪	H-6・SK43	— — —	内面ナガ、内面ハケ目が残る	密	良	淡黄褐色	10	継以下に擦付着	
11	015-02	青磁・直	H-6・SK43	12.4 3.9 高台径 6.3	底部外周ヨコケズリ、他はロ クロナダ	密	良	白灰色・白・明 黄色	15	削り出し高台	
12	014-03	白磁・直	H-6・SK43	11.8 — —	内外面ロクロナダ	密	良	白・淡白色	25		
13	015-03	施釉陶器・直	H-6・SK43	— — —	高台径 5.6	底部外周ヨコケズリ、他はロ クロナダ	密	灰白色・白・淡 褐色	底部完 形	削り出し高台に 重ね焼きの痕跡	
14	015-04	陶器・擦跡	H-6・SK43	28.5 — —	ロクロナダ	粗・4mmの砂粒 多含	良	灰白色・白茶色 内・暗茶色	20	幅目5本/1.2cm	
15	014-05	陶器・擦跡	H-6・SK43	— — —	底部 14.9	底部外周ヨコケズリ、他はロ クロナダ	粗・7mmの砂粒 多含	良	淡黄褐色	底部凹 形	幅目5本/1.4cm
16	017-01	陶器・跡	D-5・SK36	25.0 20.0 高径 19.2	ロクロナダ	粗・5mmの砂粒 多含	良	淡赤茶色	25	内外面自然剥がかる	
17	018-02	土器器・瓦	D-5・SK36	7.6 1.7 —	口縁部ヨコナデ、外周未調整、 内面中央施塗装ナダ	密	良	黄褐色	30		
18	018-03	土器器・直	D-5・SK36	8.2 1.6 —	口縁部ヨコナデ、外周未調整、 内面中央施塗装ナダ	密	良	暗黄茶色	40		
19	035-01	陶器・盤	D-5・SK36	50.0 — —	ロクロナダ	やや粗	良	暗赤茶色	10		
20	016-01	陶器・甕	D-5・SK36	51.0 — —	ロクロナダ	粗	良	暗赤茶色	15		
21	019-02	陶器・甕	D-5・SK37	52.3 — —	ロクロナダ	やや粗・2mmの 砂粒多含	良	暗赤褐色	50	表面に押印	
22	005-04	土器器・直	I-9・SD44	8.0 1.5 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密・雲母片多含	良	淡黄褐色	25		
23	005-03	土器器・直	I-9・SD44	10.2 2.0 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密・雲母片含	良	淡黄褐色	16	内面底部と口縁部の液に沈 没	
24	005-06	土器器・直	I-9・SD44	9.2 1.9 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密	良	白茶色	50		
25	006-01	土器器・直	I-9・SD44	7.5 1.5 —	口縁部内面ヨコナデ、底部内面 ナダ、外周未調整	やや白・雲母片含	良	灰白色	50		
26	005-01	土器器・直	H-9・SD44	9.0 1.8 —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	密・雲母片含	良	淡赤茶色	20		
27	005-07	土器器・直	I-9・SD44	10.0- 10.7 2.1 —	口縁部ヨコナデ、外周未調整、 内面ナデ	密・雲母片含	良	淡茶色	25	I縁部外周に壊れ状の欠損、 内面底部との境に擦れ	

表II-2 出土遺物観察表2

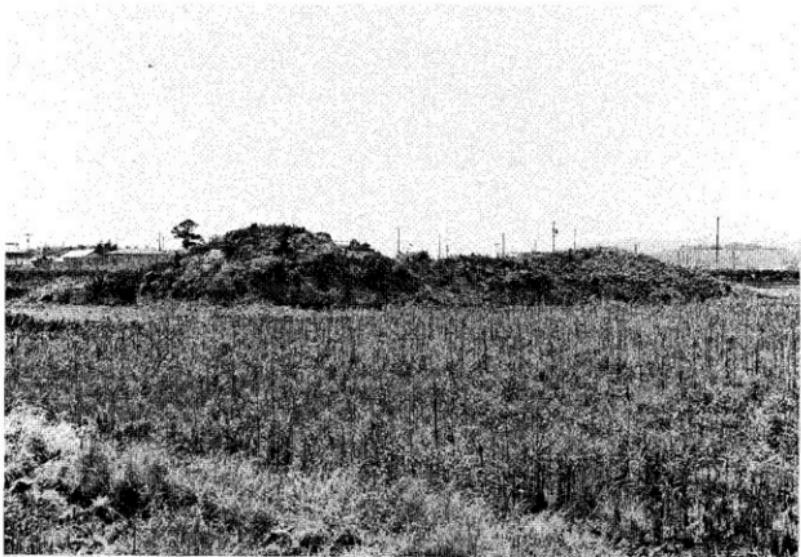
番 号	登録 番号	器 種	出土位置 通 緒	法 長(cm)		調査技伝の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存 (%)	備 考	
				上 径	下 径							
28	006-03	土師器・壺	I-9・SD44	11.5	2.1	底径 7.1	口縁部ヨコナデ、外側未調整、 内面ナデ	青・雲母若干合	良	淡黄褐色	80	口縁部外側工具痕、内側底 部との境に沈線
29	005-02	土師器・皿	I-9・SD44	17.0	2.6	底径 11.0	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	青・3mmの砂粒 合・雲母若干合	良	淡黄茶色	40	口縁部外側に工具痕
30	006-02	陶器・天日茶碗	I-9・SD44	13.0	—	—	体部外面下部ロクロケズリ、施 はロクロナデ	青	白系色 色・黑 茶色	30	体部下半に網目	
31	006-04	陶器・天日茶碗	I-9・SD44	12.0	—	—	体部外面下部ロクロケズリ、施 はロクロナデ	青	白系色 色・黑 茶色	10	体部下半に網目	
32	005-05	陶器・天日茶碗	I-9・SD44	—	—	高台径 4.1	体部外面下部ロクロケズリ、施 はロクロナデ	青	淡黄褐色 程 新青色	100	体部下半に網目 削り出し高台	
33	007-01	瓦・丸瓦	I-9・SD44	長24.3	5.2	幅9.0 ~11.0	凸面ミガキ、凹面布目	青	灰白色	80	いぶし不規正分1/3、薄 厚20mm、工経長4.4cm	
34	004-02	土師器・壺	K-12・闊	8.8	1.7	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	青・雲母若干合	良	淡黄褐色	50	口縁部外側に燒結・内側底 部との境に沈線
35	004-03	土師器・皿	K-12・闊	9.2	1.8	—	口縁部ヨコナデ、内面簡單ナ デ、外側未調整	青・雲母若干合	良	淡黄褐色	完	口縁部外側に燒結・工具痕
36	004-04	土師器・皿	K-12・闊	10.6	1.8	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	青・雲母若干合	良	灰白色	60	
37	003-01	瓦器・火合	A-11・闊	31.2	—	—	口縁部ヨコナデ、内側板ナ デ	青・雲母若干合	良	灰白色	10	
38	003-03	白磁・碗	A-11・闊	—	—	高台径 6.3	底部外側ロクロケズリ、外側 ロクロナデ	青	青白色	20	底部内側・一条の波模	
39	003-02	白磁	A-11・闊	16.4	—	—	外表面ヘミガキ	滑石	—	灰色	10	外表面付着
40	009-01	陶器・盤鉢	E-4・SK41	12.0	—	—	底部外側未調整、他はロクロナ デ	粗・2~7mmの 小石合	良	外・暗赤茶色 内・淡黄茶色	25	粗目7本/1.3cm
41	008-01	陶器・盤鉢	E-4・SK41	34.8	15.7	底径 12.0	底部外側未調整、外側ロクロ ナデ	粗・8mmの砂粒 多合	良	暗赤茶色	10	粗目5本/1.9cm・内側ド ラフ目1mm底
42	001-02	土器器・壺	H-8・SE27	8.4	1.6~ 1.8	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	青	良	淡赤茶色	完形	
43	002-01	陶器・盤鉢	H-8・SE27	23	—	—	ロクロナデ	粗・2~3mmの 砂粒多合	良	灰赤色	15	外表面自然崩若干かかる。 粗目5本/1.3cm
44	001-03	陶器・盤鉢	H-8・SE27	—	—	底径 12.7	底部外側未調整、他はロクロナ デ	粗・小石多合	良	赤茶色	50	外周の一帯に自然崩が若干 かかる。粗目5本/1.4cm
45	002-02	陶器・盤鉢	H-8・SE27	27.7	14.4	底径 12.7	底部外側未調整、他はロクロナ デ	粗・3mmの小石 多合	良	明赤茶色	10	粗目5本/1.3cm
46	003-06	土器器・皿	F-4・SD42	6.8	1.5	—	口縁部ヨコナデ、外側ナデ	青・雲母若干合	良	淡赤茶色	完形	口縁部内側油焼付着
47	003-04	土器器・皿	F-4・SD42	10.8	1.7	底径 7.4	口縁部ヨコナデ、外側未調整、 内面ナデ	やや青	青・淡黄褐色	武部 完存		
48	003-05	土器器・皿	F-4・SD42	12.0	3.5~ 4.0	高台径 8.7	口縁部弱いヨコナデ、底部内面 ナデ、外側未調整	青・雲母若干合	良	白系色	40	口縁部内側に油焼付着
49	010-02	土師器・皿	F-6・SK38	7.2	1.5	—	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ、 外側未調整	青・雲母無粒子 合	良	淡黄色	40	
50	009-02	馬糞陶器・壺	F-6・SK38	—	—	高台径 5.5	ロクロナデ	やや青	青褐色 色・白 綠色	60	轟合接地面、底部外側収 縮がかかる	
51	030-07	施釉陶器・皿	C-10・S X19	11.4	3.0	高台径 5.8	底部外側ロクロケズリ、他はロ クロナデ	青	灰褐色 色・淡 綠色	30	村高台か?	
52	009-04	陶器・天日茶碗	C-9・SK29	11.5	—	—	体部外側下部ロクロケズリ	青	白系色 色・淡 綠色	25		
53	031-05	土器器・皿	D-5・SA48	6.6	1.7	—	口縁部ヨコナデ、底部外側未調 整、内面ナデ	青・雲母若干合	良	青系色	完形	
54	031-06	土器器・皿	E-5・P3	7.8~ 8	1.7	—	口縁部ヨコナデ、底部外側未調 整、内面ナデ	やや青・1mmの 砂粒多合	良	青系色	完形	口縁部に油焼

表II-2 出土遺物観察表3

番 号	登録 基号	器 種	出土位置 遺 構	法 量(cm)		調整校正の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存 (%)	備 考
				11 径	高 さ 其 他						
55 031-04	上縫器・皿	D-5・P3	7.6	1.8		口縫部ヨコナギ、底部外周未調整、内面ナゲ	やや粗・4mmの砂粒多含	良	淡黄褐色	60	
56 063-07	上縫器・皿	F-9・SD17	8.5~ 8.8	1.8		口縫部ヨコナギ、底部外周未調整、内面ナゲ	密・雲母片若干含	良	外・淡茶色 内・淡赤茶色	完形	
57 022-01	臼臼	SZ31	29.6	9.4			花崗岩	白茶色	50	上臼	
58 033-02	上縫器・皿	R-9・包	7.9	1.5		口縫部内面ヨコナギ、外周未調整、底部内面ナゲ	密	良	灰白色	40	
59 033-03	上縫器・皿	E-9・包	10.5	1.9		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外面未調整	密	良	灰白色	30	内外面に油煙付着
60 033-04	下縫器・皿	F-10・包	11.2	2.3		内面ナゲ、外面未調整	密・雲母片若干含	良	黄茶色	75	
61 038-01	上縫器・皿	F-5・包	6.4	1.4		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外面未調整	密・雲母片若干含	良	淡黄褐色	50	
62 038-02	上縫器・皿	C-8・包	7.8~ 8.2	1.5		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外周未調整	密・雲母片多含	良	灰褐色	60	外面に粘土粒粒含
63 031-05	上縫器・皿	D-4・包	8.1~ 8.3	1.5		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、内面未調整	密・雲母片若干含	良	黄茶色	50	
64 038-06	上縫器・皿	G-9・包	8.6~ 9.0	1.7		口縫部ヨコナギ、底部外周未調整、内面ナゲ	密・雲母片含	良	淡赤茶色	25	
65 038-05	下縫器・皿	C-9・包	8.6	1.7		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外周未調整	やや粗・細砂粒多含	良	淡赤茶色	50	口縫部外周に粒埋
66 030-03	下縫器・皿	C-6・包	7.5	1.6		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外周未調整	密・雲母若干含	良	明赤茶色	粗部先 口縫小片	
67 031-02	下縫器・皿	D-4・包	9.1	1.8		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、内面未調整	密・雲母若干含	良	黄茶色	75	外面に工具痕、内面底部と口縫部の境に沈線
68 031-01	下縫器・皿	D-4・包	9.0~ 9.5	1.7		口縫部ヨコナギ、底部内面ナゲ、外周未調整	やや粗	良	黄茶色	90	外面に工具痕、内面底部と口縫部の境に沈線
69 032-04	下縫器・皿	F-10・包	11.0	1.9		口縫部内面ヨコナギ、底部内面ナゲ、外周未調整	密	良	黄茶色	30	外面に工具痕
70 028-01	下縫器・皿	D-9・单塊型	10.4	3.5	高台径 7.4	内面ナゲ、外面未調整	やや粗・細砂粒多含	良	灰白色	40	
71 030-01	下縫器・皿	C-5・包	7.6~ 7.9	1.5		口縫部ヨコナギ、底部外周未調整、内面ナゲ	やや粗・細砂粒多含	良	明赤茶色	75	
72 032-06	上縫器・皿	H-12・包	10.4	2.1		外面未調整、内面ナゲ、	密・雲母片含	良	淡茶色	30	
73 034-03	下縫器・皿	P-7・包	18.4			口縫部ヨコナギ、内面ナゲ	密	良	淡赤茶色	25	
74 004-01	下縫器・鍋	G-4・包	36.0			口縫部ヨコナギ	密	良	淡黄褐色	10	外面僅存着
75 030-04	下縫器・鍋	C-6・包	40.0			口縫部ヨコナギ、外周ハケ日	密	良	赤茶色	10	外表面施釉
76 032-03	青面・碗	F-4・包	15.2			口縫部ナゲ	密	良	灰白色・黒・明 細灰	15	内外面施釉
77 032-05	陶器・碗	H-5・包			高台径 8.0	ロクロナゲ	密	良	灰白色	15	山茶輪
78 031-08	陶器・天目茶碗	E-6・包	11.0			ロクロナゲ	密	良	淡褐茶色・黒・淡 茶色	20	
79 033-05	陶器・碗	E-12・包	10.9	2.2	高台径 5.8	ロクロナゲ	密	良	褐褐色・黒・淡 茶色	20	付高台、内面に印文文
80 032-02	陶器・皿	F-9・包			高台径 7.1	ロクロナゲ、底部外周ロクロケ メリ	密・雲母若干含	良	灰白色・黒・淡 茶色	高部完 内外面に二又トソ痕、ロ クロ高脚	
81 031-07	陶器・皿	E-5・包	-	-	高台径 5.8	ロクロナゲ	密	良	灰黄色・黒・淡 茶色	底部90 様な施釉	

表II-2 出土遺物観察表4

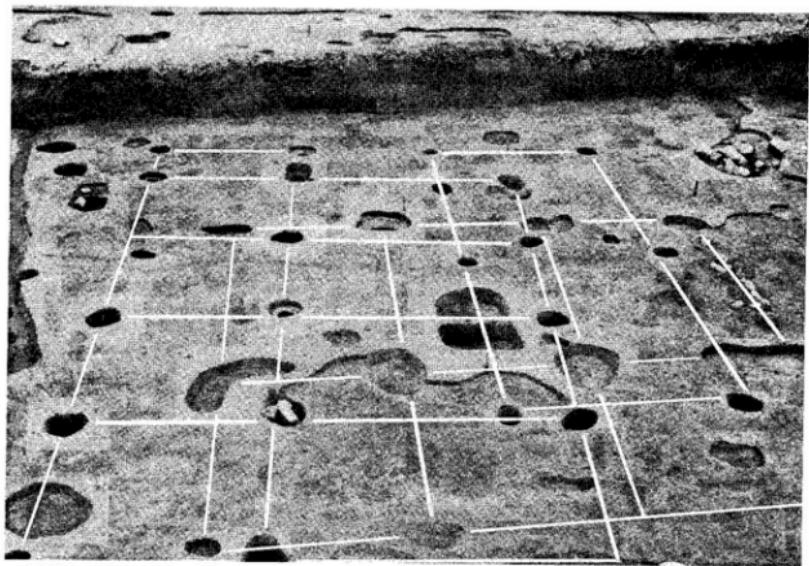
番号	登録番号	器種	出土位置	法量(cm)			調査技術の特徴	胎土	焼成	色調	残存(%)	備考
				口径	器高	その他						
82	031-09	陶器・罐鉢	E-7・社	27	—	—	口縁部ヨコナデ	やや粗・砂粒多含	良	外・灰褐色 内・灰白色	10	
83	032-07	陶器・罐鉢	H-6・社	—	—	—	ロクロナデ	粗・1mmの砂粒若干含	良	褐色	10	
84	033-01	陶器・罐鉢	E-4・社	36.6	—	—	ヨコナデ	粗・5mmの砂粒若干含	良	白茶色	15	
85	034-02	瓦器・蒸器	G-11・社	27.8	—	—	ヨコナデ	やや粗・1mmの砂粒含	良	外・灰褐色 内・黄茶色	10	
86	027-02	施釉陶器・道	S Z45	8.0	1.4	—	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ	粗	良	灰褐色・輪・鉛褐色	30	
87	027-01	施釉陶器・道	S Z45	5.9	1.1	—	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ	粗	良	灰白色・輪・灰褐色	完	口縁端部に液痕
88	027-05	弧形十脚品	S Z45	—	—	—	手づくね	粗・0.5mmの砂粒含	良	暗茶色	30	
89	027-04	弧形土製品	S Z45	—	—	—	手づくね	粗・0.5mmの砂粒含	良	暗茶色	30	
90	027-06	弧形十脚品	S Z45	—	—	—	手づくね	粗・無砂粒含	良	暗茶色	90	
91	027-03	上蓋台座	S Z45	—	—	—	手づくね	やや粗・0.5mm ~2の砂粒含	良	深茶色	40	
92	025-01	石臼	S Z45	38	10	—	—	玄武岩系	—	暗茶色	25	上凹
93	024-02	石製五輪塔	S Z45	空12.7 重13.6	20.5	—	—	花崗岩	—	淡灰茶色	95	空気輪
94	024-01	瓦・露盤七枚	S Z45	—	11.4	底径 10.2	ナデ、内外面いぶし	粗	良	黑灰色	95	針孔穴あり
95	028-03	土師器・瓶	瓶土	7.2~ 7.4	1.3~ 1.7	—	内面ナデ、外凹未調整	粗	良	灰白色	60	
96	028-06	足器・鋸	O-11・石皿	19.0	12.0	底径 14.8	外側へシミガキ、内面ロクロナデ	やや粗・3mmの砂粒含	良	黑灰色	15	二脚あり
97	028-04	土酒器・皿	S-11・土上	6.9	1.3~ 1.7	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	粗・無砂粒多含 内面片付含	良	灰白色	60	
98	028-02	土酒器・皿	P-12・土上	7.6~ 8.0	1.4~ 1.9	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	粗・無砂粒多含 内面片付含	良	暗茶色	完形	
99	004-05	土壙器・皿	M-12・SD2	8.9	1.8	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	粗・無砂粒含	良	暗茶色	75	
100	010-01	土壙器・皿	R-10・SK10	8.3	1.7	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	やや粗・無砂粒 内面片付多含	良	黑灰色	80	
101	004-06	土壙器・皿	N-11・SD5	10.8	1.7	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	粗・雲母片付多含	良	白茶色	40	
102	009-03	土壙器・皿	S-9・SK11	11.7~ 12.0	1.8	—	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 側未調整	やや粗・雲母片付多含	良	黑灰色	80	外側下丸角、内面口縁部と 底部の間に液痕
103	028-05	瓦器・瓶	M-13・社	15.0	4.6~ 4.8	高合径 3.4	口縁部ヨコナデ、外側面なへり 4カ所、内面へシミガキ	粗・無砂粒多含	良	暗茶色	完形	岸鏡によりシガキの顯著不 均一
104	029-01	施釉陶器・皿	S-11・土上	—	—	高合径 5.8	ロクロナデ	粗	良	灰褐色・輪・淡 褐色	底部完 内面に印花文	
105	029-03	大形土製品	M-16・土上	周長 6.2	高 4.0	厚 0.8	手づくね	やや粗・砂粒多 含	良	灰白色	80	人面足欠損
106	029-02	土器	P-16・土上	幅 4.0	厚 0.8	—	手づくね	粗・底面片付多含	良	灰白色	50	



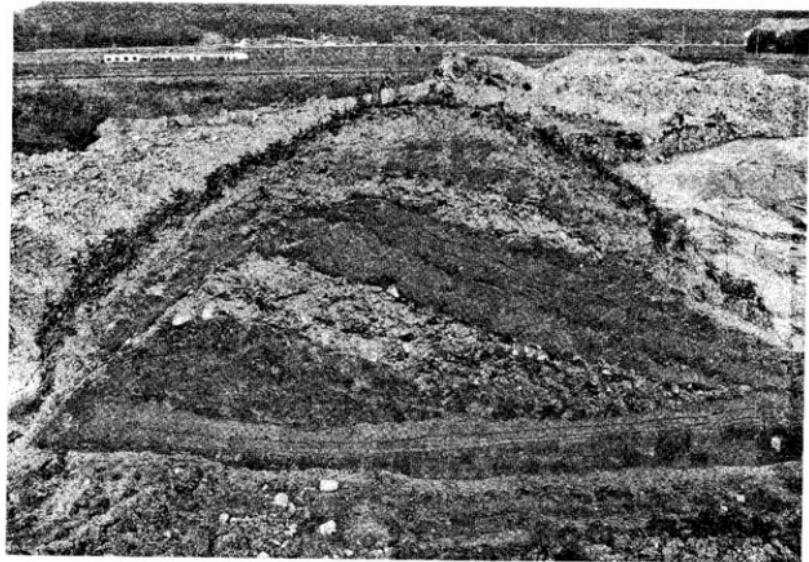
調査前風景（北から）



調査区全景（東から）



S B47, S B55, S B67 (東から)



S A59断面 (西から)



S E 27, S Z 28 (東から)



入口 (東から)



S K 37 (北から)



S Z 31 (北から)



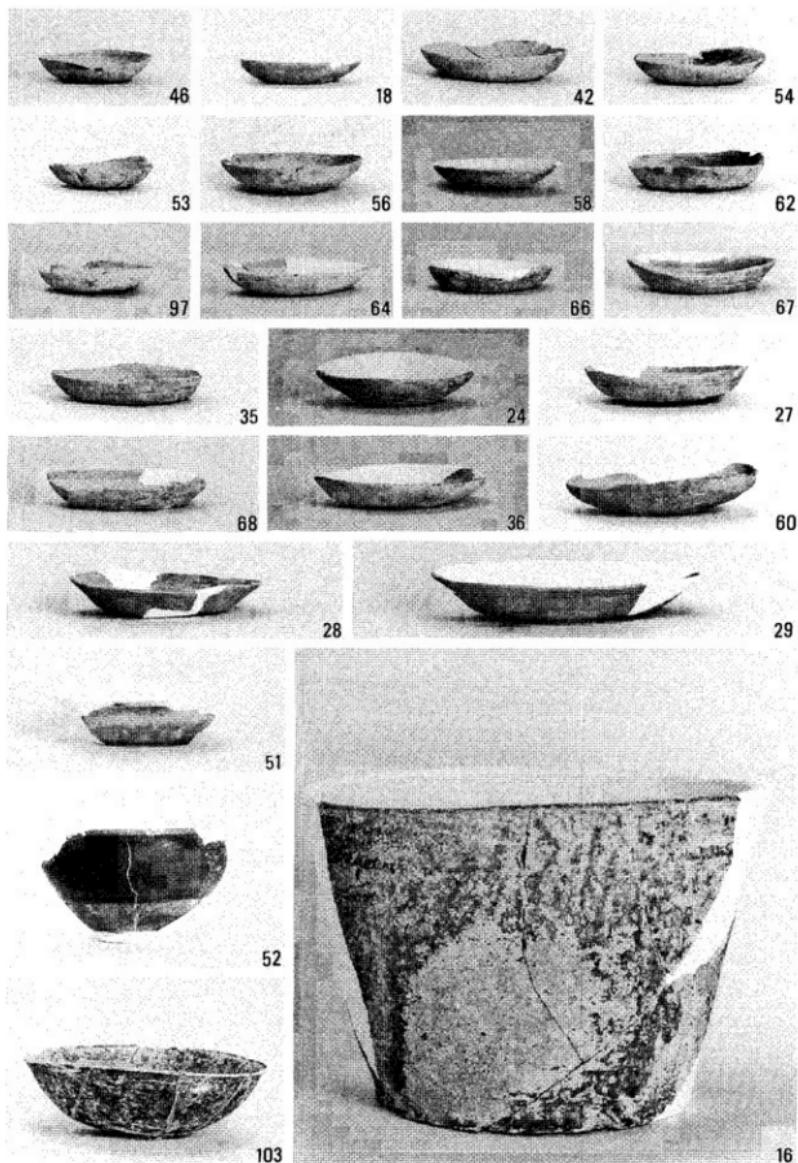
S K 41 (東から)



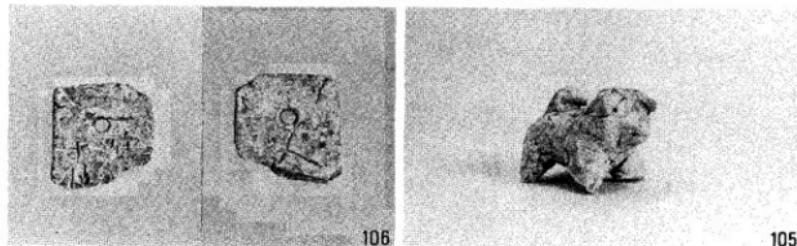
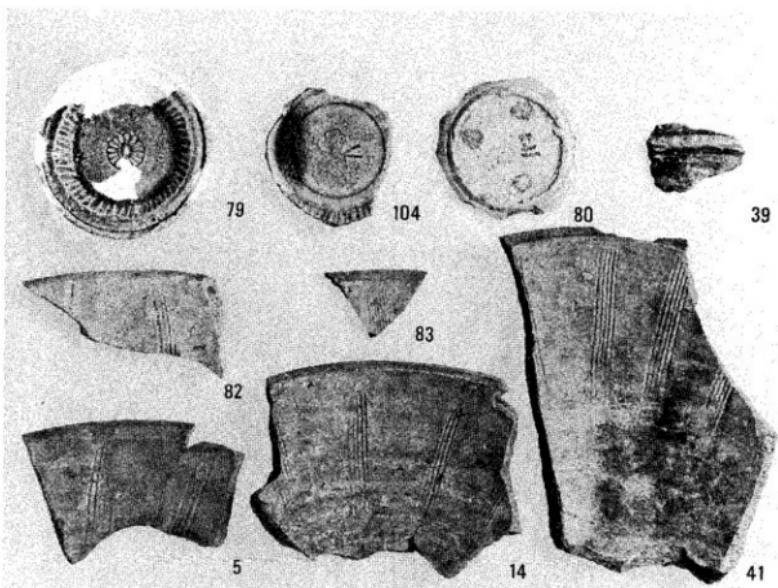
S Z 45 (東から)



S D 44 (西から)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (105, 106は1:2、他は1:3)



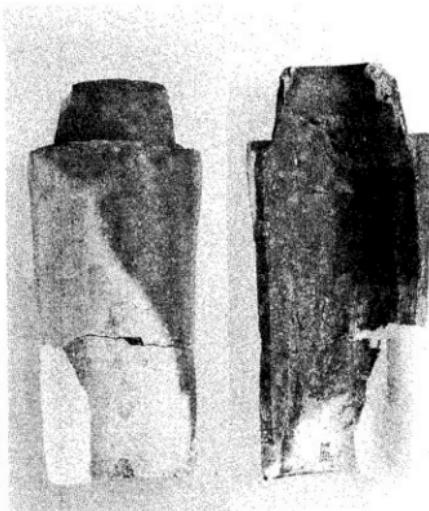
94



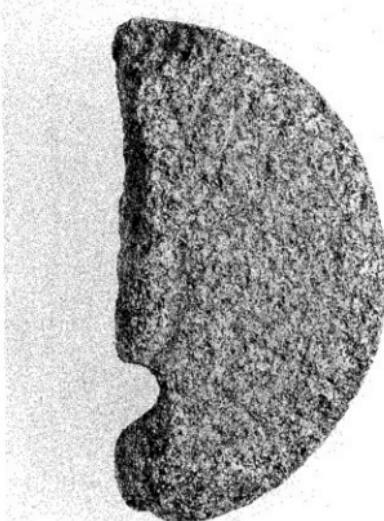
93



92



33



57

出土遺物 (1 : 3)

### III. 名賀郡青山町 川南 A 遺跡 かわみなみ

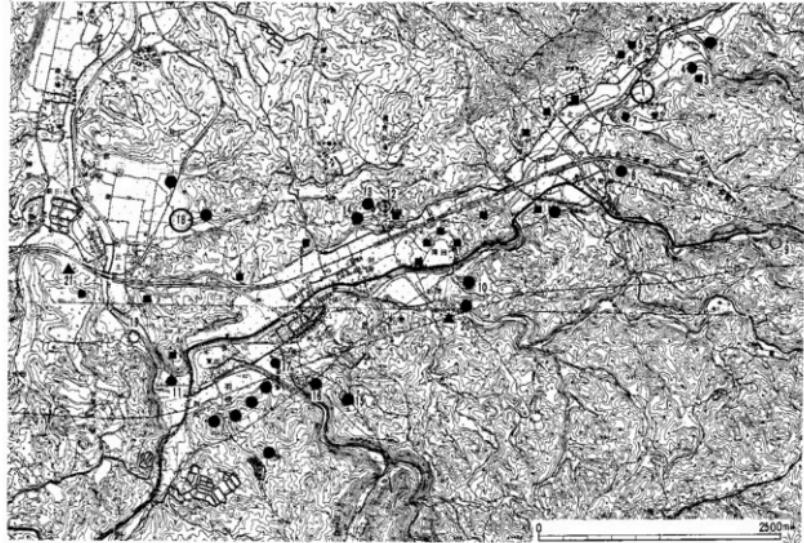
#### 1. 位置と歴史的環境

川南A遺跡（標高約236.8mで東から西にかけて緩斜面上に立地する）は青山町勝地に所在する。青山町は伊賀盆地の南東端に位置し、東は布引山地を介して一志郡白山町、美杉村に隣接する。西は名張市、北は上野市、大山田村に接する。当遺跡の所在する勝地地区は青山町の北西部に位置し、滝地区から伊勢路にかけて木津川の支流が第四紀沖積世（約1万年前以降）に低位段丘堆積層を形成した地形上に立地する。

この地域において歴史的遺産としての遺跡は数多く確認されており、また今後発見される遺跡は更に増加するものと考えられる。現在、青山町において

確認されている遺跡の時代と性格及び発掘調査されているものについて簡略に概述する。

**縄文時代** この時代の遺跡はナメリ石遺跡<sup>(9)</sup>を筆頭に5遺跡（布引開拓地、羽根中島、種生八王子、勝地大坪<sup>(2)</sup>）が確認されている。勝地大坪遺跡は平成4年度に調査され縄文時代早期末期の獣の陥し穴が4基検出された。これは伊賀地方では初めての検出例であり、この地域にも早い時期から縄文人が流入していた証拠となった。また、サヌカイト製石器、削器等の石器が40点以上出土しており、狩猟場の可能性を示した。その他では表面採取のため確実な知見を得ないが分布により川沿いに人や物の流



第三-1図 遺跡位置図 (1:50,000) (※国土地理院「伊勢路・阿保」1:25,000より)

- 3. 城氏城 4. 宮下 5. 新左近 6. 茂次郎 7. 十郎館 8. 六地蔵
- 12. 安田中世墳 13. 朝妻 14. 上代 17. 伝承急別命 19. 高瀬 21. 比土
- … 中世城館    ● … 古墳    ▲ … 銅鐸出土地    ● … 古墳群    ○ … その他の遺跡

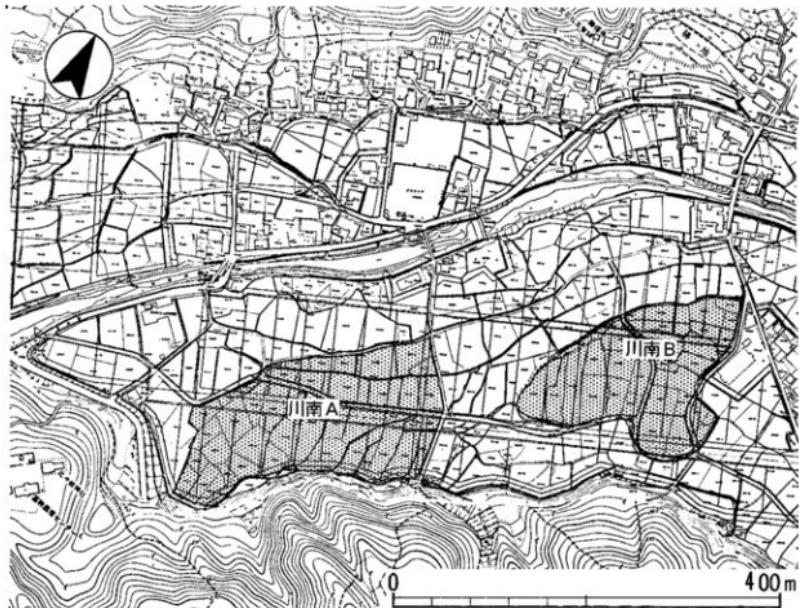
入があった可能性は高い。その流入経路が宇陀川からのルート、木津川からのルートが想定でき今後の調査事例を待つて解明されるであろう。

**弥生時代** この時期は農耕生産の開始とそれにともなう定住および人口増が考えられ、そこから富裕層の出現、支配と被支配の関係が成立すると想定できる。地理的にそれに見合う地域は阿保、上津の比較的大きな平地部をもつ地域であろう。青山町では阿保地域に4遺跡（羽根中島、別府、柏尾湯舟（20）、寺脇<sup>⑨</sup>）が確認されているのみである。中でも柏尾遺跡では後期に属する祭祀に関係の深い銅鐸（伊賀全体で4か所を数えるのみ）が出土しており何らかの重要な場所であったと思われる。

**古墳時代** この時期の遺跡はその多くが墳墓として確認されており、青山町の遺跡全体の60%を占める。これら多くの古墳は後期のもので規模が小さく円形の古墳であり、その殆どが支群単位のまとまりをもつ群集墳である。また、前・中期の古墳は未だ確認されていない。このことから前期・中期にはこ

の地域が他地域の勢力下にあった可能性が想定でき、この勢力範囲を南伊賀全体の中で考えられつつある。そのことで興味深い遺跡は名張市美旗に所在する南伊賀最大の中期の前方後円墳（馬塚古墳）であり、この墓の造営者がこの地域の中心勢力だったと考えられている。しかし、その勢力の本拠地は不明であるが、一説では上野市比土（城之越遺跡=（18））に所在したとする向きもある。ここで見つかった遺跡はわが国最古の庭状遺構と祭祀場を合わせもった遺跡で古墳時代中期頃に比定される。遺物は多数出土しており中期の勢力の本拠地を確定する上で有力な傍証遺跡となろう。

後期に入ると爆発的な古墳造営がおこなわれるが、調査そのものは僅か4遺跡（塙原<sup>⑩</sup>（11）、岡田向<sup>⑪</sup>（10）、霧ヶ谷15号墳<sup>⑫</sup>（15）、勝地大坪古墳群<sup>⑬</sup>（2））にとどまり後期古墳の様相の一端を垣間見るのである。古墳の分布状況を見ると羽根、阿保、上津の平野部から山麓にかけての尾根筋に多く遺存し特に羽根、別府地区の南側の山麓に多く散見する。この



第III-2図 遺跡地形図（1:5,000）

ことは平野部に農業生産による経済基盤を確保した在地の小豪族が古墳造営の主体となったとみられる。

律令制時代 この時期に入つての明確な遺跡はなく川南A遺跡=(1)が本格的な調査例となつた。この地は畿内と東国、伊勢を結ぶ交通の要衝として采え持続、聖武天皇の伊勢行幸、斎王の群行などの際、宿泊のための施設として「頤宮」が阿保地内に営ま

れたと伝承されてきている。<sup>9)</sup>

中世（鎌倉、室町時代）の後半にはいると遺跡確認数が増加する。それは城館跡であり、青山町の遺跡全体（遺跡確認数全体）の25%を占める。その原因として古墳と同様に山間部に所在し破壊、削平、住居の建設などがおこなわれなかつたことによるとと思われる。現在確認されている城館数は47である。<sup>10)</sup>

## 2. 遺構

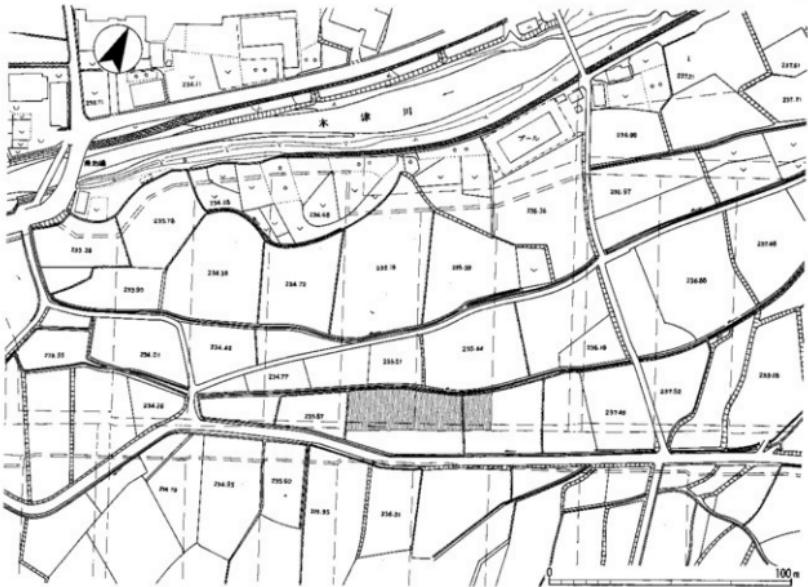
は場整備対象地域12haの内、試掘調査をおこなつた結果、A地区（6400m<sup>2</sup>）、C地区（3000m<sup>2</sup>）の計9400m<sup>2</sup>にわたり遺跡があることが判明した。そのうち整備により削平を受けるA地区の約1000mについて本調査を行つた。調査区は東西に約50m×南北に約20mの長方形を呈する。

調査区は東から西にかけて緩やかに傾斜を持つ平坦部にあり、その比高差は調査区のそれぞれの縦で約1.2mある。数百m北側には木津川の支流が西に向かって流れしており、当地域はその堆積によりでき

た平地部と考えられる。そのため調査区北側では深さ数mにわたる疊層（土層図No.7）が斜めに横切っている。

南側には低位の山が控え布引山系に連なる。

当遺跡の遺構検出面までの土層の基本的層序は第1層=耕土（暗灰色土）、第2層=灰褐色土、第3層=暗灰色土（遺物包含層）、第4層=褐色砂質土（地山）となる。ただし、SD3の北側の肩から南側は褐色砂疊層に変化し、それは溝に沿つて東へ広がつてゐる。遺構は主に中央部の褐色砂質土から検



第III-3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

出された。また、その上部に堆積する包含層からは多量の遺物片が出土した。

主な遺構は掘立柱建物1棟、竪穴住居2棟、溝3条、土坑1基、性格不明遺構5等である。以下各遺構について時代順に記す。

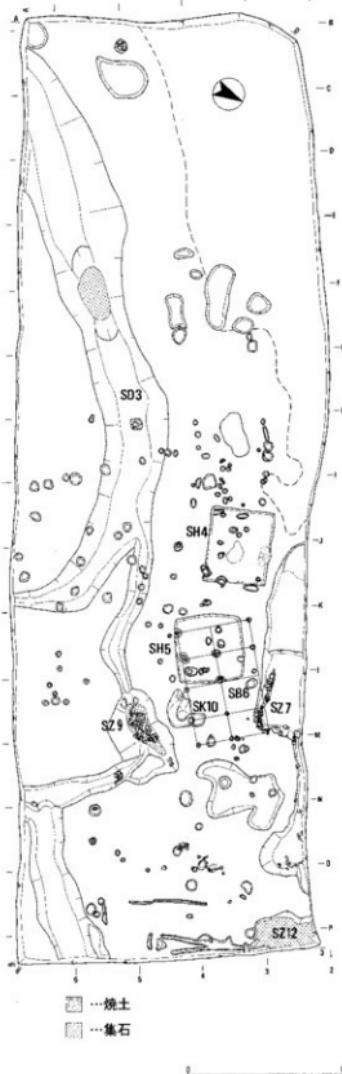
### (1) 奈良時代の遺構

#### A. 竪穴住居

S H 4 調査区の中央付近で東西の一辺が4.6m、南北の一辺が4.0mでコーナーがほぼ直角になるやや長方形を呈する住居跡を検出した。床面積は約18.4m<sup>2</sup>となり床面までの深さは北で約20cm、南で約10cmと北側での残存状況が良い。これは北側での検出面が高かったことによるものである。住居内での明瞭な主柱穴、貯蔵穴等は検出できず、数個の小穴を検出したのみであった。ただし、北東隅にやや深めの小穴を検出したが、それが貯蔵穴かどうか不明である。竪穴を中心に多数の土器(13, 15, 17, 20, 23, 25, 26, 27, 28)が出土した。また、中央部に粘土の貼り床と考えられる厚さ1~2cm、0.4m×1.4mの範囲の粘土を検出した。床面近くより土器片(18, 22)が出土している。

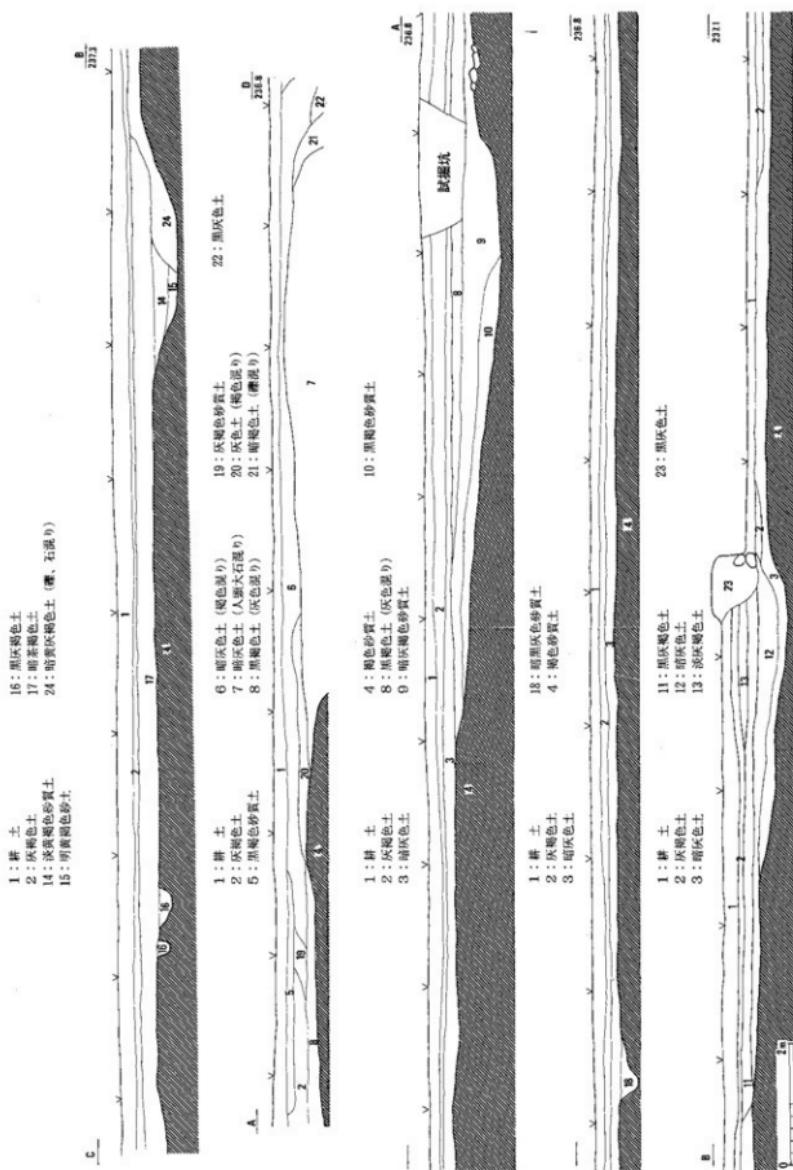
北壁側には径1m弱の東西に長い竪穴を検出。竪穴の中央部に直径10cm、長さ30cmの円筒形の無加工の自然石を直立させ支脚に利用していた。竪穴の基底部の造りは支脚をはさんで両側に長軸30~40cmの河原石を2石ずつ配置させ、石の周りを粘土で補強していた。この上に上部構造を有する竪穴を形成したと考えられる。竪穴は上部構造が垂直方向に崩落したと思われ暗褐色の練まった土がマウンド状に堆積していた。石製支脚周辺では上部に甕の破片が幾つも出土し、下部に炭が混じっていた。煙道は検出面より高い地點にあったと思われる検出できなかった。また、堆積土中より土器片の甕片が多く出土した。

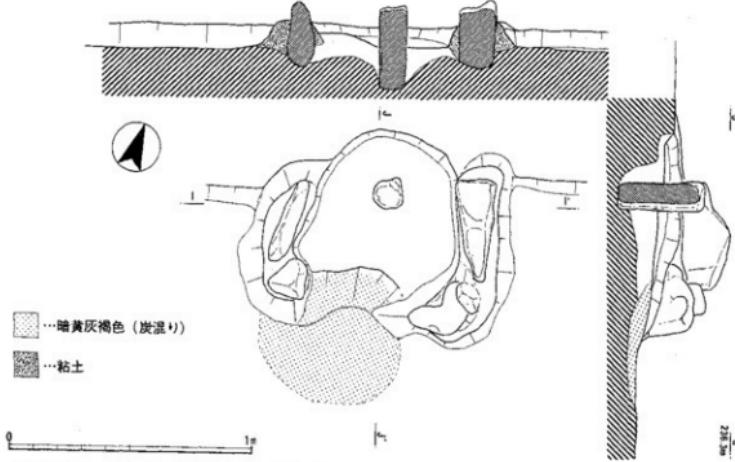
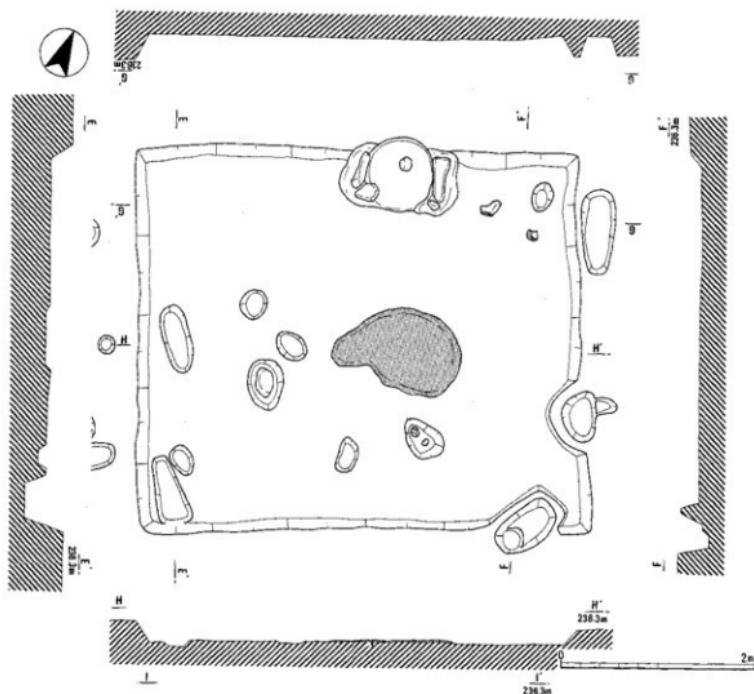
S H 5 S H 4 の東隣に位置し東西の一辺が約4m、南北の一辺が4mのほぼ正方形を呈する住居跡を検出した。各辺の中央部がやや外側に膨らむ。床面には柱穴を窺わせる小穴を数個検出した。床面積は約16m<sup>2</sup>で床面までの深さは北で20cm、南で10cmと北側の残りが良い。住居内には竪穴を含め明瞭な遺構は検出できなかった。また、床面は拳大の石が混じった礫層が横切っており上面での凹凸が激しい。この



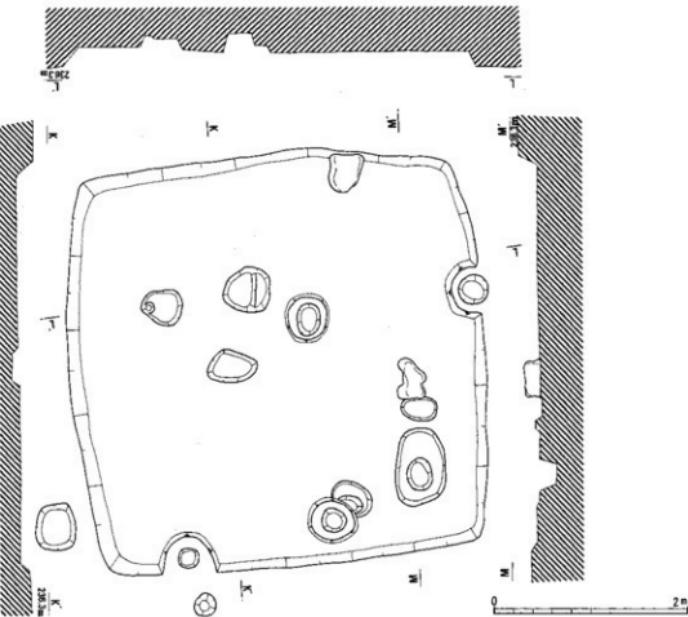
第三-4図 遺構平面図 (1:300)

第三一五図 調査区土層断面図 (1 : 80)

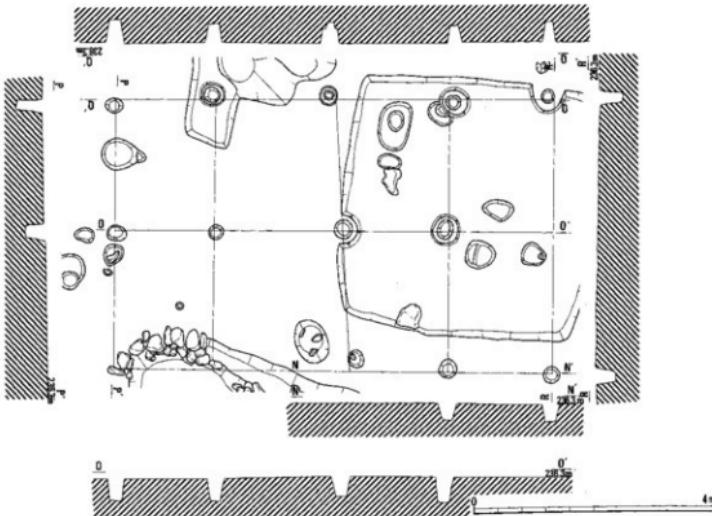




第III-6図 上: SH 4実測図 (1:50)、下: SH 4竪実測図 (1:20)



第三一7図 SH 5 実測図 (1 : 50)



第三一8図 SB 6 実測図 (1 : 80)

住居から土師器の壺（12, 14, 16）、杯（19, 21）、須恵器の蓋（24）が出土している。

#### B. 溝

S D 3 調査区を東西に横切る長さ70m、幅5m～1mにわたる自然流路を利用した溝と考えられる。この溝には2カ所に土坑状に深く掘り込んだ窪みがある。東端の溝底と西端のそれとの比高差は0.63mであることから東から西に流れていたものと考えられる。

#### C. 集石遺構（S Z 12）

調査区北東端で検出し、幅1.7m以上、長さ3m以上、深さ25cmの不定形な土坑で拳大～人頭大までの石が無数に混入していた。また、土師器の壺片（31, 32）、杯（29）、須恵器の杯（30）等が出土した。

#### D. 焼土坑（S K 10）

S H 5 南東部で長軸2.5m、短軸1.7mの不定形な戻の混じった土坑を検出した。土坑は平面「V」字状の形をし中央部が60cmと深く掘れ、周囲は10cm前後と浅い。土坑の西端部は焼土を伴った炭化物の塊が検出された。また、土師器の壺（33）が出土した。

#### E. 性格不明遺構（S Z 7）

長軸5m、短軸3m、深さ0.6mの長円形を呈し、底には拳大～人頭大までの多くの河原石が面的に検出された。人為的可能性が高い。

#### (2) 中世の遺構（平安時代後期）

##### A. 据立柱建物（S B 6）

S H 5 と重複するように立つ桁行き4間×梁行2間の東西棟である。棟方向はE34°Nである。柱間は桁行きが1.7+2.0m+2.0m+1.6mと東西で若干柱間が狭くなる。梁行きは2.3m等間で梁行き間隔がやや広い。柱掘形の径は平均約20cmで、柱通りは悪い。

柱間間隔を見るところの建物は東西に1間づつの両庇がつく構造の可能性が出てくる。そうなると母屋は2間×2間となり、棟方向は桁行きに比べ梁行きの長い方が棟方向となり南北を向いていた可能性も想定できる。柱穴より黒色土器椀（35）が出土した。

##### B. 石組遺構（S Z 7）

調査区北端で方形状を呈した石組遺構を検出した。石組は3段～1段程度残り、さらに下にさがる可能性を残した。この石組は現畦畔のすぐ南側にあり、反対側の水田は一段低くなっているため削平をおこなっている可能性が高い。そのため遺構があってもかなり破壊されていると判断し検出面を止めた。

### 3. 遺物

遺物はコンテナバットで約20箱である。多くは包含層からの出土で細片の占める割合が高い。また、遺構からの出土遺物は概して少ない。遺物の中心時期は奈良時代～鎌倉時代である。以下時代別、遺構別に概述する。

#### 1. 繩文時代の遺物

##### A. 包含層出土の遺物

土器（36, 37）は形態不明の体部片であり、（36）は下方に1条の凹線が施される。（37）は単節の縄文原体を横位に用いた後、二条の凹線で縄文を挟み込むように施す謂わゆる磨消縄文の土器と考えられる。いずれも後期のはいるものと思われる。

#### 2. 古墳時代の遺物

##### A. S D 3 出土の遺物

須恵器杯身（1～3）（1, 2）はいずれも体

部から口縁部にかけての破片であり、復元口径は11cm前後である。口縁立ち上がりは短く内傾し、口縁端部をつまみ上げる。（3）は口縁部の立ち上がりが直立し、端部内面に段がつく。

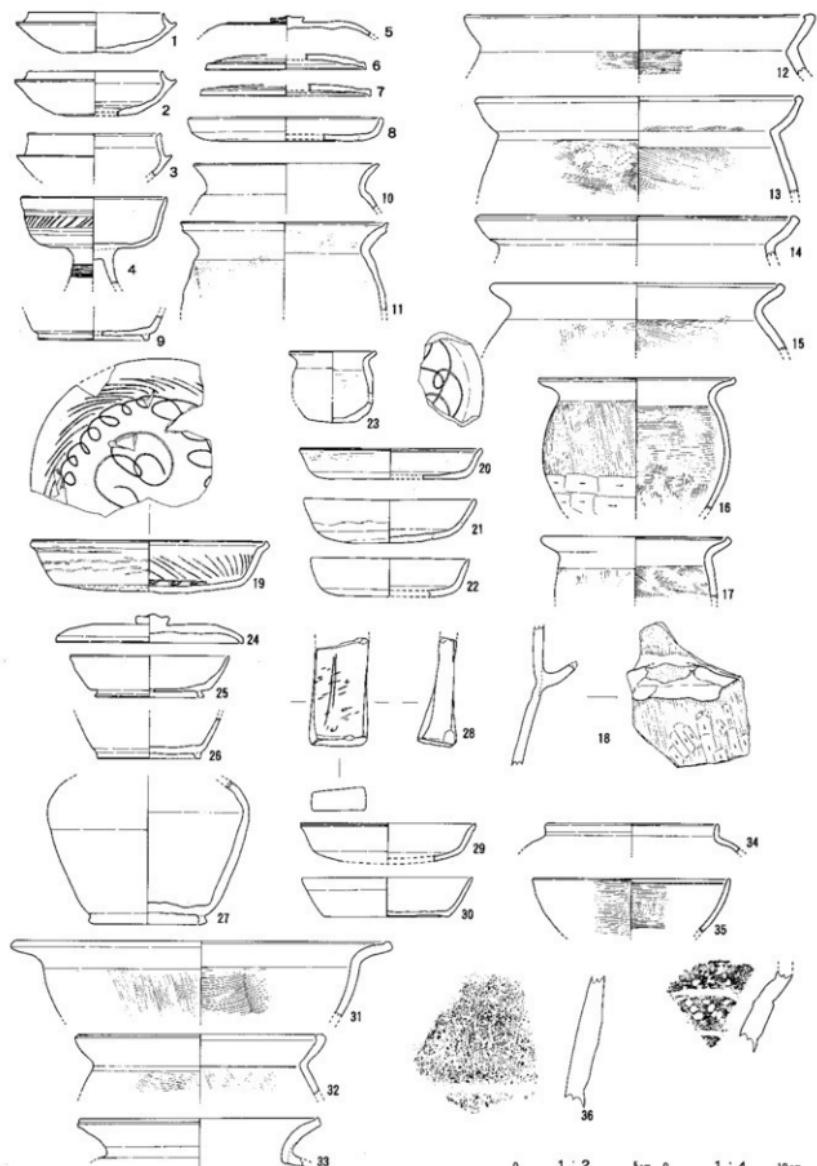
須恵器高杯（4）二条の凹線を有する脚部に体部から口縁部にかけ直線的に外傾する杯部がつく。体部中央には二条の沈線を巡らし、その中にヘラによる刻み目の文様を施す。杯身（1, 2）と同じ時期と考えられる。

##### B. 包含層出土の遺物

須恵器蓋（38）天井部から体部にかけロクロナデを施し口縁端部を丸くおさめる。

須恵器杯身（39）（1, 2）の杯身と同様である。

須恵器壺（62）底部のみの残存であるため時



第三一九図 遺物実測図 (1~35=1:4、36=1:2)

0 1:2 5cm 0 1:4 10cm

期などは正確には不明である。

### 3. 奈良時代の遺物

#### A. S D 3 出土の遺物

須恵器蓋 (5 ~ 6) (5) は偏平な擬宝珠様のつまみをもつ口縁部を欠き、天井部は緩く内弯する。(6, 7) は平らな天井部を有し縫部で内側に屈曲。土師器皿 (8) 体部へ口縁部にかけ残存し、粘土接合痕を残し、粗製なつくりである。

土師器杯 (9) 内外面をロクロナデし、高台を貼付ける。

土師器壺 (10, 11) 口縁部が緩く外反し端部が丸くおさまる (10) と端部外面に面をつくる (11) がある。

#### B. 積穴住居 (S H 4) 出土の遺物

土師器壺 (13, 15, 17, 18) 肩部から口縁部にかけ「く」字形に屈曲させ、口縁部は内弯しながら延

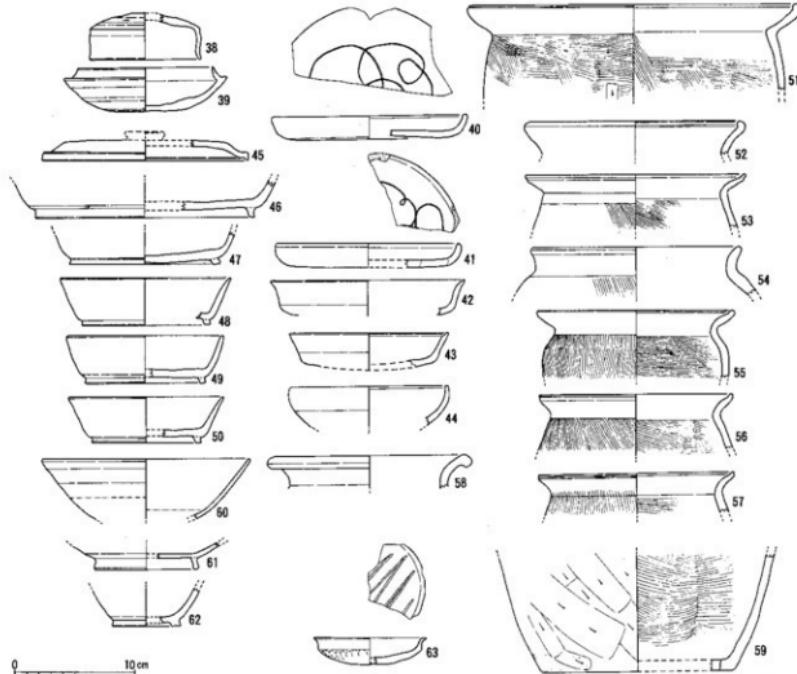
び端部を内に丸める (13) と短めに外反する口縁部に上方に丸くおさまる端部をつくる (15, 17) とがある。(18) は体部に三角形の把手がつく壺と思われる。

土師器杯 (20, 22) (20) は口縁部内面に沈線を巡らし底部内面にラセン暗文を外面に粗いミガキを施す。(22) は直に外傾した口縁部に摘み出すような端部をつける。

ミニチュア土器 (23) 推定高 6 cm 前後の土師器の壺である。

須恵器杯 (25, 26) ともに貼付け高台をもった杯で北東隅から出土している。(25) は外面ヘラ切り後ナデ調整されるが、(26) は未調整であり、高台が外側に貼付く点で (25) と相違する。

須恵器壺 (27) 北東隅から出土し、体部より上半を欠き、器形不明。体部外面に自然釉かかる。



第III-10図 遺物実測図 (1 : 4)

番 号	地質 帶	基 礎	山土位置 地 標	法 量 (m)		調整技術の特徴	耐 土	純度	色 調	既存 (%)	備 考		
				日 径	基 岩								
1	14-02	高山帯 砂岩	M4 SD1 下層	11.2	3.2	-	体面外側面をクロコナデ、底 部表面に切り取り調整	密	灰白(内面)	1/5			
2	14-01	*	K4 *	11.0	3.6	-	内外面をクロコナデ、底泥外 面をへて削り後ナメ	#	#	1/4			
3	14-03	*	K4 *	11.0	-	-	内外面をクロコナデ	#	#	1/7			
4	15-01	*	高砂	F5 *	12.0	-	内外面をクロコナデ、外側底 面をロココナデ、ナメ化	#	灰	1/4	偏平なつまみを割付ける		
5	14-07	*	高砂	L4 *	-	-	天井面外側面1/2をクロコナデ し、内部はロココナデ	#	灰白色	3/5			
6	14-06	*	高砂	J5 *	-	-	天井面内面にかけロコナデ を施す	やや粗	暗灰色	1/6			
7	14-05	*	高砂	J5 *	-	-	#	#	#	1/4			
8	15-02	土壤器 泥	J5 *	16.0	1.9	-	(1)縦溝ヨコカズラ、内部調整不 規則、外側底面サス後ナメ化 (2)内面ヨコカズラ、底面外側 調整不規則、頂け面	やや粗	良	淡黄緑	1/10		
9	15-03	*	砂	J5 *	-	-	高砂 内面ヨコカズラ、底面外側 調整不規則、頂け面	#	#	1/10			
10	15-05	土壤器 泥	F5 *	15.2	-	-	(1)縦溝ヨコカズラ、底面下部ナ メ化。 (2)底面外側面ヨコカズラ、内面ハ ケ目模様	やや粗	#	1/5			
11	15-04	*	*	*	下層	17.0	-	口縫溝ヨコカズラ、内面下部ハ ケ目模様、外側ハケ目	やや粗	内面 調整不規則、内面ヨコカズラ	1/4	ハケ目模様1/本cm	
12	16-03	*	K4	SH5	28.6	-	-	口縫溝ヨコカズラ、内面ハ ケ目模様	#	淡黄緑	1/8	ハケ目模様1/8本/cm 外側12本/cm	
13	7-02	*	*	J3 SH4	26.7	-	-	#	やや粗	#	1/8	# # 7本/cm # # 7本/cm	
14	16-02	*	K5	SH5	25.8	-	-	(1)縦溝外側ヨコカズラ、内面直 横ハケ目ヨコカズラ。	#	#	1/20		
15	7-01	*	J3	SH4	24.0	-	-	(1)縦溝ヨコカズラ、体面外側ナ メ化のハケ目、内側縦方向のハ ケ目。	#	#	#	口縫溝 のみ	
16	17-01	*	K4	SH5	16.0	-	-	口縫溝ヨコカズラ、体面外側上 部ナメ化のハケ目、下部ナ メ化のハケ目	#	#	1/5	外側ハケ目模様7~8本/cm 内面 # 7~9本/cm	
17	6-05	*	J3	SH4	15.6	-	-	口縫溝ヨコカズラ、体面外側ナ メ化のハケ目、内面ヨコカズラ のハケ目	#	#	1/10	全体に摩耗著しい	
18	8-02	土壤器 泥	J3	*	-	-	底面外側とハケ目、外側 下部に一層ハケ目	やや粗	良	淡黄緑	1/20	三角形状の把手つく	
19	8-03	*	K3	SH5	19.1	4.3	底 部	口縫溝ヨコカズラ、内面底面ナ メ化。	密	暗黄緑	1/4	口縫溝内面に沈殿物質、底 部内面にラセン状又は外周 にV字形を施す	
20	6-03	*	*	J3	SH4	15.0	2.5	12.0	口縫溝ヨコカズラ、内面ナメ化 のハケ目	#	良	1/8	底部内面にラセン状波文を施す
21	16-01	*	K3	SH5	14.0	3.6	-	口縫溝ヨコカズラ、内面直 横のナメ化、外側底面柱状残 渣。	やや粗	淡黄緑	5/8	柱状遷移あり	
22	8-01	*	I3	SH4	13.0	3.1	-	#	粗	#	1/6		
23	7-03	*	J3	*	7.2	-	-	口縫溝ヨコカズラ。内面底部に ハケ目ナメ化、他はサス	やや粗	淡黄緑	1/8		
24	17-02	葉巻器 塵	K4	SH5	15.3	2.3	2.7	大穴部1/2をクロコ削り、他 はロコナメ。	密	灰	1/2	偏平な発達発達のつまみを つける	
25	6-04	*	砂	J3 SH4	13.2	3.4	9.0	口縫溝、底面外側ともロコ ナメ化、底面内面にハケ目	やや粗	#	1/3		
26	6-02	*	*	*	-	-	#	体面内外面をクロコナメ、底面 外側に切り取り調整	#	#	2/5		
27	6-01	*	長繩器 塵	*	*	-	#	体面外側ともロコナメ。	#	灰白色	1/2		
28	7-04	石炭器 砾石	*	*	-	-	表面に使用感残る、一面に二 角形の板状剥離と打痕あり。	-	変成岩系	1/2			
29	9-02	土壤器 杯	P3	SZ12	14.2	-	-	口縫溝ヨコカズラ、外側底面直 横。	やや密	良	淡黄緑	1/4	
30	9-01	致意器	*	*	13.9	3.2	-	口縫溝～体面外側面ヨコカズラ テ、底面外側ヨコカズラ後ナメ化	#	硬	灰白	1/3	
31	10-01	土壤器 泥	*	*	30.5	-	-	口縫溝ヨコカズラ、体面内側横 方向のナメ化、外側縦方向のハ ケ目。	#	良	淡黄	1/10	ハケ目模様内面6本/cm # # 8本/cm
32	9-04	*	*	*	19.4	-	-	#	#	淡黄緑	1/10	# # 3本/cm # # 5本/cm	
33	10-02	*	I.4	SK10	19.4	-	-	口縫溝内面ハケ目を施した後 ヨコカズラ	やや粗	#	1/4		
34	1-01	微生物 容器	M2	pit2	14.0	-	-	口縫溝ヨコカズラ	#	硬	灰	1/10	
35	1-02	黒色I鉱 銅	K3	pit2	-	-	-	(1)縦溝ヨコカズラ。他はナメ化 内外面に豊かなハラシ方	#	良	黑灰	1/12	

表III-1 遺物観察表

石製品砥石 (28) 北東隅から出土し、四面に使用痕がある。

### C. 壺穴住居 (S H 5) 出土の遺物

土師器壺 (12, 14, 16) やや直線的に外反する口縁部を有し端部を内側につまみ出し上方にやや面をつくる (12, 14) と (16) は頭部が丸みをもって屈曲し口縁部は大きく外反する。口縁端部は上方に丸みをつくる。

土師器杯 (19) 口縁端部を外側に折り、上方につまみ上げ内面に段をつくる。内面に放射状、ラセニ暗文を施し、外面に粗いミガキを施す。

土師器楕 (21) 粘土接合痕を残し、粗製なつくりである。口縁端部はまるくおさまる。謂ゆる田舎

風模である。

須恵器蓋 (24) 偏平な擬宝珠様のつまみをつけ、天井部から口縁部にかけゆるく内弯し端部は下方に屈曲する。

### D. 集石遺構 (S Z 12) 出土の遺物

土師器杯 (29) 湾曲気味な底部を有し口縁部は直に外傾する。口縁端部は上端をやや外側に引き出し丸くおさめる。

須恵器杯 (30) 平坦な底部から直線的に外方へのびる口縁端部は薄く丸くおさまる。

土師器壺 (31, 32) (31) は口縁部径に比べ体部径が小さく口縁部が大きく外反し、端部内面に沈線をもつ。(32) は口縁端部を上方に丸くおさめる。

番 号	收容 番 号	器 種	出土位置 遺 構	法 量 (cm)			調整技 法の特徴	施 工	焼 成	色 調	残 存 (%)	備 考	
				口 径	高 度	其 他							
36	12-07	縞文土器	G 4 包	—	—	—	体部に一束の凹縫つく	白石細砂を多く含む	良	燒系灰	1/30		
37	12-08	*	H 4 *	—	—	—	体部に縞文と二条の凹縫つく	*	*	*	*		
38	13-01	縞唇器 直	H 5 *	9.0	3.8	—	天井部1/2以上から切欠き溝 有、底はクロコナギ、	やや青	灰	灰	1/5		
39	13-05	*	身	M 5 *	10.0	3.6	—	口縁部～体部内面クロコナギ、 底が舟形～うつりかき測定	*	灰白	1/4		
40	5-02	土師器 直	L 3 上面	16.0	1.9	—	口縁部クロナギ、内面ナガヒ ミガキを施す。底部外周接合部	*	良	緑	1/5		
41	12-01	*	G 4 包	14.0	1.9	—	*	*	*	*	1/6		
42	2-05	*	杯	J 3 *	16.2	—	—	口縁部クロナギ、体部内外西 ナギ、	*	*	*	1/13	
43	11-02	*	G 5 *	13.0	—	—	*	*	*	蘭青緑	1/6		
44	11-03	*	碗	I 6 *	13.0	—	—	口縁部ヨコナギ、軸ナナデ	やや粗	淡黄	*		
45	2-01	縞唇器 直	J 5 *	17.0	1.7	—	天井部～内面にかけゆるクロナ ギ、	密	灰	灰	1/4		
46	13-04	*	H 4	M 5 *	—	—	両底径 18.0	内外面クロナギ、底部外周 ロクロケヌ後ナギ、	*	灰白	1/8		
47	12-03	*	H 4 *	—	—	12.4	内外面クロナギ、底部外周 ロクロケヌ	*	*	灰	1/4		
48	12-02	*	G 4 *	14.0	3.9	10.4	口縁部～体部内面クロナ	*	*	*	1/6		
49	2-03	*	?	J 3 *	13.0	3.9	9.8	口縁部～体部内面クロコナギ 底部内面クロコナギ	*	灰白	1/5		
50	2-04	*	K 6 *	12.8	3.7	9.0	口縁部ヨコナギ、軸ナナデ 底部内面クロコナギ	*	*	*	1/10		
51	3-03	土師器 縞	P 2 上面	27.6	—	—	口縁部ヨコナギ、内外面ヨコ ハケ目	やや密	良	燒成	1/10	ハケ目削 内外面とも5本/cm	
52	12-05	*	J 5 包	18.2	—	—	口縁部ヨコナギ	やや粗	淡黄緑	1/10			
53	3-04	*	J 3 *	18.0	—	—	口縁部ヨコナギ、体部内外西 ナギ	やや青	*	*	1/10	ハケ目削外5～6本/cm 内面9本/cm	
54	11-01	*	G 5 *	17.0	—	—	口縁部ヨコナギ、内面ナナ デ、内面ヨコナギ	—	*	*	外 面3～4本/cm		
55	2-02	土師器 縞	K 3 包	16.4	—	—	口縁部ヨコナギ、内外面ハケ 目	やや粗	良	蘭青緑	ハケ目削 内外面7～8本/cm		
56	13-02	*	J 5 *	16.0	—	—	*	*	淡黄緑	1/10	* 5～6本/cm		
57	3-02	*	J 5 *	16.2	—	—	*	*	蘭青緑	1/10	*	*	
58	11-05	縞唇器 *	N 6 *	17.0	—	—	口縁部クロナギ	密	硬	灰	1/8		
59	13-03	土師器 縞	I 5 *	—	—	底径 15.6	体部外周下半フクナリ、内面 ハケ目	やや粗	良	燒成	1/4	ハケ目削内面5～6本/cm	
60	11-04	灰釉陶器 植	F 5 *	17.2	—	—	口縫部一全体在にかけゆるクロナ ギ、	やや粗	灰	灰白	1/10	上半全面に灰焼	
61	4-04	*	F 4 *	—	—	高台径 8.4	体部内面クロナギ、外表面 部分クロコズリ	*	*	*	1/4		
62	11-06	須唇器 縞	H 5 *	—	—	5.6	内外面クロナギ、底部外面 ナナデ、内面ミガキ	*	*	*	1/10		
63	13-06	瓦器 三	N 3 *	9.2	2.1	—	口縁部ヨコナギ、外表面鉢底接 合ナナデ、内面ミガキ	*	良	蘭青	1/4		

表III-2 遺物観察表

## E. 焼土坑（S K 7）出土の遺物

土師器壺（33） 口縁端部外側に面をつくる点で甕（11）に類似する。

## F. Pitからの遺物

須恵器短頸壺（34） 直立する短い口縁部にまるくおさまる端部がつく。

## G. 包含層からの遺物

土師器皿（40, 41） 内面にラセン暗文を施し口縁端部が内弯するようにおさまる。外面にミガキを施す。

土師器差杯（42, 43） やや内弯する底部に外向きにおさまる口縁端部をつける（42）と口縁内面に段をもつ（43）がある。

土師器椀（44） 体部から口縁部のかけ残存し内弯する口縁部端部は薄く内側に丸くおさまる。

須恵器蓋（45） 天井部から口縁部にかけ緩く「Z」字状をなし端部で下方に屈曲する。

須恵器杯（46～50） いずれも「ハ」字形に開いた高台は底部端近くに貼付けられ、高台の接地部は全面に及ぶ。

土師器甕（51～57） （51）は甕（13）に類似する。（52）は口縁端部を内側に折り丸くおさめる。

（53, 56, 57）は外反する口縁部に面をもつ端部をつける。（54）は肥厚のある口縁端部をつくる。

（55）は甕（15）に類似する。

須恵器甕（58） 口縁部のみ残存し、外反する口縁部に肥厚のある端部を外側につくる。

土師器瓶（59） 低部から体部にかけて残存する。

## 4. 平安時代後期～（中世）の遺物

### A. 捶立柱建物（S B 6）出土の遺物

黒色土器（35） 内外面ともに黒灰色を呈し濃密なミガキがかけられ口縁部内面に沈線を巡らす。

### B. 包含層出土の遺物

灰釉陶器椀（60, 61） （60, 61）は薄手の体部。（60）は丸くおさまる端部をつける。内外面に灰釉を被りともに残存状況は悪い。

瓦器皿（63） 湾曲する体部を有し口縁端部は外方向に強くつまみ出される。内面にジグザグの暗文キをかける。

## 4. 結語

川南A遺跡は、木津川支流の標高239m前後の沖積平野上に位置する奈良時代から平安時代後期にかけて営まれた遺跡である。ここで今回の調査結果について若干まとめておきたい。

### 1. 各遺物の所属する時期

遺物は縄文時代から鎌倉時代まで広範囲にわたり、広い時代範囲を示している。その中で遺構に関係する遺物の時代、ここではS D 3、二棟の窪穴住居、集石遺構（S Z 12）、撚立柱建物について出土遺物の時期を考える。尤も、調査対象の個体数が少ないことや地域差等問題は残る。

① S D 3から出土した須恵器の杯身（1, 2）はその形態から陶邑編年TK209型式に、（3）はTK23型式に併行することから古墳時代後期の遺物と考えられる。また、須恵器蓋（6, 7）は天井部から口縁部まではほぼ平に推移し、口縁端部で下方に屈曲する点で概ね中村編年のIV～4段階に比定できると思われる。のことから奈良時代後期の遺物で

であろう。

② S H 4から出土した土師器杯（20）は内面のラセン暗文、外面の粗いヘラミガキ、底部外面にヘラ削りの痕が窺えることから奈良時代中頃と考えられる。須恵器（25, 26）も同時期と見られる。

③ S H 5から出土した土師器杯（19）はその調整技法から土師器杯（20）と同時期かやや後であろう。須恵器蓋（24）は天井部から口縁端部にかけ緩やかに内弯し、端部が下方に屈曲する点で同編年IV～2段階の奈良時代中頃に比定できよう。

④ 集石遺構（S Z 12）から出土した須恵器杯（30）は、その形態の存否関係から奈良時代の範疇に入るであろう。

⑤ 撥立柱建物（S B 6）の柱穴から出土した黒色土器（35）は内外面が黒灰色を呈し、両面に濃密なミガキがかけられる等の点から黒色土器B類と思われ、平安時代後期に比定できよう。

## 2. 壺穴住居（SH4, 5）について

青山町では遺跡発掘例そのものが少ないと奈良時代の壺穴住居についてその類例を求めるることはできない。この時期、壺穴住居を伴った遺跡は上野市の蓮池<sup>①</sup>、岸之上<sup>②</sup>、名張市の中之瀬<sup>③</sup>、糸川橋<sup>④</sup>、大山田村の歌野<sup>⑤</sup>、西沖<sup>⑥</sup>の各遺跡等で検出されているので、それら近隣地域と比べながらSH4、SH5について若干述べることとする。

### A. 壺穴住居の規模

壺穴住居の床面積であるが面積の判明している壺穴住居40棟の平均床面積は蓮池で47m<sup>2</sup>、歌野で15.4m<sup>2</sup>、岸之上で16.5m<sup>2</sup>、中之瀬で19.2m<sup>2</sup>（但し、飛鳥時代の終わり～奈良時代前半まで）、糸川橋で19.3m<sup>2</sup>、西沖で17m<sup>2</sup>と蓮池を除き概ね15～19m<sup>2</sup>におさまる傾向にある。当遺跡のSH4=18.4m<sup>2</sup>、SH5=16m<sup>2</sup>もこの範囲内におさまり、奈良時代後半の伊賀の平均的な壺穴住居の規模といえよう。

### B. 窯について

窯方向は歌野遺跡では40%が北側にあり、鴻之瀬でも同じ傾向にある。西沖遺跡ではその位置は一定せず、東にあるものがやや多い。また、検出不能例も多く、その意味では当遺跡も例外ではない。当遺跡のSH4の窯と同様な造りとして歌野遺跡で確認された6棟の窯の内4棟の壺穴住居でまた、鴻之瀬、糸川橋の壺穴住居でも同様の例がみられる。これらは窯の支脚と（30～40cm大の河原石を数個用いて）

側壁の基礎に石を利用している点で共通しており、決して特異な造りの窯ではなく、この時期のごく一般的な形態であったことを窺わせる。なお、歌野遺跡は現在当遺跡から大山田村に抜ける唯一の県道青山大山田線上にあり、古来より通じていた地域と考えられる。

### 3. その他

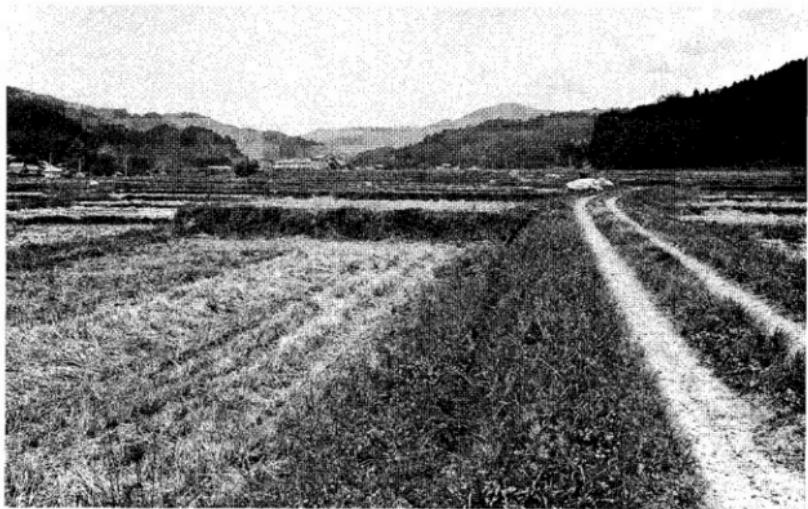
溝（SD3）には2箇所の窓があり、いずれも底には拳大～人頭大までの河原石が面的に置かれている。これは人為的な可能性が強く、一時的に水溜をするために作ったと思われる。この流路の存続時期は溝からの出土遺物（古墳時代後半～奈良時代後半）とこの遺構上面に厚く堆積していた包含層遺物（奈良～鎌倉時代が中心でその他は少ない）を考えに入れると最小限、奈良時代の間存続していたといえる。

当遺跡の2棟の壺穴住居は奈良時代中頃～後半に建てられ、併存するSD3を何らかの形で生活に利用していたと考えられる。平安時代に入って埋没し、平安時代後期にSB6が建てられた。鎌倉時代にはいると人の住まない場所となり、水田になっていったと考えられる。人の住む居住域は東方向（当遺跡の包含層遺物は中世のものが多く、それらは東の微高地より流入してきていることから人の居住の可能性を窺わせる。）、または北方向（現在の居住域）へと移っていったと思われる。（吉澤 良）

〔註〕

- ① 川北泰助「第十編 自然環境」「青山町史」青山町史編纂委員会 1979
- ② 中・真夫「第一編 前史 第二章 構文時代」「青山町史」青山町史編纂委員会 1979
- ③ 前掲 註②に同じ
- ④ 吉澤 良「勝地大坪遺跡（古墳群）」「平成3年度農業基盤整備事業地域 地理文化財調査報告 第一分報」三重県教育委員会・三重県地理文化財センター 1991
- ⑤ 前掲 註②に同じ。「第二章 孫生文化の時代」より。
- ⑥ 前掲 註②によると鍋屋は現在東京国立博物館に所蔵されている。
- ⑦ 「青山町の文化財」「青山町教育委員会 1991」本郷子では113基が収録されているが、勝地大坪古墳の3基を加え116基とする。
- ⑧ 山本雅晴「古墳時代の首長墓の形式の変遷と地域構造」「三重県史研究 第3号」三重県 1987
- ⑨ 前掲 註⑥に同じ。
- ⑩ 二保吉行「深原古墳発掘調査報告」「青山町遺跡調査会 1986

- ⑪ 中島千尋「日岡川向遺跡発掘調査報告」青山町遺跡調査会 1986
- ⑫ 丹田了三「青山町阿保 桶ヶ谷15号墳」「青山町遺跡調査会 1986
- ⑬ 商賈 註④に同じ。
- ⑭ 商賈 註②に同じ。
- ⑮ 商賈 註④に同じ。
- ⑯ 「陶芸古窯址群」平安考古学園クラブ 1966
- ⑰ 中村 正「和泉陶邑窯の研究」柏青房 1992
- ⑯ 「古代の土器 I 都城の土器集成」古代の土器 研究会編 1992
- 「古代の土器研究－律令的土器様式の西東－」古代の土器研究会編 1992
- ⑯ 商賈 註⑦に同じ。
- ⑯ 中森英夫「上野市蓮池 遺跡化遺跡」「昭和56年度農業基盤整備事業地域 地理文化財調査報告」三重県教育委員会 1983
- ⑯ 森前 乾ほか「青山町大山田村 西沖遺跡」「昭和55年度農業基盤整備事業地域 地理文化財充実調査報告」三重県教育委員会 1981
- ⑯ 商賈 註②に同じ。（同文献は同地域に中世の聚落が存在したと指摘できるのは「第六編中世 II - 戦国時代」の城壁からである。尤も、集落そのものを直接指しているわけではない。また、下川原から高麗にかけ村落が存在したと窺わせる初類は平安時代に高麗夷遠の征伐の一部として「田畠日録」に記述されていることを同文献は指摘している。）



調査前風景（西から）



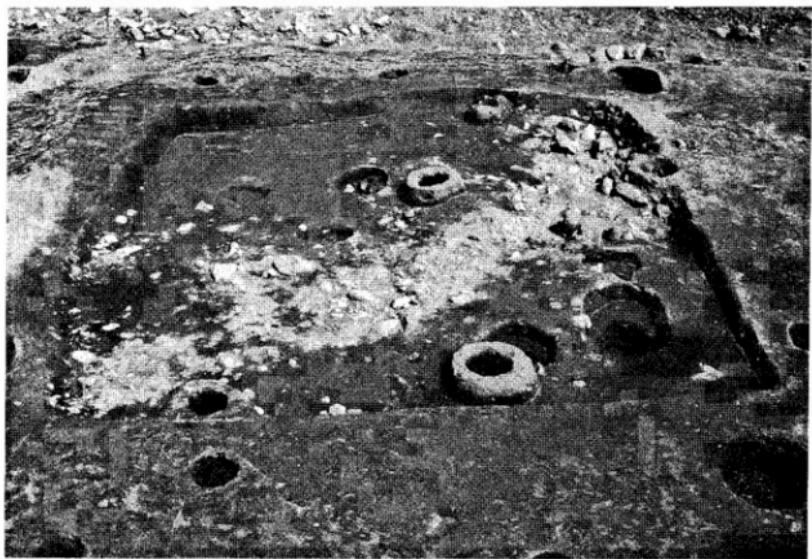
調査区全景（東から）



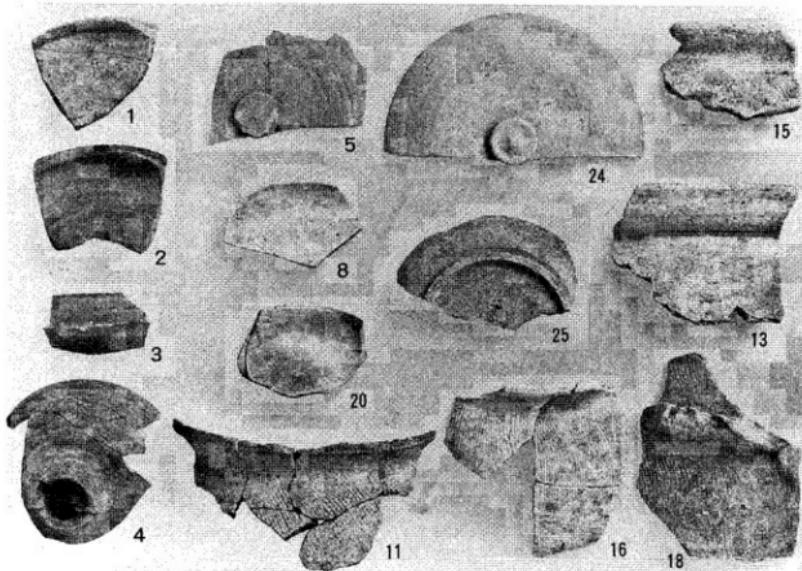
S H 4 (南から)



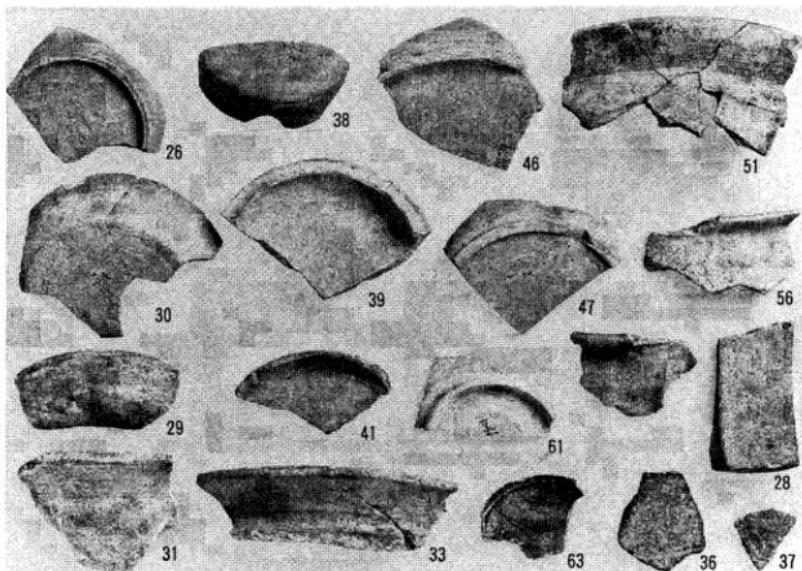
S H 4 対 (南より)



SH 5 (南から)



出土遺物 (1 : 3)



21



40



27



19

出土遺物 (1 : 3)

## IV. 名張市滝之原 向出A遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

室生山系に源を発する二級河川の小波田川は狭隘な谷の中を流れ、伊賀盆地の南西丘陵を抜けて名張川に合流する。

向出A遺跡（矢印）は、小波田川の上流部の谷合筋、標高280mの水田に立地し、周囲は低位で急峻な山が幾層にも連ねる山間部の中の遺跡である。行政上、名張市滝之原字向出に所在する。滝之原地区は名張市の中心部から10km程東へ入った山間部に位置し、名賀郡青山町種生に近い。周辺には古墳時代の古墳群や中世の城館跡等の遺跡が多く所在するが、近年当地域には通勤圏の拡大により大阪からの流入者が多く所謂“ベッド＝タウン”を形成し、また企業誘致による土地開発が進みつつある中で遺跡保存

か開発かのジレンマに陥いる状況にある。以下に名張市における遺跡の概要を簡略に述べることとする。

**縄文時代** この時期で確認されている遺跡は宇陀川右岸の沖積平野上に多く見られ、前期末には母村的な集落が形成されている。<sup>①</sup> 沖積平野と扇状地とが重なる付近に所在する赤目町では早期の押形文土器が出土している<sup>②</sup>。また、中・後期の深鉢土器などが出土し長期にわたる生活の営みがあったことが窺える。さらに、丘陵部の白早稲遺跡（61）では早期のサヌカイト製有舌尖頭器が出土している<sup>④</sup>。

**弥生時代** 蔵持黒田遺跡（15）では弥生時代後期末の堅穴住居3棟が検出されたのをはじめ平尾山遺跡（50）など丘陵上や平地部等で遺跡が見られる。



第IV-1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

No 1	天久保	11	下垣内	21	中出	31	松倉農後守	41	大江1号墳	51	夏見磨守跡
2	福社氏堡	12	西畠A	22	島藤氏宅	32	塙原古墳群	42	赤川橋	52	赤坂
3	香取山古墳	13	西畠B	23	山上出羽守	33	原出	43	高北氏堡	53	坊垣内
4	右衛門ノ宅址	14	登尾古墳群	24	岩崎六十郎宅	34	丈間谷	44	深川氏堡	54	後出
5	上嶋氏堡	15	藏持黒田	25	岡島氏宅	35	浦之巣	45	奥出古墳群	55	中川原
6	福永氏堡	16	黒田吉窓跡	26	赤井坂古墳群	36	小谷古墳群	46	人參峠	56	上山
7	長門某堡	17	西ツ切	27	井上権之助保	37	福地	47	下川原	57	男山古墳群
8	大平堡	18	池ノ谷	28	淨玄誠	38	宮本	48	芝出A	58	赤坂古墳群
9	下山甲斐守堡	19	瀧川氏城	29	中切	39	久保	49	芝出B	59	北畠古墳群
10	兼前一號墳	20	板町中将宅	30	中ノ坊	40	上出	50	平尾山	60	上山古墳群

表IV-1表 遺跡名称一覧

しかし、その多くは包蔵地であり、土器片が採集されているのみである。

古墳時代 この地域で前期の遺跡は名張盆地南部の宇陀川流域において庄内式並行期～布留式並行期の土器が出土しており、前代からの連続性を示している。

中期では名張盆地北部の美旗に4世紀末から6世紀前半にかけて一世代一墳の大型前方後円墳や帆立貝形古墳が築造され、連続と古墳築造が行われている。現在、河川流域による地政学上の観点からその勢力基盤を比土、古群地区に想定している向きもあるが、確たる実証に乏しい。平成4年に比土地区に古墳時代中期頃の他に類を見ない庭状遺構をもつ祭祀跡が発掘調査されたが、この遺跡が美旗の勢力と

どう関連するか注目したい。しかし、名張盆地南西部における勢力者に比定できる中期の大型古墳は未だ確認されていない。また、この時期鴨の巣道跡(35)では堅穴住居が16棟検出されている。

後期にはいると名張川流域の平野部に面した山の尾根筋に小規模古墳が支群単位で造営される。藏持の塙原古墳群(32)、夏見の赤坂古墳群(58)、北上田古墳群(59)、上山古墳群(60)、少し離れて山の尾根に中村古墳群(62)など築造される。これらの古墳はいずれも主体部が横穴式石室の構造を持ち規模の小さなもので円墳、方墳の二種類が確認されている。形態的には円墳が圧倒的に多い。中でも中村古墳群の2号墳は全長11.2mの巨大な横穴式石室をもち名張盆地においても鹿高神社古墳と並んで有数



第IV-2図 遺跡地形図 (1:5,000)

の規模を誇り、後期における在地の有力者との見方ができる。

当遺跡周辺では番取山古墳（3）があり直径10m程の円墳1基が確認されており、石室内は祠として祀つられている。当地域の有力者の可能性が高い。

奈良時代 この時期名張は畿内に位置づけられ、東国に通ずる主要道として重要な役割を果たす。多数の掘立柱建物、堅穴住居が検出され圓面硯、帶金具等の官衙的色彩の強い遺物が出土している鴻之巣遺跡（35）、国指定史跡になった夏見庵寺（51）跡からは金箔の貼付された堆仏が出土し白鳳期を代表する芸術品との評価を得ている。

平安時代以降 都が奈良から京都に移る頃、律令制の瓦解の兆候が早くも見え、東大寺をはじめとす

る有力寺社や藤原氏の荘園が宇陀川両岸に形成される。その後黒田の悪党に代表される地方土豪の台頭が顕著となり荘園をめぐる抗争が激しくなる。かくて地方土豪は自己防衛の手段として掘りを巡らす城館を築造し始める。このような中世の城館は伊賀では数多く知見でき名張市において現在66館が確認されている。

当遺跡周辺には四方を土塁で囲み、見張り台をもつ福杜氏堡（2）、丘陵各所に切り込みをいれ平垣面を造り、土塁と空堀で仕切られた3つの郭をもつ大規模な要塞といった赴きのある上嶋氏堡（5）、伝承の福永氏堡（6）等がある。当遺跡は昨年調査した天久保遺跡（1）から数百mの所に所在する。

## 2. 遺構

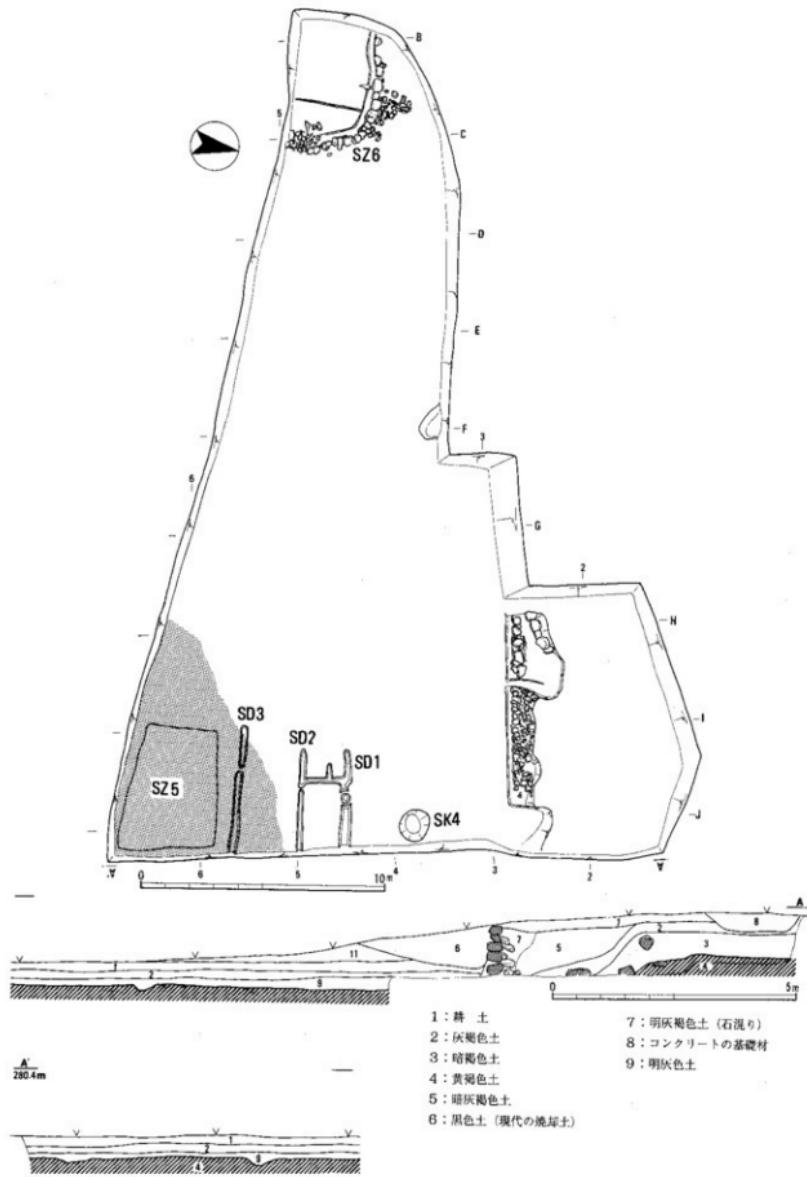
向出A遺跡は低位な山に挟まれたV字状の谷に形成された沖積地に立地し、現況は水田である。西に向かって傾斜し、東西の比高差は0.7m前後である。調査区は道路南側の一段下がった地点にあり、北と南の高さの異なる水田の調査をおこなった。北側の土層の基本的層序は第1層=耕作土（20cm）、第2層=灰褐色土（12~30cm）、第3層=暗褐色土（30~40cm）であり、この第3層の中に中世から近世にかけての遺物が含まれていた。また、南側では第3

層に変わって明灰色土になる。第4層=黄褐色土（地山）である。遺構検出面は第4層上面で北側、南側とも同様である。

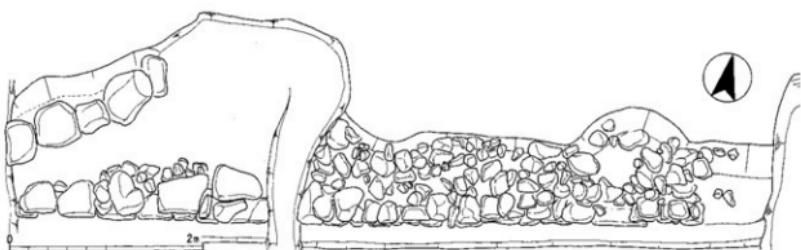
遺構検出面は北側と南側とで比高差が0.8mあり、北側が高くなっている。断面観察により北側では土層が現在より2m北寄りで落ち込んでおり後世において盛土をおこなって田面を拡張したと思われる。北側で検出した石垣はその際設けられたものであり、拡張した田面の高度を一定にするための畦畔であろ



第IV-3図 調査区位置図 (1:2,000)



第IV-4図 造構平面図(1:200)、土層断面図(1:100)



第IV-5図 北側石垣 (1 : 50)

う。調査開始時点では石垣は土砂により埋没しており北から南に向かう緩斜面となっていた。南側では北でもぐり込んだ第4層が露出したところをもって検出面とした。この層は均質で混じりのない土であった。

主な遺構は石組遺構2基、溝3条、整地用集石等である。以下遺構別に述べる。

#### (1) 集石 (SZ 5)

調査区南東隅で検出した拳大～直径1m大までの河原石が無数にはいった集石である。当初、これら集石は検出面上では見つかず僅かに大きな石の頂部が露頭するだけであった。確認のためトレンチを

入れて下層を調査した所、精緻な黄褐色土(検出面)の下に暗灰色砂質土(石混じり)の層があり、この中に無数の石が含まれていた。その集石中より細かな瓦器片、土製羽釜(5)等が出土した。出土する土器は瓦器類が多くその他は土師器の小片であった。東壁の断面観察では遺構面に落ち込み等は窺えず、この暗灰色砂質の層は北側に行くほど石が少くなり完全な地山になる。そのため遺構面はこの黄褐色土が妥当であると考えた。

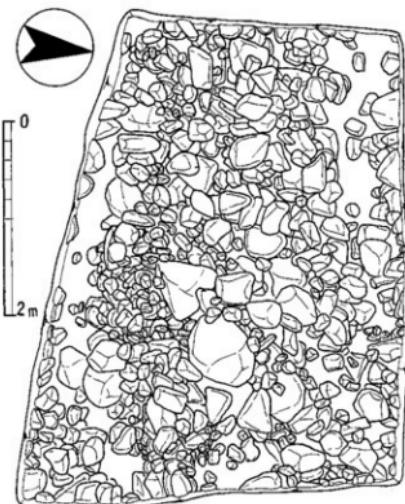
集石の範囲は調査区南側を中心とし東西方向に広がり、南北方向は狭い。トレンチにより確認した範囲をスクリーン・トーンで図示した。

#### (2) 石組遺構 (SZ 6)

調査区西端に東西に4m、南北に3mの逆「L」字状になった石組遺構を検出した。石組は多いところで三段、少ないところで一段残るのみで、その多くは南側に崩れるように積み重なっていた。南側は石垣を境にして10～15cm程低くなっている。また、石垣に面して南側に僅かな溝跡を検出した。低い側の検出面より南北に置かれた棒状の木切れが出土した。また、擂鉢、染付け椀等の小片が出土した。

#### (3) 溝 (SD 1～3)、土坑 (SK 4)

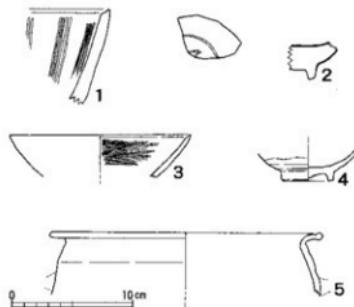
SD 1～3 調査区東側に東西に約4m、幅20cm、深さ10cm程の溝を3条検出した。溝からは識別不明の土器片が出土した。同地点から北へ約2mの所で直径1.2m、深さ約20cmの土坑(SK 4)を検出した。土坑からは時期不明の土器片点が出土した。いずれも埋土は淡青灰色土であり同時期の遺構と思われる。また、溝は近世の耕作によるものと考えられる。



第IV-6図 SZ 5平面図 (1 : 50)



第IV-7図 S Z 6 実測図 (1 : 80)



第IV-8図 遺物実測図 (1 : 4)

体部上半に鉗の剥離痕を残し、体部から口縁部にかけて「く」字に外反し端部を丸くおさめている。大和B型の特徴に類似し13世紀～14世紀に併行するものと思われる。

瓦器碗（3） 体部から口縁部のかけて緩やかに内湾し口縁部内面に明瞭な沈線を有す。内面には濃密なミガキがみられ、外面は摩耗著しく調整不明。

陶器擂鉢（1） 直線的に伸びる体部上端にとりつく口縁部は内側に凹線状の雀みを有し、内面には2.5cm間隔に4本のスリ目を刻む。胎土には5mm大的石英を含み茶褐色を呈す。16世紀中葉の所産と思われる。

青磁碗（2） 高台部のみの残存で低部の器壁厚く、低部を削り出して高台とする。見込み内面には陰刻模様が施され、龍泉窯の青磁碗と思われる。時期的には1段階におさまるもので破片等の残存状況から12世紀～13世紀中葉と広くとらえざる得ない。

## 2. 近世の遺物

施釉陶器碗（4） 体部下半から高台にかけて残存し、ロクロ成形の椀に灰緑色の釉薬をかけ高台を削り出している。

## 4. 結語

この調査を振り返って若干考えるところを述べて結語にしたい。

第1は、北側の水田の拡張時期と石組造構の築造についてであるが、石組造構（石垣）より江戸時代以降～近代までの遺物が混じることから比較的新し

いと考えられる。土地の古老によれば大正から昭和の時期に設けられたものとの証言を得た。そして、築造後土砂により埋没したと考えられる。

第2に南側で検出した集石は出土遺物やその状態から自然とは考えられず、人為的な作業により造ら

れたものと思われる。また、土層観察ではこの石の混じった暗灰色砂質土層が第4層（検出土層）の下に平行に走り、四方へと広がっている。この層の集石は南側で厚く堆積しており、北に広がるにつれ石の量を減していく。また、土層には層的な乱れは見られない。そのことから集石は石を投入しながら同時に土砂を加えつつ地面を整えていったものと思われ今日的な「土地の造成」がおこなわれたと考えられる。その際に土器が混入したのであろう。そして、土器からこれが中世のある時期（鎌倉時代内）におこなわれたと思われる。

第3に石組遺構（SZ6）については調査区の端で検出されており遺構そのものが不明であるため推測の域を出ないが、石組を境として検出面上に比較差が生じること、両検出面ともフラットな面である

こと等からこの石組は水田の界をつくる畦畔であった可能性が高い。南側には現在の水田の石組畦畔があり類似している。出土遺物は近世の陶磁器類であり江戸時代に作られたものであろう。そして、その後現在の石垣畦畔まで田面を広げたと思われる。

以上を概観して当遺跡には人の居住した痕跡を認めないが、中世において何らかの理由で土地の造成がおこなわれた形跡は認められた。その後部分的な拡張を経て今日に至ったと考えられる。山間部の狹隘な谷間で平坦面を有する土地が住居に利用されないとすると、それ以外では食料生産を目的として利用されたと考えるのが自然であろう。これらの事実は当遺跡が中世以来の水田であったことを示している。

（吉澤 良）

[註]

- ① 「名張市遺跡地図」名張市教育委員会 1984（赤目壇遺跡 No.198）
- ② 田坂 仁「堀・柏原遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域 墓藏文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1994
- ③ 「名張市遺跡地図」名張市教育委員会 1984（辻内遺跡 No.529）
- ④ 「名張市遺跡調査概要」名張市遺跡調査会 1979
- ⑤ 水口昌也、門田了三「蔵持黒田遺跡」『名張市文化財調査報告 第1回』名張市教育委員会 1978
- ⑥ 宇佐吉一、森川桜男「伊賀における弥生式土器と鉄器集成」伊賀郷土史研究 4 1982
- ⑦ 山本雅靖「古墳時代の首長墓の系列的築造と地域構造」『三重県史研究 第3号』三重県 1987
- ⑧ 水口昌也、門田了三他「鴻之巣遺跡」名張市教育委員会 1990
- ⑨ 「名張市遺跡調査会概要」名張市遺跡調査会 1978
- ⑩ 水口昌也、門田了三「夏見庵寺」名張市教育委員会 1988
- ⑪ 吉澤 良「天久保遺跡」『平成4年度県営畠場彌生事跡地 墓藏文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1991
- ⑫ 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化討論集 30周年記念』奈良国立文化財研究所 1983
- ⑬ ・松沢 修「信楽焼きの編年について」『中世の信楽－その実像と編年を探る』滋賀県立風土記の丘資料館 1990
- ・山田 義「下都遺跡群出土の捕鉢」『Mie history Vol.1』1990
- ⑭ 横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978



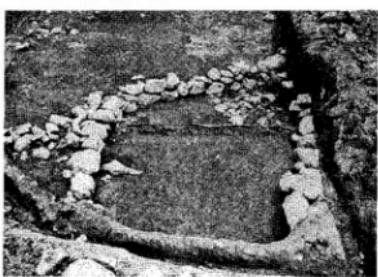
調査区全景（東より）



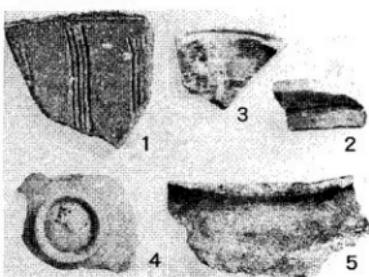
調査前風景（東より）



SZ 5（東より）



SZ 6（西より）



出土遺物（1：3）

---

三重県埋蔵文化財調査報告108-5

伊賀國府跡・箕升氏館跡ほか  
(第5次)

1993・3

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行 光出版印刷株式会社

---